佐五　所詮一應再應では、聞入れもあゐまいなれど、子は可愛うはござりませぬか。

曾平　可愛いゆゑにこの巧み。わりや又身共が刀をもぎ取り、身構へて居るは、何か、意見を諾かぬ腹立ちで、身共を切る心か。

佐五　勿體ない。どうして左樣な

曾平　イヤ〳〵〳〵、切る氣であらう。切られよう。成る程、其方が云ふ通り、おりや惡人だ。一家一門の面よごし。生きてゐては邪魔であらう。サア、切れ〳〵。

佐五　モウ〳〵、何しに私しが

ト寄る𪜈引附け

曾平　ヤイ、動きやアがるな……一家々々と吐かすさへ、薄穢ならしい三ぴん侍ひ。うぬがやうな奴を甥に持つた、この曾平次は何たる因果。鹽噌薪に不自由ゆゑ、お助けなされて下され、合力なされて下されと、度々身共が屋敷へ、無心にうせた事を忘れて、なんだ、この伯父樣を惡人だ。コリヤ、惡にもしろ、善にもしろ、身が料簡でする事だ。まだも一家のよしみを思ひ、出世させうと思ふゆゑ、話して聞かせりや、そばへた痴言。よくもうぬは吐かしたなア。

ト さん〳〵に打据ゑる。佐五右衞門起上がり、無念の思ひ入れ。

佐五　伯父御樣、イヤサ、曾平次樣、そりやあんまりでござりまする。

ト きつと云ふ。懐の赤子泣くゆゑ、ゆすぶりつけながら

コレ、この乳呑み子もあなたから、悴が代りに押附け養女。元より少身な拙者め、その上女房は長の煩ひ、扶持切り米のその外は、元結又は傘の骨、その内職もこの頃は、乳母と下男と手一つに、それもせぬゆゑお屋敷へ、時折々の御無心も、申さぬではござらねど、一家と申すは名ばかりにて、ついに一度合力なされて、下された事はござりませぬぞや。それに今の惡口は、あまりといへば

ト また赤子泣くゆゑ、ゆすぶりながら

こりや、どのやうに申しても

曾平　無駄を吐かさず、くたばつてしまへ。

ト また切りつける。佐五右衞門も懐の子をゆすりながら、いろ〳〵あしらふ。トヽ曾平次の刀を引つたくるとて、手があまつて曾平次の脇腹へ突つ込む。

ヤア、こりやアうぬ、現在伯父を

佐五　ヤ、よける刀の手があまつて、思はぬ深手。

曾平　伯父を殺すか。

ト大聲で云ふ口を押へて

佐五　生けて置いては里見家の大事。道ならぬとは思へども、こりやモウ是非に

ト懐の子泣くゆゑ、思はず手を放す。曾平次そのまゝ切りつけるを、かい潜つて見事に投げ、キッと見得。これより鳴り物。懐の赤子を枷に、危ふきタテあつて、トゞ佐五右衞門、曾平次を切り倒す。

この時以前の割り笄、あたりへ落ちる。佐五右衞門これを知らず、いろ〳〵思ひ入れあつて

悪人ながら現在伯父。赦して下され。南無阿彌陀佛。

トこの時向う、バタ〳〵と音するゆゑ、佐五右衞門ちよつと隠れる。雨車にて、向うより若葉、腰元の形にて、風呂敷をかむり、半次郎の子役、小さき大小、袴の形、手拭をかむり、若葉に手を引かれ跡より銀助、中間の形にて、懐へ赤子を入れ、春慶塗りの箱に萠黄の大紐附きしを抱へ、右三人とも俄雨にあひし體にて、駈けて出て來る。

若葉　ヤレ〳〵、恐ろしい雨ではあるぞ。若旦那様、さぞお冷たうござりませう。コレ、銀助どの、どうぞ仕様はあるまいかの。

銀助　もう〳〵、斯うなされませ。お前様方は、この木の下に、雨宿りしてござりませ。私しは近所の

出入り町人の所で、傘や提灯を借りて參りまする。其うち、このお孃様を預けまする。

ト若葉に赤子を渡す。此うち非人の藤兵衞、菰をかぶり出て、窺ひゐる。

この箱も、どうぞ濡れぬやうにして下され。中には小間物や、呉服物がござる。餘程の金目の物ゆゑ、大事にして下され。

若葉　お才様は、御寐なつておいでなさるゝ。濡れぬやう、この箱の中へ

ト箱の蓋を明け、赤子を入れ、蓋をよろしく立てかけ

斯うして置きませう。ちつとも早く行つて來て下され。

銀助　畏りました。

ト行きさうにして、右の笄の片しを踏み

アイタヽヽヽ。

ト取つて見て

オヤ〳〵、なんだ。こんな物が落ちてござりました。綺麗なものだ。若旦那、お前様に上げませう。

ト半次郎に渡す。

半次　こりや笄ではないか。慥かにもう片し、落ちてはないかいの。

ト これを聞き、非人藤兵衛、あたりを尋ね、片しの笄を拾ひ、見物に見せて懐へ入れる。

銀助　ナニお前様、そんな笄がどこにござりまするものか。そりや火箸の片々でござりませう。そんな事より、ドリヤ、借りて來ませう。

ト 逸散に向うへ走り入る。跡に若葉と半次郎、いろ〳〵支度してゐる。この時、藤兵衛、赤子の入りし箱を引淡ひ、赤子ぐるみ持つて向うへ走り入る。若葉悔りして

若葉　ヤア〳〵、大切なお嬢様とあの箱を、盗人めが……誰れぞ捕へて下され。盗人ぢや〳〵。

ト 半次郎を連れて、同じく走り入る。時の鐘になり、上の方より上總野、九十郎、乞食になりし體にて、合傘にて出てくる。下の方より佐五右衛門出て

佐五　今の女中が、取られたも女の子。

九十　此方の悴も今頃は

上總　乳に困つて

ト 佐五右衛門の懐の子泣く。

佐五　オヽ、泣くな〳〵。

九上　ヤ、そこにも幼ない

ト これを聞き、佐五右衛門は人殺しゆゑ、見附けられじとソツと逃げる。上總野、九十郎は、もしや先刻の庄兵衛かといふ心にて、窺ひ、顔見ようとする。この仕組み。佐五右衛門、花道へ行きかける

兩人思ひ入れあつて

もしや我が子の

ト これを聞き

佐五　エ。

ト 振りかへる。チヨンと木の頭。

九上　はてなア。

ト 不思議さうに向うを見送る。これをキザミにて、よろしく、ひやうし

幕の外、佐五右衛門、落ちつきし思ひ入れにて、向うへ入る。シヤギリ。

幕

六建目

役名――那須の八郎妻、藻女實ハ池藻の前。衛士又五郎實ハ木幡彈正景澄。輔雅の君。雀の宮

御遊の場

の神主、舌切忠太夫。烏丸中納言光兼。磯上飛仲太仲國。金剛太郎重遠。衛士、當作。同、太郎又。八郎一子、綠丸。伴の七郎熊武。官女、水無瀨の局。同、山路の局。同、三芳の局。田熊法眼俊次。進の藏人春俊。那須の八郎宗重。烏羽の大臣。玉藻の前。

本舞臺三間の間、正面網代塀。左右見切り、花盛り。こゝに烏丸中納言光兼、裝束、公卿の拵へにて、上の方に住ひ、磯上飛仲太、伴の七郎、上下、衣裳にてゐならび、下の方に水無瀨、山路、三芳、ぬるで、いづれも白無垢緋の袴の官女にて、めい〳〵海棠の花槍を持ち、東西に一人づゝ立ち別れ、花いくさの見得。三味線入りの中の舞ひにて幕あく。

トよろしく花軍の立廻りあり、この鳴り物にて向うより、田熊法眼俊次、白髮、法眼袴の形、これも海棠の花槍を持ち出て、花道にてこれを見て、つか〳〵と舞臺へ來り、入れ替つてこの中へ入り、下の方へ無性に突き立て、追ひまくり、しやんと留めゐる。皆々思ひ入れ。

官女　ヤ、あなたは田熊法眼樣。

飛仲　御位ゐ定めの花いくさ。供への稽古に横槍を入れられ

七郎　老大臣方と定めたる、女官達へ加勢めされて

光兼　若大臣方と定めたる、女官達を追ひまくられしは、さては貴殿も

官女　老大臣方でござりますか。

田熊　イヤ、どちら方と申すでもござらぬが、いはゞ兄君、殊に一旦大々臣の任を受け給ひし烏羽の君を、其まゝ元に直すのが、マア順道かと存じまして。

三人　こりやアさうありさうな事でござる。

水無　法眼樣はじめ、方々にもお聞きの通り、この程白川の大臣さま御平癒ありしも、那須の八郎樣の功とて、御勘氣御免のその上に

ぬる　今日八手の御鏡受取りの役目にて、再び參入あるとの事。

山路　それについては、かねて仰せ下りし人質とあつて、八郎樣の一子綠丸

三芳　先き程召されたとの噂でござりまする。

田熊　ムウ。その那須の八郎は、身共が娘藻女の不義の相手。その綠丸と申すは、二人が仲にもうけし幼な子。それゆゑ娘は勘當なせしに、貴殿も知つての通り、女の身にはためしない、神隱しにあつて行くへ知れず。然るに八郎めは、この程勘當御免を蒙むり、再び出仕を願ふと雖も、疑ひかゝりし者なれば、人質を差出せよと、彈正臺より申し渡されしが、すりや、いよ〳〵人質を差上け

し上、名鏡受取る役目を乞ひ受け、參入いたす彼れが胸中、方々には何と思はるゝな。

光兼　されば、その八郎と申すおのこは、おのれが守護なす八手の御鏡を、失うたるお咎めにて、高砂やアも謠ひ倦きたる、長々の浪人者。

飛仲　失させ給ふ御鏡は、玉藻の前より大臣へ差上げたれば、〻〻は取つたと思ひの外

七郎　僅かの功を笠に着て、勘當御免を蒙むつて、又ぞろ御鏡を受取りの役目、何ともハヤ、面の皮の厚い男でござる。

田熊　サア、その面の皮をかいて、出仕いたす彼れが胸中。方々油斷召さるゝな。

水無　それぢやによつて人質を、差上げたではござりませぬか。その綠丸と申すは、お前の實のお孫。其やうな事云はずとも

官女　皆々　いとしがつて遣はされいなア。

ト この時唐樂の音聞える。

七郎　アレ〳〵、最早大臣は、唐土驪山宮のおん催し。

官女　ほんに、樂の音色もたゞならぬ。

田熊　鳥羽の大臣には、玄宗皇帝〻〻御寵愛の玉藻の前には楊貴妃にて、いま酒池肉林の御遊興。

光兼　局たちには、はや〳〵南殿へ伺候あつて

官女　委細心得ました。

ト 右の鳴り物にて、官女四人奥へ入る。田熊法眼あとを見送り、思ひ入れ。鳴り物は管絃になる。

田熊　何はともあれ、人質を取り置かば、此方に七分の强み。だん〳〵手筈がうまうなつて參るわえ。

飛仲　それは格別、何かに附けて邪魔になるは白川の老大臣。かねて牒し合せし、調伏の計略は如何でござるな。

田熊　その儀も彼の金藤次と牒し合せ、この白絹へ調伏の祕文を、生々と記しおいてござる。

ト 箱の中より白絹と密書を出して、三人に見せる。

光兼　これは法眼、何をお云ひやる。こりやこれ白絹、どこに文字が書いてござるか。それ〳〵、下々にて致す、どふんとやらにさも似たり。

田熊　ハテサテ、貴殿なぞの知らぬ事。年寄つてもぬからぬ法眼。他人を憚る一つの手段。伴の七郎、密かにこれをお見やれ。

ト 七郎へ密書を渡す。

七郎　ドレ。……「田熊法眼どのへ、金藤次」。……ナニ〳〵。「老大臣調伏の祕文、他見を憚り、

唐土舜慶泊が藥法を用ひ認めたる間、矢張り白絹と相見え候ふ。尤も人間の血汐を注ぎかけられ候へば、忽ち文筆現はれ申し候ふ。」

飛仲　すりや、この白き絹へ、人間の血汐を注ぐ時は

三人　天晴れ妙計。

ト手紙を法眼へ戻し、思ひ入れ。法眼懐中して

田熊　この白絹は伴の七郎、葎壁門の乾の隅へ、土を穿つて人知れず

七郎　埋める手段、心得ました。

光兼　成る程、法眼には身に引受けて、よく若大臣の肩を持ちやるな。

飛仲　それといふも鳥羽の大臣、まこと先の大臣の胤ならず、素性を糺せば法眼どの

田熊　コレ

ト押へる。この時向うより又五郎、白丁、衞士の形にて出て來り、花道に手をつき、こなしあつて

又五　申し上げまする。

田熊　其方は衞士の又五郎。

三人　あわたゞしい、何事ぢや。

又五　ハッ、只今陽明門へ、田舍の神主らしき者、怪しげなる女を一人同道いたし、法眼樣へ直き〳〵に、お目にかゝりたいと申しまするが、通しませうか。いかゞ計らひませう。

田熊　ムウ。合點のゆかぬ。その怪しげなる女子と申すは、もしや行くへ知れざる身が娘の、藻女ではないか。ハテナア。

ト思ひ入れ、又五郎向うを見て

又五　兎かう申すうち、アレ〳〵、その女はおめず臆せず、此ところへ、參りまするワ〳〵。

トてんつゝになり、向うより當作、次郎又、衞士の形、六尺棒を持ち、藻女は前幕の衣裳方々破れ、髪も亂れし體。忠太夫、白き行衣のなり、手甲脛引き、旅の形にて、藻女を連れ、出て來り、花道よき所にて

仕丁　下がれ〳〵、下がりをらう。

忠太　アイ〳〵、下がるは下がりやすが、田熊法眼どのに逢つてから下がりさする。

藻女　それまでは一戸上がる。上がるわいな。

當作　ヤア、田熊樣と、わいらがやうな氣違ひ女と

次郎　さぼてんの幽靈に、お近附きは無えワ。

二人　下がれ〳〵、下がりをらう。

藻女　イエ〳〵、上がります〳〵。

ト爭ひながら、この人數本舞臺へくる。田熊法眼、藻女を見て

田熊　ヤア、わりや行くへなくなつた、この法眼が娘でないか。

藻女　アイ、わたしや女子ぢやによつて娘。男なら忰。

又五　ア丶、神隱しにならしやつたといふ、法眼樣の御息女でござりまするか。

皆々　成る程、變な調子だわえ。

忠太　ヤレ〳〵、嬉しや。左樣なら、あなたが田熊法眼樣でござりまするか。私しは下野の國、雀の宮の神主、舌切忠太夫と申す者。この度紀州熊野本社へ參詣いたしました下向の折柄、その山中にこの女中が、何かキヨロリカンとしてゐらるゝから、何人だと聞いても、何だか一向他愛の無い事ばかり、親はと聞けば、都の內で田熊法眼といふ者の娘。自らも以前は大館へ宮仕へせし者ぢや、其方都へ連れ參れと、何か大風な物の云ひやう。氣違ひかも知れませぬゆゑ、否とは云つて見たが、何も後生と、今日まで私しが路銀で、やう〳〵爰まで連れて來ましたが、聞けば違はぬお前の娘御、慥かにお受取りなされませ。

田熊　成る程、身共が娘に相違はないが、此奴は那須の八郎といふ者と、不義いたした科によつて、親子の緣を切つて勘當したれば、あかの他人。此方に毛頭かゝり合ひはないぞ。

忠太　エ丶、そんならなけなしの路銀を遣つて、連れて來た上に、……ほんの骨折り損の草臥れ儲けか。こいつはとんだ目にあつたわえ。

又五　マア、何はともあれ、お娘御の、神さそひにあつた話しを

藻女　サア、不義の科から勘當受け、どこを便つて、この身のお詫びをと、くよ〳〵と思うてゐるうちに、何か脊の高い山伏樣が來たと思はんせ。そこでその山伏樣が、目をねぶつて、おれと一緒にと、わたしをおぶうて、行く道々も、そつと目を明いて見りや、まん〳〵たる海の上。又その雲の上。峯やら、谷やら、越すやうに思うたが、その山伏樣が云ふには、サア、こゝがおぬしとおれが棲家ぢやと云ふを見れば、家は無し、杉の木が、によき〳〵とおひ重なり、夜明けて見れば、その山伏樣は鼻の高い大男。ところへ又、鼻の高い坊樣がござんして、おれは僧正坊といふ者、われが嫁入りの仲人ぢや、さて聟といふのが太郎坊、次郎坊は添ひ聟。イヤモ、來る人も〳〵、鼻の高い衆ばかり。それから、喜びぢや〳〵と云ひ出して、先づ落ち附きの吸ひ物は、蛤でなうて生栗。三々九度の杯ごとも、冷酒にあらで熱湯酒。花聟どのが鼻の先を火傷するやら、亂騷ぎ。まづま

づ、それから、夫婦になつて暮らすうち、亭主の鼻の高いでおけばよかつたに、ふとした事で、わたしや出來心でな、居候ふの木の葉天狗と間男して、追ひ出されると思つたら、いつか熊野の山の奥とやら、そこでこの顔の長い男に逢つて今の譯。わたしが思ふに、大方十日ばかりも、天狗どのと女夫になつてゐやんした。なんとマア、きやうとい女子でござんせうがな。皆さん、愛い奴ぢやと褒めてやつて下さんせえ。

トいろ〳〵仕方話しにて話す。皆々思ひ入れ。

田熊　ヤレ、益體もない物の云ひやう。勘當は致したなれど、法眼が一人の娘を棒に振つてのけた。コレ、娘、われが神さそひになつて、今年で丁度六年になるわやい。

藻女　それはマア、われ知らず、長逗留いたしましたわいなア。

又五　モシ、法眼樣、マア〳〵、何事もなくお歸りになつた娘御樣。めでたい次手に、どうぞ御勘當を光兼　それ〳〵、麿も烏丸なれば、天狗とは羽根仲間。まんざら他人でもない。只管我れ〳〵に免ぜられ

飛仲　左樣々々。御息女の勘當は、免されて遣はさるゝがようござるて。

田熊　エ、コレ、惡い奴なれども、一旦天狗道に落ちたを腹癒せに、いゝワ、勘當免してくれるワ。

藻女　それでわたしも、鼻が高うなつたわいなア。

忠太　ヤレ〳〵、それでこそ、この忠太夫も、世話甲斐があつて、鼻が高うござります。

當作　イヤサ、鼻はさのみではないが、顔は長いてナ。

忠太　エ、、お前方は、おれが顔の長いのは、今始まつた事ぢやァねえ。古い〳〵。

又五　ほんに、古いと申せば、お娘御樣のお召し物が、あまり見苦しくなりました。お召し替へになつてはどうでござります。

田熊　イカサマ。コレ、當作、次郎又、娘を長局まで連れて行て、はした女どもに云ひ附けておくりやれ。

兩人　畏りました。

又五　コレ、雀の宮の神主どの、こなたも臺所へ行つて

藻女　飯なと食べたがよいわいなア。

忠太　ハイ〳〵。左樣なら、後方お目にかゝりませう。

當作　サア、ござれ。

ト管絃になり、次郎又、當作先きに、藻女と忠太夫下座へ入る。

田熊　ハテ、不思議にも存命にて、歸る事は歸りをつたが、以前に變る娘が素振り。
又五　折に幸ひ、今日那須の八郎どのもお出でになるとの噂。これでは聟にお取りなさるゝでござりませうな。
田熊　イヤ、聟などには、いつかな〳〵。今日八手の鏡の受取りさへ、法眼が氣に入らぬに、白川の大臣、頭痛の御痛み祈りの爲とは表向き、彼れめは安部の泰親と合體なし、當大臣御寵愛なる玉藻の前を、怪しき女なりと老大臣へ申し上げ、鏡を以て玉藻の前が實性、見出さんとの計略と、この法眼は存ずるが、方々には如何思はるゝ。重き役目を蒙むりしこそ幸ひ、又ぞろ彼れめを
三人　深い所へ
又五　おやりなさるゝ目ろみかな。
四人　ヤア。
　ト思ひ入れ。又五郎は手早く田熊法眼の持ち來りし花槍を取つて
又五　此お槍は、卽ち海棠の造り花。そんならこれが花いくさの
　ト田熊法眼の方へ突き出す。田熊法眼思ひ入れあつて花槍を取り
田熊　衞士に似合はぬ詞の機轉。どうやら役にも……オヽ、幸ひ。

　ト田熊法眼は皆々に囁く。
三人　そんなら彼れめを
又五　エ。
田熊　大事を聞いた上からは。……エイ。
　ト田熊法眼、礫を打つ。又五郎受け留め、これを見て
又五　こりやコレ、お金。こりやどうだ。
田熊　オヽ、不審は尤も。コレ。
　ト囁く。又五郎思ひ入れあつて
又五　アヽ、そんなら今日の花いくさ。若大臣方と名乘つて出て、わざと不覺を
田熊　コリヤ。……合點か。
　ト思ひ入れ。
又五　それにしては、あまり不束かなこの金子。
三人　骨は折らさぬ。我れ〳〵も。……エイ。
　トめい〳〵順よく包み金を礫に打ち附ける。これを又五郎、一々見事に受け留める思ひ入れあつて

又五　ヤ。又ぞろ三包み。

ト につこり思ひ入れ。

これなら承知。ムウ。

ト 兩手を脾腹にあてゝ倒れる。

二人　ハテ、氣の早い。

田熊　それでゆかずば……コレ。

ト 花槍の仕込みを拔いて見せる。

三人　そりやソレ、仕込みの

田熊　コリヤ。

ト 押へる。よろしく管絃にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、結構なる九尺の唐屏風、緞帳の上下唐垣。芭蕉の葉の見切り。舞臺前所々に寄せ石、これに牡丹の造り花よろしくあしらひ、三味線入り誂への唐樂。この道具とまると、よき所まで押し出す。

ト 竹笛の入りたる誂への雲上なる獨吟になり、よきほどに唐樂あしらひにて、三方の緞帳を卷き上げる。こゝに鳥羽の大臣、唐裝束、玄宗皇帝の拵へ。玉藻の前、楊貴妃のこしらへ、好みの通り、笛を調べゐる見得。よき所に誂への臺に八手の鉾を飾り、獨吟一くさり切れる。兩人こなしあつて

鳥羽　雲にはいせう(?)を帶び、花には姿を思ふ。その唐土の玄宗と、貴妃が浮名を流せしも

玉藻　天の河風小夜吹けて、しかも文月七日の夜、驪山の宮の手枕に、するな帝の勅諚。

鳥羽　今宵は星も逢ふ夜にて、天にあつては比翼の鳥、地にあらば連理の枝。

玉藻　それは巫山の朝の雲。

鳥羽　ゆふべの雨と誓ひしに

玉藻　見ぬ唐土のさゞめ言。

鳥羽　それを移して日の本の

玉藻　大臣へ妾が及ばぬ戀。

鳥羽　イヤ、貴妃にもまさる玉藻の前。

ト 手を取る。

玉藻　大臣様

鳥羽　ハテ、あてやかな

玉藻　オヽ、恥かし。

ト唐團扇にて顏を隱し、しなだれる。これより又獨吟になり、笛を奪ひ合ふ和らかな濡れの模樣あつて獨吟納まる。この時、下座より田熊法眼先きに、光秉、飛仲太、七郎に官女四人、誂への杯臺二つ口の銚子なぞ持ち、あとより當作、次郎又、海棠の花槍を持ち出て來り、皆々左右へ別れて住ひ、こなしあつて

田熊　ハテ、大臣樣には、今日御任定めの式。唐土鵲山宮の御まなび。

光秉　お羨ましき御遊興

七郎　戰は必定。身方の勝利。

飛仲　御代萬歲と、たゞ〳〵

皆々　おめでたう存じ奉りまする。

鳥羽　オヽ、麿を祝して人々は奏聞。

玉藻　君にもさぞや御滿足。……局たち、早く九献を、

官女　畏りました。

ト銚子、杯臺を持ち、立ちかゝる。この時、揚げ幕にて

呼び　輔雅君のお入り。

ト呼ぶ。田熊法眼思ひ入れあつて

田熊　ソリヤ

ト當作、次郎又に目くばせする。

二人　ハツ。

ト件の花槍をしごくと、鞘落ちて本身の槍になる。これを掻い込んで一散に向うへ走り入る。

鳥羽　ムウ、すりや輔雅が參入。ハテ、さてはいよ〳〵先大臣の嚴命によつて、任に就かん結構なるか。

ハテ、小ざかしい。

玉藻　もしも若大臣樣の代ともならば、君にはあらぬお別れかと、モシ、自らはそればつかりが、悲しうござりますわいなア。

トしなだれかゝる。

田熊　アイヤ、其お心遣ひは、御無用に遊ばされませう。我れ〳〵がよろしく

四人　計らひ置きましてござりまする。

ト思ひ入れ。又「お入り」と呼ぶ。三味線入り、早下り葉になり、向うより輔雅の若大臣、壺折衣裳、檜扇を持ち、若大臣のこしらへ。進の藏人春俊、上下衣裳にて參内傘をさしかけ、後より金剛太郎重虎、稚兒髷、白丁の露を取り、荒事師のこしらへ。これを當作、次郎又、槍にて取卷き、立廻りながら出て來り、花道にて

金剛　ヤア、我が君輔雅君に、何科あつてこの狼藉、惡くヂタバタ騒ぐが最後、うぬら一々、いけ首を引ツこ抜くぞ。

次郎　ヤア、手向ひひろぐと違命の罪。

當作　そこ一寸も

二人　動きやァがるな。

金剛　何を。

輔雅　麿が舍人に狼藉あつては、先大臣への恐れあり。藏人、とゞめい。

藏人　ハツ。……御諚なるぞ、金剛太郎、必ず荒氣を出すまいぞ。

金剛　でも。

藏人　コリヤ。

トこれにて金剛太郎ヂツとなり、この人數、しづ〳〵と本舞臺へ來て、よろしく住ふ。

水無　若大臣樣輔雅君には、お早うお出で

官女　皆々　遊ばされました。

輔雅　先大臣白川君、まつた當大臣の兄君お勸めにて、輔雅參入いたす折柄

藏人　日華門のほとりより、思ひもよらず伏せ勢起り、君をはじめ我れ〳〵を、劒戟を以てあの如くお圍みあるは、如何の儀でござります。

烏羽　オヽ、それは其方に覺えがある筈。弟には先の大臣に願うて、當大臣の任を奪ひ、押して大權を握らん、いはゞこれ謀叛も同然。

光兼　それゆゑ衛士に申し附け

次郎　取圍んだが誤りか。

皆々　なんと覺えがござらうがな。

輔雅　こは思ひもよらぬ方々のお詞。尤も先大臣の仰せには、當大臣政事を忘り、明暮れ玉藻の前が色香に耽り、不德の至りと世上の譏り。斯くの如きは天神へも恐れあり、麿に代つて任に就けとたつての御諚。さはさりながら、親兄の禮を重んじ、強いて辭退なしたれども

藏人　出でて返らぬ御仰せ、若大臣さまも思し煩ひたまふ折から、參上せよとの再度のお使者、さるによつて、進の藏人供奉仕り、參上いたしてござる。

金剛　その神妙な若大臣樣に、謀叛などと名を附ける田熊法眼、この重虎が目に物見せうか。

輔雅　天神地神も上覽あれ、謀叛などとは穢らはしい。必ず御疑念あらせらるゝな。

烏羽　イヽヤ、その詞僞りならん。其方安部の泰親と合體なし、我れに匹夫の相ありと、退隱の父大臣へ奏聞に及び、剩へ、これなる玉藻の前、八手の御鏡を不思議に取り得、大館へ守護し歸りし、大功ある女なるを、强ひて遠ざけんと計りしも、其方が指圖であらうがな。

輔雅　こは存じよらぬお詞。毫頭以て左樣の覺えは

玉藻　イエ〳〵、無いとは云はせぬ。自らにも畜類の相ありと、あられもない泰親の奏聞。これとてもそなた樣の、妾を遠ざけん、下心からでござりませうがな。

輔雅　何故あつてこの輔雅、左樣の企み致さんや。

玉藻　何ゆゑとはまざ〳〵しい。御身この玉藻の前に心を掛けられ、折に觸れては戀歌の手爾葉、手に取らず戻せしに、さては兄君を失ひ給ひて、自らを內子となして、大任に就かん下心、なんと覺えがござりませうが。

輔雅　エヽ。

ト惱りする思ひ入れ。

烏羽　ヤア、大任を望むのみならず、予が寵愛の玉藻の前に、心を掛くる憎くき輔雅、檢非違使に命を下し、きつと禁獄申し附けよ。

輔雅　おほろけならぬ御難題、一つも覺えは無けれども、檢非違使の辱めを受けんよりは、我れと我が手に、刃に伏して申し譯。藏人、參れ。

ト立ち上がるを、藏人キツと留めて

藏人　アイヤ、暫くお待ち下さりませう。……御兄弟の御爭ひを、藏人逐一承るに、とやかく論は無益の至り、幸ひあれに八手の御鏡。この日の本は神の御國。あの御鏡を誓ひに立て、曇らぬ心の潔白を

輔雅　いかにも、兄君の御疑念を晴らさん爲、この場に於て神に誓ひを

田熊　アイヤ、その誓言もどかしい。もうこの上は手ばしこく、かねて約束の如く、花いくさに勝たれた方をこそ、大任に就けまるらせん。當大臣の兵には、卽ち斯くいふ田熊法眼。

ト件の花槍を持ち、身拵へして前へ出る。

皆々　して、若大臣方の兵は何者。

ト此の時下座より又五郎出かゝりゐて

又五　若大臣方のお役目は、この衛士の又五郎めが、勤めまするでござりませう。

金剛　イヤ、心知れさる餘人は賴まぬ。若大臣方は、この重虎が、どいつ、どなたの嫌ひはねえ、一番相手になりますべえ。

ト立ち上がる。

輔雅　重虎、扣へい。たとへ老大臣の仰せをもどくとも、望みにあらぬ大大臣の位ゐ。その花いくさに負けるも幸ひ、この輔雅が心の潔白。

玉藻　すりや、いよ〳〵この場に於て、天永のむかし、兄弟宮のためしに習ひ、今、目の前に御位ゐ定め。

鳥羽　それは宿彌と當麻の蹴速、相撲の勝負に位ゐの爭ひ。

藏人　これは優しき海棠の、花の槍にて御位ゐの

田熊　花を咲かすか。

又五　花を散らすか。

光秉　花々しく、色香爭ふ

皆々　花いくさ。

玉藻　それをば御覽遊ばして

鳥羽　いでや賀杯を廻らさん。

又五　とく〳〵用意。

田熊　イザ

又五　イザ

二人　イザ〳〵。

ト三味線入りの白囃子になり、田熊法眼と又五郎、海棠の花槍を持ち、左右へ立別れ、拵へ事の立廻り。又五郎われを忘れて强くなる。田熊法眼と敵役、「滿うた〳〵」と仕方して、又「金をやる」といふ思ひ入れ。この度々に又五郎弱くなる仕組み。田熊法眼圖に乘り、手ひどく頭をくらはす。敵役ナシヤと褒める。又五郎腹を立て、口小言を云ひながら、田熊法眼を手ひどく押し附ける。

田熊　アヽ、これぢや〳〵。

ト金の仕方して見せる。

又五　イヤ、もう錢にも金にも替へられぬ。もう自棄だ。

トきつとなる。

敵役　コレ〳〵、これぢやく〳〵。

トあぶ〳〵して金の仕方して見せる。

又五　否だ〳〵。この品返す。約束變替へ。

ト光兼、飛仲太、七郎へ、最前の金を礫に打ち返す。この金皆々の顔へあたり、三人顔を押へて思ひ入れ。

サア、斯うしてしまつて、此方の思ふ存分に、今に腹癒せ。マカショトナ。

トこれより又五郎キツとなり、田熊法眼を弄り物にする立廻りの仕組み。此うち田熊法眼の懐より以前の密書を落す、又五郎手早く懐中して、田熊法眼をしたゝかに打ち据ゑ、又五郎は上の方に、田熊法眼は下の方に、この仕組み納まる。皆々思ひ入れ。

藏人　勝負は見えた。若大臣の勝となつた上からは

女形　御大臣は輔雅君。

田熊　イヤ、まだ殘つて……下郎め、觀念。

ト花槍の仕込みを拔いて、突いてかゝる。當作、次郎作立ち上がり、金剛太郎も敵役も立ちかゝるを、

藏人留める。又五郎は田熊法眼が突きかけし槍の鞭首を取つてキツと引附ける。鳥羽の大臣こらへかれ

鳥羽　緩怠なり。おのれ匹夫め。

ト檜扇を振上げ、立ち身。又五郎左右を留め、この途端に皆々見得よく留まる。よき時分藻女、下げ髪に替へ、蒔繪の掛け盤に槍を持ち、出かゝりゐて、この時中へ入り、鳥羽の大臣をとめ

藻女　これは〳〵、大臣樣、久しぶりでお目もじ致しましたわいなア。

鳥羽　ヤヽ、其方は先年、惡神の爲に誘引せられし、法眼が娘の

官女　藻女さんではござんせぬかいなア。

鳥羽　留めるな、藻女。憎くい匹夫め。麿が手に掛け

ト又五郎へ立ちかゝる。

藻女　これは蓮葉な大臣樣、マア〳〵、お待ち下さりませ。……ほんに、蓮葉といへば、あの井戸に桐の葉が落ちてあつた。其方、拾うておぢやいのう。

又五　ハイ〳〵、お庭の掃除は衞士の役。

田熊　約束違へし又五郎め

敵役　よく深い所へやりをつたな。

次郎　その返報は、宮奴仲間が

當作　ちよつと、斯うして。

ト左右よりかゝるを、ポン〳〵と投げのけ、又立ちかゝるを、双方へちよつと締め上げ

又五　ハヽヽヽ。同じ仲間の竹熊手、ほでさしひろぐは、いゝ、ほうきに御苦勞。ドリヤ、お庭でも掃くべいか。

ト兩人を引ッ立て、こなしあつて下座へ入る。

田熊　いらざる所へ娘の藻女、おのれが知つた事では無いワ。すッこんでをらう。

藻女　ハイ〳〵。左樣なら私しは、おまんまを食べてしまひまする。どなたもお許しなされませ。

ト飯を食ひにかゝる。藏人こなしあつて

藏人　たとへ若大臣にはお望みなくとも、一旦の契約なれば、花いくさに勝つたる上は、大臣の位るは、輔雅君でござりませうがな。

敵役　サア、そりやア

金剛　但し其方は負け腹で、横車を押さつしやるか。

敵役　サア、そりやア

皆々　サア〳〵〳〵

ト思ひ入れ。玉藻の前こなしあつて、鳥羽の大臣へしなだれ、囁く。大臣こなしあつて

鳥羽　いかにも、玉藻の前が申す通り、たとへ花いくさには勝つとても、道に背きし不徳の弟、大任に就けんとは思ひもよらず。コレ、先大臣の仰せなりとも、いつかな〳〵。たつてとあらば先大臣をも、きびしく押し込め、弟は遠流に處し、その外、麿に逆らふ生公卿ばら、一々罪科に申し附ける。こゝ旨きつと心得い。

敵役　ハヽア。

藏人　こは大臣の仰せとも存ぜず、一旦の御諚も世上の鑑、御異變とあつては世は常闇。

田熊　ヤア、善惡ともに、出でゝ返らぬ君の仰せ。

飛仲　いで、我れ〳〵が、目にもの見せうか。

光兼　詞を背けば違命の罪人。

金剛　ヤア、横しま非道の生くら刀

藏人　この藏人に立たうと思ふか。

敵役　オヽ、立てゝ見せう。
金剛　見せよ。
敵役　見せうワ。
皆々　なにを。
　　ト皆々キツとなる。此うち藻女、飯を食ふことあつて、この時眞中へ出て
藻女　そりや皆さん、無理ぢや〳〵。
田熊　とは又、なぜ。
藻女　オヽ、お腹がくちいわいな。
田熊　ヤイ、娘、又してもわりやア出しやばつて、何が無理ぢや。それとも譯を存じてゐるなら、それを申せ。
藻女　皆さん方、時節が參りませぬ。
皆々　なんと。
藻女　たとへ人間に幸ひが來ようが、笑ひが來ようが、一寸先きの見えぬは人間の悲しさ。そこを見拔くが、しばしのうちも、天狗と夫婦になつて、一生高い所から見下ろして、あの人は、いつの幾

日に幸ひが來る、この人は、何月の幾日に願ひが叶ふといふ事は、見通しの藻女。それぢやによつて、まだ時節の來ぬうちは、わッぱさッぱと爭ふは、皆さんの無理といふものでござんす。
烏羽　ムウ。たとへ大臣の位ゐにをつても、禍福の到るは計られぬ人界の常。しばしも魔道に入つたる藻女。して、麿が上なき位ゐの望みはいかに。
藻女　ハイ、叶ひまする。
敵役　して、我れ〳〵が大望は。
藻女　叶ふ段ではないわいなア。
玉藻　コレ、妾が願ひは。
藻女　ハイ、玉藻の前樣の願ひが叶へば大事
玉藻　エ。
藻女　サア、隨分叶ひまする。
田熊　それが定なら、災ひも三年とやら。
藻女　果報は寢て待てと申しまするぞえ。斯う見渡したところが、皆樣のお望みも、きつと叶ひまする程に、どこへなと行つて、裸にでもなつて、晝寢して待つてゐやしやんせ。まだ暑うござるわい

なァ。

田熊　そんならこの場は藻女に

敵役　預けて退去。

藻女　若大臣様にも清龍寺へ

藏人　お成りとあらば、供奉は我れ〳〵。

輔雅　大臣のお怒り和らぐやう、よしなに頼む、藻女どの。

烏羽　心知れざる輔雅を、方々警護。

敵役　ハァ、。

トこなしあるを、立役支へて

皆々　まづ、入らせられませう。

ト管絃になり、輔雅先きに、藏人、田熊、七郎、飛仲太、光兼に女形附き、金剛太郎も隠つて入る。藻女殘る。引道へて下の方より忠太夫、結構なる蒔繪の飯鉢を持ち、ウロ〳〵して出て來り

忠太　ヤレ〳〵、腹がペコ〳〵するから、茶漬けを一杯下せえと云つても、下々だの、はしただのと安く云やァがつて、搏ひ附けねえから、あの臺番所とやらで、飯櫃をちよろまかして來たが、ァ、

コレ、そこらに椀でも茶碗でも無いかしらん。

トうろ〳〵してそこらを尋ねる。藻女これを見て

藻女　コレ、其方は飯食ふなら、髮に掛け盤があるぞえ。

忠太　ヤァ、お前は天狗さんのおかみさん。ヤレ〳〵、地獄にも知る人、ドレ、ゆつくりと飯でも食ひませう。

藻女　飯ならわしが給仕してやらうわいな。

忠太　それは憚りでござりやす。どうでも馴染の人でなけりや話しが解らぬわい。

ト忠太夫飯を食ひかゝる。烏羽の大臣これを見て

烏羽　見れば一飯の食事を致すを、喜見城の樂しみとも見ゆるが、ハテ、下々と申す者は、うらやましいものぢやなァ。

玉藻　して、大臣のお樂みわえ。

烏羽　そりや云はいでも知れた事。この日の本の名所舊跡、又は花紅葉を寄せつくしても、其方の色香に代へる樂しみは無いてや。

玉藻　あの儚りなおことば。過ぎつる夜半も、お情け薄い御諚、自らは、よう聞いてゐましたわいな

ア。

トつんとする。

鳥羽　何を玉藻が申すやら。そちや、無き名の濡れ衣を、麿に着せるのぢやな。

忠太　なんだ、ぬぎおきの濡れ衣を着せる。それよりは、仕立ておろしの浴衣でもかぶせればいゝに。

藻女　これはしたり、飯食ふうちは物云はぬものぢや。それ〳〵、口のはたに飯粒が附いてあるわいな。

コレ、そしてあなたは、大大臣様ぢやぞえ。

忠太　エヽ、大大臣様だ。そりやァ大變だ。こんな事を云つて、罰があたりやしまいか。モシ、御覽な

されませ〳〵。……ドレ、もう一杯替へようか。

玉藻　それぢやによつて、自らには秋の風ぢ

鳥羽　コレ、なんの其方に秋の風。

玉藻　イヽエ、秋風ぢやわいな〳〵。

忠太　モシ、天狗さんのおかみさんえ。この暑いのに、秋風ぢや〳〵と云はつしやるが、ありやァマア、

どうしたのだえ。

藻女　ありや大大臣様の女夫喧嘩ぢやわいなァ。

忠太　エヽ、そんならァノ大大臣様も、女夫喧嘩をするものか。こいつは珍らしい。

藻女　サァ、大大臣様の女夫喧嘩も珍らしいが、わしが今までゐた、杉の棺の夫婦喧嘩は、又おつなも

のぢやわいな。大天狗の亭主が、片肌脱いで横を云ふと、小天狗の女房が勇み肌で、中ッ腹を云

ひながら、亭主の胸ぐらを取るかと思へば、長い鼻へ取り附いて、やつさもつさ、鼻ねじりが始

まるわいなァ。オヽ、羽團扇の投げ打ちやら、亂騒ぎ。モシ〳〵、あなた方、女夫喧嘩なら、ち

つと投げ打ちの稽古をなされませ。

忠太　それ〳〵、なんでも投げ打ちをしなければ、夫婦喧嘩の形へは入りませぬ。

鳥羽　ムウ。して、その投げ打ちとやらんは、いかやうに致すものぢや。

忠太　投げ打ちの仕やうは、わたしが教へて上げやせう。……斯う向う鉢巻きで、片肌脱いで「エヽコ

レ此あまァ、長屋あるきばかりしやがつて、又よく亭主の讒訴ウ云やがつたな。叩ッくじくぞ、

山の神め」……と云ひながら、何でもそこにある物を、手當り次第に抛るのでござりまする。

ト飯櫃の蓋を投げて見せる。

鳥羽　ハテ、いかうむづかしいものぢや。……この久方のあまめが。千早振る神代もきかぬ男宮の、さ

かしらを云ひ立てる、この足引きの山の神めっ。

ト思ひ入れあつて、飯つぎを抛り

斯樣いたすのか〳〵。

忠太　ハヽヽヽ。マア、そんなものサ。

玉藻　アレ〳〵、大臣にはあのやうに宣ふが、自らは如何いたすればよいのぢや。

藻女　モシ、斯う仰しやりませ。

ト玉藻の前に囁き、教へる事あつて、玉藻の前呑みこみ

玉藻　アレ、大臣の宿六どの、妾が顏を踏み給うて、姫一人をはぐませかねる、働きのない大臣樣には飽きた程に、早う去り狀とやらの、仰せを賜はりたいわいなァ。

ト藻女に教ばり、こつぷ杯臺などを投げ散らす。

藻女　サア〳〵、それでよし〳〵。サア、これからは、仲直りの一段ぢやく〳〵。

忠太　それ〳〵、仲直りに一つ締めませう。

鳥羽　それは如何いたすのぢや。

忠太　いかにも唐人の眞似をしてござるとて、仲直りにまで通辭がいるか。

藻女　サヽ、何であらうと、私しどものするやうに遊ばしませ。

四人　ヨイ〳〵〳〵。

ト手を打つ。これを見ながら、鳥羽の大臣、玉藻の前、不器用に手を打つ。この音に又五郎、呼ばれると心得し思ひ入れにて、竹熊手を持ち、下の方より出て

又五　ハヽア、お手の鳴つたは、御用でもあるかしらん。

ト下の方へつくばひゐる。皆々これを知らず、兩人は屋體へ上がり、こなしあつて

玉藻　モシ、大臣樣、以前の如く睦しうなつたる上は、この末とてもお見捨てなう

鳥羽　なんの見捨てゝよいものか。この國にも替へられぬ其方ぢやもの。

玉藻　そりや御眞實の仰せでござりますか。

鳥羽　彼の名鏡を誓ひに掛け

玉藻　仇し心のないやうに

鳥羽　其方一人を月雪花

玉藻　片時お側を

鳥羽　離れず、離さず

玉藻　夜のお伽に

鳥羽　比翼の枕。

玉藻　嬉しうござんす。

鳥羽　可愛の者やの。

ト兩人よろしくあつて抱く。

忠太　こればつかりは通辭はいらぬ。

藻女　サ、、閉帳ぢや〳〵。

ト唄になり、緞帳をおろす。これにて又五郎ウンと目を廻す。忠太夫、藻女惚りしく

忠太　ヤア、あの人は、目を廻した〳〵。

藻女　ほんに、こりや衛士の又五郎ぢやわいな。

忠太　癇癪でも起つたのた。コレ、氣をしつかりと持たつしやい。

藻女　宮奴どの〳〵。

ト兩人して呼び生ける。藻女心附き、そこにある瓶子の酒を、無性に又五郎の口へ注ぎこみ、又呼び生ける。これにて又五郎、やう〳〵氣が附き起き上がる。

忠太　ヤレ、氣が附いたかいの〳〵。

又五　ヤレ〳〵、氣が惡いぞ〳〵

忠太　ヤア、そんなら貴樣は、今のいちや附きを見て

藻女　氣を失うたのかいなア。

又五　イヤ、氣がわるい〳〵と思つたら、カツとのぼせて、つい目を廻したさうだ。

忠太　エ、、助倍な男だわえ。

又五　大きにお世話でござりました。時に氣が附いて見りやア、何だか剛氣にい〻心持ちだ。なんでも二合五勺引ッかけたといふ心持ちだ。

忠太　そりやアその筈の事だ。どうしても氣が附かぬから、天狗樣のおかみさんが、やみ雲にこなたの口へ酒をつぎ込んだのだ。

藻女　コレ、お館樣の酒を振舞うたぞや。

又五　アヽ、そんならお杯を頂戴したのだな。何でもい〻わえ。アヽ、い〻心持ちだ。心持ちはい〻が、氣が惡くつて堪へられぬ。モシ、天狗樣のおかみさんえ。どうぞしてくんなさらねえか。コレコレ、氣味合つて見る氣はねえか〻どうだ〳〵。

ト だん〳〵酔ひの廻りしこなし。

藻女　そんならこの藻女に、色事せいといふのかや。

又五　平つたく云やァさうサ。コレ、お前も鼻の高い亭主に追ひ出された面當てに、鼻の低い男と色になるのも、又氣が變つてよからう。どうだ、氣はねえか〳〵。

トしなだれる。

藻女　わしや色事は否いのう。

忠太　そんなら不承知かえ。まだ去り狀取らぬ、しかも天狗樣のかみさんと色事をして、こなた、鼻高どのに七兩二分渡はれるだらうぜ。

又五　鼻の高い人がイザゴザを云やァ、顏の長いこなたを渡りにやるからいゝワ。そんならいよ〳〵、お前は女房には否かえ。

藻女　女房にならう。

又五　エヽ。

藻女　それが、むづかしうなうてよからうぞや。

又五　イヤ、あんまり嬉しくつて又目を廻しさうだ。

忠太　成る程、天狗界を遍歷して來た程あつて、物事の解りは早いな。

又五　そんならいよ〳〵、お前は女房。

藻女　こちの人。

又五　きつとだね。

藻女　オヽくど。

又五　エヽ、畜生め。

ト引寄せて抱く。

忠太　成る程、大館といふ所は、とんだ所だ。あれといひ、これといひ、丁度二度だが、ァヽ、面が長い。

トこなし。管絃になり、奥より田熊法眼出かけぬて

田熊　ヤイ、娘、おのれは〳〵。不義の科にて勘當され、それにも懲りず、勘當ゆるすと其まゝ、人もあらうに、最前親に無禮をした下郎めと不義ひろぐ。おのれがやうなすそつぱりが、廣い世界にあらうかい。

藻女　サア、わしらさうは思ふが、下界へおりて男を持たぬと、天狗道へ立たぬわいなァ。

忠太　こりやァ娘御が尤もだ。亭主の天狗の去り狀は、この忠太夫が取つてやるワ。構ふ事はねえ、男を持たつしやい〳〵。

藻女　コレ、天狗どの、わしや今日から立派を男を持つて、こなさんを思ひ切るぞや。

ト空へ向つて云ふ。

又五　さうだ〳〵。今日からおれが、亭主ぢや〳〵。

田熊　ヤイ〳〵〳〵。心の違うた阿房同然な娘、何と云はうが、素性賤しい下郎めを、この法眼が聟に

は取らぬぞ。

又五　イヤ、素性は歴とした系圖を持つてゐる。

田熊　して、その系圖は。

又五　即ちこゝに。

ト最前拾ひし密書を出して見せる。

田熊　ヤ、そりやソレ慥かに。

ト寄るな、藻女隔てゝ

藻女　成る程、こりや好い系圖ぢやわいな。サア、父さん、聟に取らんせ〳〵。

又五　取らずば系圖をお上へ出さうか。

藻女　サア、取らんせ。

トギックリ思ひ入れあつて

田熊　エ、、いま〳〵しい、そんなら下郎を

又五　お前の聟に

忠太　さつさと取りやれ。

田熊　マア〳〵、取つた。

三人　そりや、斯うして取つたワ。

藻女　これから其方を

又五　帶紐解いて

忠太　サツサ、取つたり〳〵。

ト皆々手拍子にて浮かれる。よき時分より光秉、下座より出かけゐて

光秉　怪しい宮奴……捕つた。

ト又五郎へかゝるを、引廻して

又五　鵜の眞似をする烏猫どの。

藻女　鼠でも取らんせ。

ト兩人して光兼を突飛ばす。これにて光兼、忠太夫へこけかゝり、これより兩人猫の見得。田熊法眼と又五郎、藥女　けしかけろ。よろしく、管絃になり、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、高足の簾御殿、階、高欄、竹の節の欄間、金張り附き、左右網代塀。上の方に誘への井戸。うしろ軒口に結構なる大ぶりの螢籠を吊しあり。簾一杯下りてゐる。こゝに金剛太郎と伴の七郎、以前の白絹を引き合ひ、よろしく見得にて道具納まる。

ト兩人ちよつと立廻りあつて

七郎　こりやア重虎、身が所持なせし白絹に、手をかけて、何とする。

金剛　何とするとは怪しき白絹、この重虎に渡して行け。

七郎　小癪な素丁稚め、邪魔ひろぐな。

金剛　改め見るワ。

ト立廻りのうち、薄ドロ〳〵になり、發端の怪鳥二羽、日覆ひより下り、件の白絹を咬へ舞ひ上がり、桐の木の梢にとまる。

二人　南無三、小鳥が白絹を

七郎　この旨急いで鷲塚どのへ。

金剛　われには詮議が

ト かゝるを振り切り、一散に向うへ入る。金剛太郎續いて追ひかけんとする、この時揚げ幕にて

呼び　那須の八郎出仕。

金剛　八郎樣が出仕とめれば、折を窺ひ彼の白絹。ソレ。

ト梢に目を附け、心を殘し、奥へ入る。

呼び　出仕。

ト三味線入りの樂になり、矢張り薄ドロ〳〵、右の鳴り物へ雷序を打込み、所々に狐火出る。向うより那須の八郎、鬘にて長上下、大小の姿にて出て來り、花道にて舞臺に目を附け、キツと留まり

八郎　ハテ、心得ぬ。那須の八郎宗重が、身の誤まりの雲晴れて、忝くも今日今宵、館へ出仕の階下に到れば、籠洩る風のかはりこそ、大臣の御秘藏ある、亂菊と名けし名木。ことに集まる數多の狐火。梢に怪しき小鳥の白絹。仔細ぞのらん。恐れ多くも

ト つか〳〵と行き、刀を拔いて切り拂はんとして、桐の木の枝を打ち落す。これにて小鳥白絹を落し、日覆ひへ引いて取る。これと共に狐火消えて、雷序と樂打ち上げる。八郎白刃をチヤツと納め

狐火消えて、小鳥も飛び去り、殘るは白絹。誠に思はず桐の一葉、打ち折つたるは、ハテ、心がかりな。

ト簾の内にて

玉藻　桃花緣水に映じ、黄鳥南枝に啼く。……誰ぞ簾を上げい。

官女　ハア、

ト音樂、唄になり、簾巻き上がると、内に玉藻の前、十二單衣の形に着替へ、褥の上に脇息にかゝりゐる。よき所に結構なる香爐臺。うしろに琴を立てかけ、官女四人左右に附き添ひ、銀の燈臺をともしあり。官女、八郎を見て

御座間近う、何者ぢや。

八郎　ハッ、拙者ことは先達て、御勘氣を蒙むりし那須の八郎宗重。この度先の大臣、御惱平癒ましますこと、柳の大樹を切り折りし、某が功とあつて、御勘氣ゆりて召返され、今宵俄かのお召とあるも、先達て失させ給ふ八手の名鏡、玉藻の前様御所持との事。その名鏡は某に申し請け、立歸れとある身の面目。八郎宗重、御座を恐れ、只今の出仕。何卒、名鏡、偏へに願ひ奉りまする。

玉藻　すりや此程自らが、和歌の浦へ社參の路次にて、思はず手に入る八手の名鏡、先の大臣の仰せによつて、受取る役目の其方が、那須の八郎宗重か。

八郎　ハッ。

玉藻　公卿と武家とは拔群の相違、いはゞ大大臣の御不便、あまり筋目なき自らなれど、内子といはる上からは、受取る役は、公卿、殿上人ならんに、武家おこされし先の大臣の御胸中、何とも以て訝かしゝ。渡す妾は輕くとも、鏡は名におふ日の本の寶。殊更一たび失ひて、詮議とても仕出さず、自らが手に入りしを、ようも輕よしく、受取りにおぢやつたの。

ときつと思ひ入れ。八郎もこなし。

水無　内子の逆鱗、御尤もにはござりますが、先の大臣より使ひの武士。

ぬる　役目を受けし八郎が

山路　これまで勘氣のお方といひ

三芳　何卒武士の願ひの通り

水無　お聞濟み遊ばさるゝやう

四人　願はしう存じまする。

ト皆々思ひ入れ。玉藻の前は三寶の鏡を取つて

玉藻　然らばこれに飾りある、名鏡を其方へ

八郎　速かにお渡し下されませう。

玉藻　さほどまでに願ふ八郎、殊に自らに附添ふ者まで、今の勸め。大臣樣へは自らが、御機嫌よしなにとりなしせん。那須の八郎、名鏡すなはち渡すであらう。

八郎　ハッ、家の面目、冥加至極、有り難く存じ奉りまする。

玉藻　受取り渡しは禮儀あり。殘らず別間へ。

四人　ハッ。

ト管絃になり、官女四人は思ひ入れあつて奥へ入る。

八郎　然らば名鏡は八郎へ。

玉藻　いかにも。……其方へ渡す名鏡は

ト八郎を上よりよろしく見おろす。雲上なる合ひ方になり、玉藻の前思ひ入れあつて、側にある短冊箱より、短冊を出して上の句を書き

那須の八郎、其方へ渡すこの名鏡、受取つてたも。

八郎　ハッ。

トしと〳〵と階を上がり、件の短冊を受取り見て

名鏡ならぬこの短冊。殊に一首の上の句は

ト思ひ入れあつて

「夜や更けぬ、閨の灯し火いつか消えて」。こりやコレまさしく戀歌の上の句。

玉藻　閨の灯し火消えなんと、思ひ玉藻の胸の火は、藻に棲む蟲の、コレ、あの螢火と同じ事。云ふに云はれぬ恥かしい、啼かぬ螢の我れと我が、身で身を焦す胸のうち、推量してたもいなう。

八郎　すりや、玉藻の前樣には、拙者によみ給ひしこの戀歌。かゝる武骨の東武士、お弄りあるか、お情けない。

玉藻　イヽヤ、自らは僞り云はぬ。まこと其方に今逢うて、大小立派な那須の八郎、殿上には見もやらぬ、きつとしやつた殿振りに、恥かしながら

八郎　憚り多くも、御戀慕あつてか。

玉藻　心のうちを、推量してたもいなう。

ト檜扇にて顏を隱す。

八郎　エ、有り難や。忝や。いはゞ大大臣の御寵愛深き、この日の本の美人と呼ぶ、玉藻の前樣、御

心かけさせ給はるとは、武士の冥加に餘りし某。

玉藻　すりや、自らへ色よい返事を

八郎　罷りならぬ。

トきつと云ふ。

玉藻　ヤ。

八郎　エ、、お情けないお心に

玉藻　なんと。

ト合ひ方變る。

八郎　氏も素性も存ぜねども、上なき君に思はれ給ひ、内子とまで仰がれ給ふ、御身を以て不義密通、道に背きし人面獸心。

玉藻　ヤ。

トぎつくり思ひ入れ。

八郎　那須の八郎は誠の武士、左樣な戀歌は存ぜぬ、知らぬ。見下げ果てたる、流石は婦人。お怒りあらば御手討ち。命にかけてもお諫め申す。

トきつと云ふ。玉藻の前思ひ入れあつて

玉藻　すりや、自らが思うた事もいたづらに、その短册の詠歌さへ、仇となり行く妾が胸の炎さへ、苦しさ、つれなさ。……其方へ戀路が叶はねば、自らとてもその如く、所持する名鏡、なんのマア、破却なすとも渡しはせぬ。その御鏡もコレ、爰に。

ト三寶に飾りし鏡を取つて見せる。

八郎　ヤ、、あなたの願ひの叶はぬ時は

玉藻　いつかな鏡は、渡さぬ〳〵。

八郎　すりや、どのやうに願うても

玉藻　返事が出來ねば鏡は渡さぬ。

八郎　その御返事は

玉藻　サア

兩人　サア〳〵〳〵

玉藻　願ひを叶へて、たもいなう。

ト高欄にもたれ、上より思ひ入れ。八郎こなしあつて

八郎　道を守れば、今日の役目の等閑。叶はぬ時は、又もこの身は埋れ木の、先祖の家を失ふ時節。家を思へば道ならぬ

玉藻　不義と知りつゝ自らが、どうぞ願ひを

八郎　叶へますれば名鏡は

玉藻　すぐに其方へ

八郎　お渡しあるか。

ト八郎思ひ入れ。

玉藻　證據が見たい。

八郎　エ。

玉藻　僞りならぬ證據は卽ちこの短册、連續さする

八郎　すりや、私しに戀歌の下の句

玉藻　この短册へ

ト短册を差出す。八郎取つて、思ひ入れあつて、そろ〳〵二重へ上がり、硯を引寄せ、件の短册へ下の句を記し

八郎　憚りながら

ト差出す。玉藻の前取つて、よく〳〵見て

玉藻　わが影にさへ別れてしかも」。

八郎　「夜や更けぬ、閨の灯し火いつか消えて

玉藻　わが影にさへ別れてしかも。」しかも戀歌の、連續せしからは

八郎　名鏡お渡し下さるか。

玉藻　この日の本にかけ替へなき、寶は其方に

八郎　アノ、拙者めに

玉藻　渡されぬ。

八郎　ヤ、、すりや何ゆゑにお渡しなきぞ。

ト詰め寄る、

玉藻　不義者ゆゑに。

八郎　ヤ、、なんと。

玉藻　大臣の寵愛淺からぬ、妾に向うてこの戀歌、重ね〳〵の不義の科人。宿直の者ども、詮議しや。

ト奥にて

藏人 ハア、。

ト管絃になり、二重舞臺へ輔雅君、奥より平舞臺へ、田熊法眼、浦上飛仲太、進の藏人、めい〳〵手燭を持ち出て來り、八郎を見て

田熊 不義者ありとのたまひしが

飛仲 これに居るのは那須の八郎。

藏人 最早御勘氣御赦免の

輔雅 忠義の武士たる八郎が、御兄君の寵愛ある、玉藻の前へ

玉藻 いやとよ、若大臣のお詞さる事ながら、玉藻の前へ不義を云ひかけ、大臣をはじめ輔雅君を、調伏呪詛の兆しある、那須の八郎は不忠の侍ひ、心ず御油斷なさるゝな。

八郎 ヤア、女と思ひ心を許させ、われを不敵の曲者に、仕立てんとなす企みよな。

藏人 殊に貴殿は先達て、宿直の夜半に失ひし、八手の名鏡、玉藻の前の御手に入り、その身のあかりは立たねども、御惱平癒も貴殿の働き、その功にめでゝ今日も、名鏡受取るその役は、那須の八郎と嚴命ありしは、こりや先大臣が御心あつての事ならずや。さるによつて其許にも、一人の悴を人質

に差上げ置く。然るに役目を怠りて、又もや不義の疑ひ受けては、貴殿の武士が立つまいぞよ。

田熊 立つも立たぬも呆痴の八郎、先達て身が娘藻女と、不義を働き、親も許さぬ悴を儲け、今度は以前に上越す大膽、御臺所へ不義なぞとは、道を知らざる大だわけ。

飛仲 この上は官人ばらに申し附け、繩打つて獄屋へ引く。サア、八郎、御前に叶はぬ、きり〳〵爰を

ト立ちかゝるを、八郎立廻つてキッとなり

八郎 イ、ヤ宗重、御臺所へ不義なりとは、何を以て

玉藻 その證據は自らへ、今も送りしこの短册。戀歌と見せたるその下の句を、詠ぜし其方、これが慥かな不義の證據。まつた若大臣を調伏の心ある事察せしは、其方が出仕のその砌り、これなる桐の一枝を、切つて持ちしは、謀叛の心底。桐の葉による秋の夜の、月の鏡を渡さんや。不忠の八郎、これでも其方は云ひ譯あるか。

八郎 ヤ、、なんと。

輔雅 その枝、これへ。

飛仲 ハア、。

ト桐の枝を差出す。輔雅は玉藻の前に持ちし短册をも受取り、よく〳〵見て

輔雅　「夜や更けぬ、閨の灯し火いつか消えて、わが影にさへ別れてしかも」。こりや正に、忍びあはんず戀歌の心。八郎、近う。

八郎　ハッ。

ト階へおづ〳〵上がるを、輔雅は桐の葉の枝にて八郎を打擲する。八郎ハッと思ひ入れの後ずさりに、ツカ〳〵と下りて平伏する。

輔雅　いかに八郎、この短册は何事ぢや。戀歌を認め送りしは、云ひ譯もなき其方が越度。まことに尊き桐の一枝、打拂うた不忠者。斯樣の武士を大館に、とゞめ置くも恐れあり。急いで彼れを、遠ざけい。

飛仲　畏つてござりまする。八郎、立たう。

ト かゝろ。八郎思ひ入れあつて

八郎　某出仕の折に望んで、思ひがけなき玉藻の前樣、近習を遠ざけ、戀歌の上の句。返事なさねば御鏡は、渡すまじきお詞ゆゑ、是非なく記せしこの下の句。それをこの身の科となし、遠ざけんとは心に一物。裏の裏行く玉藻の前。彼の唐土の妲妃にも、おさ〳〵劣らぬその胸中。面は美女にありながら、惡鬼に等しき上からは、悔んで返らぬ申し譯。この場に於て

ト刀に手を掛ける。藏人留めて

藏人　すりや、其許は大館にて

八郎　階下を穢すも恐れあれど、只今の君のお詞、いと重きこの身の罪。藏人、介錯頼み入る。

ト思ひ入れ。藏人キッと留めて

藏人　早まり召さるな、今一應、申し譯さへ立つたる上は

八郎　イヽヤ、二度まで不義の汚名、世上の人の嘲りに、かゝらぬうちに

藏人　コレ、待つた。

ト八郎を留める。この時奥にて

藻女　たわけ者の那須の八郎、待て。

八郎　ヤ、なんと。

藻女　以前の女房藻女が留める程に、マア〳〵、待ちなさんせいなァ。

ト管絃にて、奥より藻女先きに又五郎、くはへ煙管に莨盆を下げて出て來り、又五郎はよき所に大あぐらにて莫のみゐる。八郎見て

八郎　ヤ、そちや行くへなうなりたる女房藻女。堅固でありしか。

藻女　お前も無事でゐさんす事、悴が事も別條なく、息災などゝいふ事も、爰にゐてゞも遠目から、何もかも、よう見て知つてゐるわいなァ。

八郎　すりや其方は只今まで、姿を隱し、いづれにありしぞ。

藻女　アイ、お前と不義の科あらはれ、爰にござんす父さんの、心に違うてちつとの間、天狗道へいざなはれ、これまで覺えぬ女の身で、天狗さんの豆腐とてこい、酒屋へ走れ、駕籠呼ぶ世話はなかつたが、使ひにあるくも枝から枝、人目に見ては女の輕業、木鼠野禽同然に、餘ッほど身輕になつたわいなァ。

ト藻女の樣子に目を附けて、思ひ入れあつて

八郎　常には似ざる藻女が、詞しどろに蓮葉なる、其ものごしは何とやら……コリヤ、女房。悴緣も成人してナ

ト何心なく寄るを、又五郎隔てゝ

又五　オット待つたり、八郎樣。今では女中はわしが女房。衞士の又五郎がお内儀だ。滅多に側へ寄つてもらひますまい。

八郎　すりや藻女が今の亭主、アノ其方が……そりや、誰れが許して。

田熊　その許し手は、この法眼。子まである女房の、ある身を以て忝くも、大臣の內子と寵愛ある、王藻の前樣へ不義云ひかけ、その身を知らぬ不屆き者。その胸中を見極めて、身共が許して娘の藻女、彼れめが妻に遣はしたワ。

玉藻　法眼とても一人の娘、添はす男を恨みてや、下部に遣はす胸中は、不忠不義と見極めつかん。さすればあつて益なき八郎、自らが目通りにて、縛り首うて、田熊法眼。

ト きつと云ふ。

田熊　畏つてござりまする。……サア、八郎、腕廻せ。

ト立ちかゝる。

藻女　アヽコレ、父さん、待ちなさんせ。八郎どのと緣切つたわたしが、構ふ事は無けれども、主をお前が手に掛けては、刀の穢れと思ふから、留めるぞえ。それに又、介錯さんしては、刃金がこの上、なまくら物にならうわいな。

田熊　そりや又、なぜ。

藻女　ハテ、八郎どのは戊の年戊の月戊の日戊の時の生れ。その緣を引いてやら、悴も同じ戊の年月日時の生れ。親子ともに畜生の、血筋があると心附き、影を隱したこの藻女。存へて添うてゐるな

れば、女房にまでも畜生の、うつらぬうちに此方から、思ひ切つたは何とマア、智慧のある女ではないかいなア。

又五　成る程、こりやア思ひ切り所ぢや。シタガ、先の亭主の八郎様も、女房子に倦いたやら、鏡を受取る人質に、我が子を先きへ寄越したは、思ひ切つたといふ心。この上女房の藻女が、身腹痛めた悴と思ひ、その子を持参の嫁入りは、おいらは少つと不承知だ。

藻女　そりや氣遣ひさしやんすな。腹は借り物。なんの悴をわしが方へ、受取つてよいものかいなア。

玉藻　こりや尤もな藻女とやらんが詞。かゝる不忠の那須の八郎。現在妻にも見限られ、そちや侍ひの道が立つまい。それでもおめ〳〵命が惜しいか。生害いたす心はないか。

八郎　馴染み重ねし妻にまで、うとまれし身の何面目、命は捨てゝも名は末代、切腹なして

ト刀へ手を掛けるを、藏人押へて

藏人　貴殿がこの場で自殺いたさば、老大臣の名へ不審かゝり、那須の家名は今日限り

八郎　絶えなん事の口惜しさに、いろ〳〵思へど、名鏡お渡しなきゆゑ

玉藻　然らば鏡は相渡さん。

八郎　ヤ、なんと。

玉藻　さほど思はゞ鏡は渡さん、さりながら、自らへ不義いひかけ、桐の小枝を切つたる科、その云ひ譯は、ありや、八郎。

八郎　サ、その云ひ譯は

トつかへる。

藻女　そりや云はいでも、腹切つて、命を捨てたら、云ひ譯も立ちませうが、その命を捨てもせず、役目を勤める仕樣はあれど、こなさん、そこへ心がつかぬか。

八郎　なんと。

藻女　ハテ、お前の生ませた緣丸、殊に役目の人質と、寄越したからは覺悟の上。年端もゆかぬあの子の命、思うて見れば、風の前なる灯し火同然。あの子に腹を切らすれば、その身の潔白、云ひ譯立てる。親子は同姓同血の、これが卽ち大臣へ云ひ譯。

又五　イカサマ、これはいゝ料簡。

藻女　なんと智慧者であらうがな。

八郎　すりや辨へなき子悴を、母の身として殺せとな。

藻女　それぞ卽ち下世話にいふ、親の因果が子に報ふ、道理と思ひ諦めて、親の手に掛け、あの子の介

錯。

又五　それで亭主も疑ひ晴れ、こなたを女房に持つのも安堵。

藻女　また我が子の介錯いたした上、その後にては悴の血汐、肉もろともに親の身で、賞翫させるがよい慰み、それを否むは心に一物。この刑罪は、如何思し召されまする。……なんと、よい智慧ぢやござりませぬか。

玉藻　こりや一しほのよい慰み。八郎、其方は如何思ふぞ。

八郎　縁は切つても藻女は、我が子に腹を切らすを勸め、我れは卑怯の侍ひと、人の譏りを受くるとも親にもまさる悴が忠義、殊には名鏡受取らば、先祖の家も立つの道理。御諚に應じて悴が介錯、切腹さするでござりませう。

玉藻　さある上は法眼用意。其うちこれなる御鏡は、其方へ。

ト田熊法眼へ鏡を渡す。田熊受取り

田熊　ハツ、法眼守護仕るでござりませう……官人小悴もろとも、用意の品、急いでこれへ。

仕丁　ハツ。

ト管絃になり、仕丁二人、大俎板を吊り出て來り、よき所へ直す。次郎又、當作。緑丸を引ッ立て出て來り

次郎　仰せに隨ひ、那須の八郎が小悴

當作　お目通りへ召し連れましてござります。

緑丸　ヤア、母さまいなう。

ト駈け寄るを、藻女思ひ入れあつて

藻女　コリヤ、緑、わが身は惡い父親を持つて、思はぬ災難、必ずわしを恨むまいぞや。コレ、八郎どのと縁切つた上は、今から其方の母ではない。さう思うて、サ、ぬしの手しほで成人しや。

ト八郎の方へ突きやつて、思ひ入れ。

緑丸　それでもわしは

ト藻女の方へ行くを、八郎引附け

八郎　イヽヤ、母とは縁無き其方。殊にこの場で某が、子に腹切らせ、親が介錯。必ず未練な死を遂げな。

緑丸　エヽ、アノわしを

ト慄ふ。玉藻の前目を附け

玉藻　子を捨つる藪は今眼前、身を捨つるは、アヽ、稀れなもの。いよ〳〵悴を身代りに、腹切らせなば名

鏡渡さん。さりながら、血汐の穢れ、鏡へ恐れ。まことに親の悲しみ、愁ひを拂ふは九献の用意。腹切らするを慰みに、妾は琴を。……その品これへ。

官女　ハア。

ト官女四人は長柄土器と琴を持ち來り、めい〳〵よろしく直す。

田熊　緣が切れゝば某が、孫と思はぬ面晴れに、三寸繩にその餓鬼を。

トかゝるを、八郎ちよつと立廻り、藻女は田熊を押へる。此うち八郎、刀の下げ緒にて緣丸を縛り、緣丸「ワッ」と泣き倒れるを、ありあふ手拭ひにて猿轡を掛ける。輔雅思ひ入れ。

輔雅　さはいへ不便の小兒の有樣。親の手づから我が子の介錯。

藏人　思へば殷の紂王の、その心にもおさ〳〵劣らぬ

ト玉藻の前思ひ入れあつて、ニッコリとする。又五郎も思ひ入れ。

又五　上々樣は九献の樂しみ。われらはこゝで德利酒。

藻女　他人にあらぬ親と子が、この悲しみは

ト思ひ入れ。

田熊　猶豫いたさば名鏡は

八郎　是非とも身共が

田熊　然らば餓鬼が切腹の、暫時四方をとり圍む

飛仲　その手配りは。……そりや。

仕丁　動くな。

ト左右より八郎を取卷く。

田熊　キリ〳〵、介錯。

ト立ちかゝる。

藻女　コレ

トちよつと田熊法眼を留める。これをキッカケに玉藻の前琴にかゝり、詠への獨吟になる。八郎思ひ入れあつて、緣丸を俎板の上へ仰向けに寢かし、刀を拔いて水をかけ、寢刃を合すことよろしく、件の白絹を出し、白絹を卷き用意する。飛仲太と仕丁取卷きゐて、皆々こなし。八郎は緣丸の腹へ突き立てんとして、いろ〳〵思ひ入れ。藻女は愁ひを隱し、見ぬふりをしてゐる。八郎おくれて切りかれるこなし。矢郎又、當作、この體を見て、左右よりかゝるを、突き退け〳〵立廻つて、この途端に緣丸の腹へ突き立てる。これまでに唄一くさり切れる。藻女見かれて駈け寄るを、田熊法眼押へて

田熊　コリヤ娘、なんで駈け寄る。
藻女　エ、わたしが思はずさし寄るは、あの琴の音に浮れ寄る
田熊　ヤ。
藻女　浮かれ〳〵し酒機嫌。
又五　浮かれて側へ
藻女　酔うたまぎれに一さしの
ト又寄るを、田熊法眼支へる。この時薄ドロ〳〵かすめて、雷序になり、狐火あまた出て琴の上へまとふ。又五郎はこれと一緒に思はず放心する。狐火、琴の絲の筋を渡る。これより早めたる琴の手になり、その音を出す。藻女は八郎の方へ思ひ入れあつて、扇を開き、酔うたるふりにて舞ひに事よせ、扇にて顔を隠して思ひ入れ。緑丸は苦しみ、おち入る。八郎は思ひ入れあつて、白刃を捨てゝ泣き落す。これで唄一ばいに切れる。藻女心附き、走り寄つて刀を取上げ、緑丸の首を打落し、白刃をすぐに八郎の目先きへ突き出す。八郎思ひ入れあつて、白刃の血を口にて拭ふ。この時また薄ドロ〳〵になり、狐火消える。又五郎こなしあつて
又十　我が子を親の身替りに、むごい目見する辛抱も

藻女　云はぬは天晴れ。
田熊　ヤ。
ト目を附ける。藻女思ひ入れあつて
藻女　大腰抜けの八郎どの。
八郎　これといふのも名鏡を
ト玉藻の前の方へ目を附ける。藻女は白絹へ目を附け
藻女　誠に我が子を介錯の、白刃を巻きし白絹に
又五　何か怪しき文字の様子。
ト両人引合せ見る。件の白絹へ血汐附きて、文字白くなる。田熊法眼驚き
田熊　さては最前渡したる、あの調伏の白絹が
藻女　エ、。
田熊　それを
トかゝるを、八郎キツと當てる。此うち矢張り薄ドロ、玉藻の前の顔、仕掛けにて白面の狐になる。
皆々見て

輔雅　ヤヽ、放心なしたる玉藻の前。面變りしこの體は。

藏人　年經る妖狐のその面差し。

藻女　さてこそ變化の所爲なるか。

皆々　事の實否を

ト藻女は件の白絹を持ち、つか〳〵と二重へ上がる。田熊法眼はこれを取らんと行きかゝるを、八郎また當てる。藏人も二重へ駈け上がり、皆々玉藻の前に詰めかけ

輔雅　お目覺まされよ

皆々　玉藻の前。

トこの聲に玉藻の前、フツト目を覺まし、元の顏になる。

藏人　いよ〳〵怪しき

トかゝるを、キツとなつて

玉藻　緩怠至極。

ト管絃になり、簾下りる。舞臺に八郎と法眼、飛仲太、仕丁殘り

八郎　我が子の切腹、見屆け召さるゝ上からは、八手の鏡は某へ、お渡しあれよ、法眼どの。

田熊　イヽヤ、この法眼が內子より、賜はりしこの名鏡、渡す事罷りならぬ。

八郎　今更表裏のその詞、是非とも拙者へお渡しあれ。

田熊　たつてとあらば汝も刑罪。飛仲太、彼れに繩打ち召され。

飛仲　心得ました。腕まはせ。

八郎　すりや、どうあつても

田熊　鏡は渡さぬ、こゝ放せ。

ト立廻つて田熊法眼振切り、正面の簾の中へ入る。八郎追ひ行くを、飛仲太と仕丁支へる。この時下座より金剛太郎走り出て、この中へ入る。

金剛　八郎どの、してお役目は。

八郎　おのれ、法眼、鏡を渡せ。

ト管絃になり、八郎同じく簾の中へ入る。

飛仲　狼藉働く八郎宗重。二人は童を、合點か。

次郎　心得ました。童め、覺悟。

ト金剛太郎にかゝり、立廻りのうち、飛仲太下座へ入る。あと三人よろしく立廻り。此うち奧より藏人、

ツカ〳〵と出て來り

金剛　春俊どの。

藏人　玉藻の前の怪しき樣子、先の大臣へ申し上げん。この旨其方は宗重へ。

金剛　心得ました。

藏人　さうぢや。

ト早三重になり、藏人は一散に向うへ入る。仕丁、金剛太郎へかゝる。

金剛　こりやァわいらは何とする。

次郎　疑ひうけた那須の八郎。

當作　腰押しひろぐ金剛太郎。

次郎　取つて押へて高手小手、縄かけて引く。腕廻せ。

金剛　小癪な兩人、そこ動くな。

兩人　腕廻せ。

ト立廻り。大ダテあつて、金剛太郎は兩人を下座へ追ひ込み

金剛　大臣の御前、心もとない。憚りうけて

ト階へ踏みかける。この時簾の中にて「エイ」と聲あつて、太刀音する。

ヤ、、あの太刀音は

トためらふ。ドロになり、簾の中より差し金にて、鏡飛んで上の方の桐の梢へ上がる。ト管絃になり、簾卷き上がる。中に鳥羽の大臣、那須の八郎の切り首を引下げ、血刀を持ち、藻女、田熊法眼、この樣子を見て、慄へてゐる。桐の梢の鏡、仕掛けにて光りさす。鳥羽の大臣これにキッと目を附ける。小鼓の樂になる。

鳥羽　ハテ、爭はれぬ鏡の威德。麿が居間とも憚らず、劍戟を振る那須の八郎、手討ちになせし血汐の穢れ。俄かの動搖。アレ〳〵、桐の梢に飛行する名鏡。內子がこれに居合さば、取り得ん事もあるべきに、あるに甲斐なき其方は藻女。

ト思ひ入れっ

藻女　大臣の御諚、誠にお道理。內子樣なら飛び去る鏡も、元へ戻らせたまふ噂。わたしは賤しき法眼が、娘なれども、てんぽの皮、この振り袖へ御鏡の

田熊　戻りなば親の面目、この上あらん。娘、鏡を取り得る仕樣は。

藻女　氏も素性もなけれども、內子にあらぬ藻女が、扇へもしや

鳥羽　取り得よ、藻女。

ト藻女持ちたる舞ひ扇にて、思ひ入れあつて招くと、ドロ〳〵烈しく、鏡は藻女の手へ渡る。直ぐに取上げ

藻女　ヤヽ、思はず鏡は藻女が、かざせし袖に戻らせたまふか。エヽ、有り難や、喜ばしや。

鳥羽　出かした藻女。名鏡これへ。

藻女　イヽヤ、名鏡は藻女が、慥かに守護する内子の役目。

田熊　なんと。

トこの時又五郎窺ひ寄つて

又五　鏡は衛士の下郎めが

ト奪ひ取つて行くを、鳥羽大臣引附ける。又振り切つて二重より飛び下りる。鳥羽の大臣續いて駈け行くを、金剛太郎支へる。この間に又五郎井戸の中へ飛び込む。田熊法眼驚き、行きかゝるを、藻女留める。鳥羽の大臣は金剛太郎を振切り、井筒へかゝる。井戸の中より槍を突き出す。鳥羽の大臣これを捕へて引く。これにて忠太夫、四天の形に着かへ、槍を持つたまゝ現はれ

忠太　大臣の俗性。

トかゝるを、鳥羽の大臣、槍を奪ひ取り

鳥羽　緩怠至極。

トきつとなる。

藻女　お騒ぎあるな大臣様、やんごとなき御身にも、妾が疑ひ。

鳥羽　ヤ、なんと。

藻女　父法眼も天下の敵。

田熊　その高言を

ト抜いて切り附けるゝ。藻女その刀を奪ひ取り

藻女　今こそ天の、これ御罰。

ト田熊法眼の腹へ白刃を突き立てる。鳥羽の大臣驚き

鳥羽　ヤア、娘の身として現在の、親を害すは神國の

藻女　この日の本には類ひなき大悪人。助けおかれず、手にかけまする。

田熊　大悪人とは何を以て。

鳥羽　女ながらも辨へなき

藻女　辨へあるゆゑ親どもへ、今こそ門火の庭前に、吊りおく螢の蟲籠を

鳥羽　なんと。

藻女　エイ。

ト簪を螢籠へ打ち附ける。これにて螢籠の前側碎け、螢飛び散る。これを合ひ圖に四方にて、門を固めの太鼓を打つ。皆々思ひ入れ。

鳥羽　螢の飛ぶを合ひ圖となし

田熊　所々にて合はす太鼓の音。

藻女　四門を固むる兼ねての手配り。

田熊　さては身共を

ト寄るを立廻つて、田熊法眼を二重より突き落す。鳥羽の大臣立ちかゝるを、金剛太郎、忠太夫、左右より支へる。

鳥羽　親に手向ひ、狂氣の女。

藻女　狂氣いたさぬ、自らが、親と存じて殺害なす。親を殺すが天下の爲。

鳥羽　親を殺すを天下の爲とは。

藻女　疑はしくば一通り、女ながらも藻女が、詳しく語つてお聞かせ申さん。大臣をはじめ父法眼、すさつてよつく承はれ。

鳥羽　やゝ、なんと。

ト誂への鳴り物。藻女は階に腰を掛け、キツとなつて

藻女　もと自らは、それなる法眼が娘、忝くも大館へ御奉公。然るに若氣の誤りにて、那須の八郎と不義密通、男子を儲けし事現はれ、八郎宗重お咎めうけ、我れもとも〴〵漂泊の折柄、夜毎に怪しき赤氣、大館に棚びく珍事、安部の泰親が内々の訴へ。これ正に、大臣の寵愛限りなき、玉藻の前の素性こそ、人間ならぬ妖狐なりと、聞きしもいつぞや紀の路なる、朧山にて怪しき光明。その時修行者に姿をやつし、又今日久々にて、親を便つて益もなき、戯れ事を云ひ立てゝ、入り込み見るに折よくも、別れし夫子に對面は、天の幸ひ時來り、妖狐の正體見出さんには、戌の年月日時揃ひし親子の血汐、天竺まかだ國金鳳山の藥王樹に、この血を注いで護摩木となし、御鏡を形代に、妖氣の祈りなす時は、極めて惡狐の性を現はす。これ唐土の雲忡子が、照魔鏡の祕法の第一。その戌の年の揃ひし夫子、忠義の爲に命を捨てさせ、あじやらに紛らし自らが、涙一滴こぼさぬは、右の護摩木を成就なし、天下の愁ひを拂はんと、その功ありて計らずも、我が子を切つたる血の

したゝり、この白絹にかゝると其まゝ、怪しき文字は自らが、素性を記して呪詛なす祕法。まことに妾は大臣の胤、藁の上より田熊法眼、水子の悴を產屋に入れ替へ、鳥羽の大臣と尊敬させ、大臣の胤の自らを、娘となして不義と云ひ立て、科に落して殺さん巧み、大臣の胤を絶やさん企て、それ存せしは法眼一人。大臣と申すは、筋目賤しき田熊が悴。その身は知らぬに極まれども、罪科のがれぬ神國の、一時に報ふ天の御罰。思ひ知つたか田熊法眼。……我れ男子にてあるならば、大大臣ともなるべきに、女子に生まれし果敢なさは、故なき旅に頭を下け、無念の月日を送りしも、斯かる惡事を見出さん爲。女なれども自らこそ、雲の上人の胤なるぞよ。侯人の田熊が一子たる、紛れ僞る似せ大臣、すさつて三拜仕れ。

ト早下がり葉になり、廣振り袖を詞の切れ目〳〵に脫ぎ、下には白衣やうなる肌着を着こみ、平舞臺を見おろし、白絹を差し附け、キツとなる。鳥羽の大臣、田熊法眼思ひ入れあつて

田熊　ヤア、この身に覺えなき高言。其方は田熊が實の娘、大臣の胤とは何のたわ言。

鳥羽　麿に向つて不埒の詞、僞りとは思へども、もしや實義に極まるや。これぞと申ず證據ありや。

藻女　證據は眼前名鏡の、飛び去り給ふを自らが、勿體なくも差招けば、忽ち戻らせ給ふこと、これぞ貴き血筋の證據。その上、紀州熊野の柳の大樹、根先きに埋めし箱のうち、輔雅君調伏の、あの人形に添へたるは、卽ち白絹と同じ秘文の田熊が手跡。

田熊　ヤヽ、すりや柳の木の根元に埋めし

忠太　大樹の柳の切り株より、出でたる人形、添へたる願書。藻女樣は先大臣の御胤にて、當大臣こそは田熊の胤、產家に入れ替へおきたりと、願書に記して調伏呪詛、大願成就なさしめ給へ、願主は卽ち田熊法眼、これ御大事と早速に、藻女樣へ訴へて、熊野で逢うたる體になし、お連れ申した雀の神主。人形二つ、願書に覺えがござらう。

ト釘を打つたる藁人形に、願書も共に出して思ひ入れ。

鳥羽　イヽヤ、この身に覺えない。さはさりながら、一言の答へもなきは、さては田熊か胸中に、覺えあつてか。ナヽ、なんと。

田熊　エヽ、殘念や、口惜しや。これまで工みし我が惡逆。いかにも大臣と尊敬せしも、この法眼が實の悴、娘といひし藻女は、先大臣の正しき御胤。二十餘年がその間、それなりに過ぎ行きしが、いかに大臣の胤なりとて、女童に見出されしか。思へば〳〵、チエヽ、殘念やなア。

鳥羽　すりや法眼は、いよ〳〵麿が

田熊　我れこそ實の親なるぞ。

ト無念の思ひ入れ。鳥羽の大臣、田熊法眼をキツと見て

鳥羽　ヤヽ、さては肉身分けし親人といふは……ホヽホイ。

ト思ひ入れ。

エヽ、とは知らずしてこの年月、上なき床を穢したる、ためし少なきさかしら事。思へば思ひ廻すほど、空恐ろしき惡逆無道。さりながら、我れを憫れむ心底は、この身にとつて勿體なき、天の御罰に親子が成行き、せめて苦痛を助けの爲

田熊　ヤ。

ト見上げるを、鳥羽の大臣、小さ刀にて田熊法眼の首を打落す。皆々見て

皆々　現在親を

鳥羽　手にかけたるも惡人の、親と一つでない證據。直ぐに、この身も

ト鳥羽の大臣、手早く腹へ突き立てる。

藻女　さこそあるべきその生害。惡事に組みせぬ、これ潔白。

鳥羽　エヽ、忝い。存ぜぬ事とてこの年月、筋なきこの身に金巾子の、冠りを捧げし天罰の、報うて子として親の介錯。

藻女　それは惡事をうとみし介錯。那須の八郎は忠義の介錯。貴き胤の自らが、知らぬ事とてかはせし枕。臣下の夫となりはてゝ、一子を儲けしその爲に、素性知れたる上からは、一日も連れ添はれじと、家出なして行くへ知らさず。

鳥羽　心づかひの御胸中。それにひきかへ、惡人ながらも親を討つ、世にも稀れなる大惡無道。あの世へ赴き親人の、責め苦を心身に引受けて、未來の苦艱を助くる孝行。

藻女　八郎親子が生血は、妖狐を見出す祕法の第一。

鳥羽　その一言を忠死の宗重、あの世で逢ひなば云ひ聞かせん。

ト思ひ入れ。この時奥にて

呼び　祈りの刻限。

金剛　もはや泰親

藻女　祈りの時刻。

鳥羽　大臣の胤にあらぬ身は、玉藻の前に迷ひしが、素性賤しき卽ち證據。

藻女　妖狐を退け、やがて豐の御代萬歳。

ト八郎の切り首と文字の白絹を取上げ、きつと思ひ入れ。この時、光彩と飛仲太窺ひ出て

兩人 さては女は

トかゝるを、金剛太郎と忠太夫引取り、立廻つて引附ける。鳥羽の大臣白刃を拔く。これを木の頭。藻女は首と白絹を見て、思はず泣き落す。これをキザミにて、よろしく拍子幕引附けると、すぐにドン〳〵のツナギにて、引返す。

大詰　青龍殿祈りの場

役名――八郎女房藻女實ハ池藻の前。衛士又五郎實ハ木幡彈正景澄。輔雅の若大臣。金剛太郎重虎。泰親門人、辻浦左京。同、峯岡主水。同、松倉外記。同、小泉大和。同、神谷宮内。播磨守安部の泰親。玉藻の前實ハ金毛九尾の妖狐。

本舞臺正面屋根を見せたる道具、大簾一面にかゝり、うしろ結構なる張り物。上の方に破風口、黑格子、すべて青龍殿のかゝり、好みの道具。平舞臺よき所に詰への護摩壇。この四方に竹を立て、注連繩を張り、眞中に北辰の宮、所々に二百八燭を點じ、こゝに安部泰親、白の行衣の形、髪をさばき、幣束を持つてゐる。左京は黃の行衣にて、同じ色の幣を持ち、大和は萌黃の行衣、同色の幣を持ち、主水は赤の行衣、これも同色の幣を持ち、外記は黑の行衣、同色の幣を持ち、宮内は白の行衣、これも同色の幣を持ち、五人とも淺黃刺貫、烏帽子、湯釆にて扣へゐる。うしろに半素袍、股立ちの侍ひ四人詰め寄り、扣へゐる。早下がり葉、これにかすめて、ドン〳〵をかぶせ、引返して幕あく。

大和 青黃赤白黑、祈念の卜者

五人 いづれも用意いたしてござる。

泰親 身不肖なれども、播磨守安部の泰親が卜筮、關白どの、命に隨ひ、易の表を考ふるに、妖氣頻りに覆ひ、異形大臣に添ひ奉ること眼前たり。

大和 さるによつて、加茂明神へ祈誓なし、蟇目の弦を行ひ

外記 再び先の大臣に勸文をさゝげ

宮内 斯く青龍殿に於て今日の御祈念。

主水 八百萬神ことぐ〳〵く勸進なし

大和 東西南北、中央の役目の我れ〳〵。

外記 用意調ふ上からは、いざ泰親どの

五人 御祈念々々々。

泰親　この上は諸行の方々、玉藻の前をこれへ招待、願ひ奉りまする。

トこの時、簾の中にて

呼び　玉藻の前様お入り。

侍ひ　すりや、玉藻の前様のお入りとや。

ト早下がり葉になり、正面の簾を巻き上げる。こゝに玉藻の前、十二單衣、緋の袴の形、半眼に泰親を見て、思ひ入れあつて

玉藻　泰親が最後の願ひ、青龍殿へ自らを、今日の招ぎ。それへ行て、逢ひませうわいなう。

ト三味線入り、小太鼓の樂になり、玉藻の前、二重舞臺より、しづ〳〵と下りて來り、二疊臺へ直る。後の簾は直ぐに下ろす。

泰親　まづは今日のお役目、御苦勞の御入り。

玉藻　見れば青黄赤白黒の、淨衣を着たる五人の小者。

五人　魔魅の障碍を祈念の者。

玉藻　いゝや、障碍の祈念に事よせて、こりや自らを、呪詛なすのであらうがな。

泰親　なんと。

玉藻　この程の問答に面目を失ひ、先の大臣へ勘文を、捧げてのこの祈り。再度の問答、又も泰親絶句なさば、其まゝ置かうや。して、その壇の構へは何と。

泰親　祈りの故實、壇上に北辰北斗を飾れるは、この程よりの魔魅の障碍、事明らかに顯はさんため。

玉藻　すりや泰親には、いよ〳〵アノ自らを。ムウ。

ト思ひ入れ。これよりノットになり

泰親　まづ四方三面の壇上には、中央に北斗北辰を勸請なし、七十二府人おふくは(？)童子。

大和　二十八宿を四方に分ち

主水　青龍、朱雀、白虎、玄武は、即ち五色の御幣束。

外記　八百萬神悉く、四方に發し(？)大天王

宮内　中央には大聖不動

泰親　まつた四角には四天王、二十八燈の明りを照らし、今ぞ障碍の降伏退散。

五人　怨敵退散々々々々。

玉藻　ホヽヽヽヽ。ほんに仰々しい禁裏の御祈念。目にも見えざる魔畜の障碍、その災ひも我れゆゑ

と、泰親が愚昧の卜筮。その業に暗くして面目を失ひ、又もや再度のこの祈り。不審もあらば

云ひ聞かさん。この上、今日の問答に誤りあらば、その身は元より、安部の家名は、斷絶ぢやぞ。

泰親　いかにも。先達ての問答に、天に風雲の變化に水火の異み、人に不時の病ひ、これ定業の因緣とあるゆゑ、いかにも泰親が理に伏せしが、この程和歌の浦へ參籠のその折柄、殊に夜陰にその身より、光りを放ちし怪しき有樣。そも〳〵正法に不思議なし。人間の身よりして、光りの出づべきやうやある。これ怪しむべきの第一なり。

玉藻　ハテ、泰親はよく〳〵愚昧のたわけ者。正法に不思議なければ、人の身より光りを現はすを怪むや。その折柄は勅使といひ、殊に行くへ知れざる重寶、思はず手に入る御鏡の、その奇特にこの身の光明。汝知らずや、そも〳〵元恭天皇の妃、衣通姫は、その身すぐれて美はしく、御身の外まで通るゆゑ、衣通と名く。また聖武天皇の御妃、身より光りを放ち給ふがゆゑに、光明皇后と稱し給ふ。卽ち帝叡感のあまりならずや。それを咎むるものならば、これにても正法に不思議なしと申すやいかに。この場に於て速かに、返答いたせ。サヽ、何とぢや。

泰親　サアそれは

トつかへる。

玉藻　童遊びの祈りの壇上。愚かな事を。

トきつとなる。この時奥にて

呼び　お入り。

ト早下がり葉になり、正面の簾卷き上げる。中に輔雅の大臣、金冠、白衣の形、側に池藻の前（元の藻女）廣袖、襠衣裳にて扣へゐる。奥より金剛太郎、白丁を引張り、弓矢を持ち出る。あとより官女四人、いづれも懐劍を持ち、つか〳〵と出て來り

金剛　素性怪しき玉藻の前

皆々　動くまいぞ。

ト取卷く。玉藻の前思ひ入れあつて

玉藻　ヤア、仰々しき女ばら。殊にお入りと思ひの外、輔雅どのゝこの體は。

池藻　その不審尤も至極。大臣には仔細あつて俄かの薨去。

玉藻　ヤヽ、すりや烏羽の大臣には、果敢なく世を去り給ひしとや。

輔雅　素性は變れど兄君の、薨去によつて宣旨を蒙むり、今日就任の上からは

池藻　改めて大大臣の輔雅君。

輔雅　サア、この上は、たとへ如何ほどあらがふとも、及ばぬ魔魅の正體を

泰親　猶この上は泰親が、祈念の幣束。

池藻　邪正をうつすは名鏡の、威德を以て

玉藻　名鏡とは、そりやいづれにありや。

池藻　ヤア〳〵、景純、名鏡守護なし、はや參れ。

ト向う揚げ幕の中にて

景純　お召しに任せて、只今それへ。

ト、ツツカケに、かすめたるドン〳〵にて、向うより又五郎、實は木幡彈正景純、禮々しきなりにて、件の名鏡を持ち、走り出で來り、キツと見得。

泰親　木幡彈正景純

金剛　お來やつたか。

景純　この程怪しき玉藻の前、見現はさんずその爲に、衛士とやつせし某こそ、木幡彈正景純が、守り奉りしこの名鏡。照魔鏡にはあらねども、御身の正體、鏡の威德。

池藻　戊の年度の親子が生血

泰親　藥王樹の護摩木もろとも、炎の中へ。

ト護摩木を取って、護摩壇の中へ打込む。煙硝火立つ。薄ドロ〳〵になり、玉藻の前ウツトりとなる。景純、鏡を差附ける。

金剛　蓑目三度の弦音に

泰親　魔性の正體現はさずんば、諸神諸佛を祈りの白幣。

五人　怨敵退散々々々々。

ト金剛太郎は弓矢を取り直す。泰親をはじめ五人の社人、持つたる幣束にて玉藻の前を打つ。これにて玉藻の前苦しみ、大ドロ〳〵。金剛太郎かゝると、引抜きにて、怪しき好みの姿になり、後ろへ狐火燃える。

皆々　ヤヽ、玉藻の前の

池藻　さてこそ怪しき

景純　變化の有樣。

玉藻　チエヽ、殘念やの。我れは三國自在に飛行し、天竺にては斑足太子、唐土にては殷の紂王、いま日の本に押し渡り、鳥羽の大臣を失ひ、魔界になさんと近寄りしに、泰親が祈りの德、殊には八手の

名鏡の、光りに恐れこの身の正體、金毛九尾白面の、姿をやみ〳〵顯はすか。エ、、殘念やなア。

皆々　さてこそ三國傳來の、妖狐であつたか。

玉藻　大臣をはじめ、引裂き捨てん。

泰親　愚かや、青黃赤白黑の祈りの幣束。

五人　立去れ〳〵。

ト大ドロ〳〵になり、玉藻の前は主水を引ツつかむ。池藻の前と官女四人は輔雅君を守護する。景純金剛太郎は玉藻の前へ詰め寄る。泰親と殘りの社人は祈りにかゝる。玉藻の前、無念のこなしにて、主水を引裂く。この見得にて簾おりる。

金剛　ハテ、爭はれぬ蟇目の奇特。まつた博士の丹精に、眼前奇瑞を顯はせしか。

景純　疑ひもなき加茂の御神、守護なし給ふか。エ、、忝い。

池藻　これも偏へに神國の、神の御末のかけまくも

金剛　尊とき御代の

皆々　萬々歲。

輔雅　いやとよ、されども斯程まで、自在を得たる老狐なれば、天地の間に縱橫なし、猶も障碍をなさん也知れず。

景純　仰せにや及ぶべき。三國自在に飛行なし、國家を惱ます稀代の惡狐。

輔雅　その正體をしとめずして、其まゝおかば天下の大事。

金剛　金殿樓閣殘りなく、手分けをなして狩り出さん。

景純　方々、ぬかり召さるな。

ト奥の方にて、「アリヤ〳〵」の聲する。この時大ドロ〳〵、雷の音。上の破風を蹴破り、玉藻の前、金毛九尾白面の妖狐の姿にて出で、黑雲に乘り、呼び樋の口を乘り、花道の上よき所まで來る。皆々この體を見上げる。

玉藻　一旦姿は顯はすとも、猶も日本にとゞまつて、時節を待つは都より、東にあたつてよき山野、那須野ケ原へ飛び去らん。

ト玉藻の前、上にて思ひ入れ。大ドロ〳〵、出端の鳴り物にて、雲に乘りたるまゝ向うへ飛び行く。

舞臺の人數見得よく、「アリヤ〳〵」と懸け聲にて、よろしく

幕

月出村甘六夜詠

つきもでむらかんろくやのひとふし

月出村廿六夜諷

序幕　道行の場

浄瑠璃「其噂吹川風」清元連中

役名――玉屋新兵衛。三國屋小女郎。植木賣り、寺島の松。猿廻し、三作。家主、茂右衛門。輕子、おかん。玉屋手代、左助。同、平次。小舟乘り、茨の藤兵衛。

一番目、玉漢前中乘りの幕ひきつけると、直ぐに佃ぶしになり、雷の音、夕立の模樣にて引返し。道具出來次第、知らせにつき、佃ぶし、時の鐘、雨車、雷の音になり、舞臺前、雨落より、開帳札、高尾大明神と記したる幟をセリ上げる。すべて永代橋あたり夜の體。幕外へ上の方より、左助、手代の形、玉屋の番傘をさし、平次、同じく手代にて、弓張り提灯をともし、出て來る。下手よりおかん、深川の輕子女にて、井を叩き、茂右衛門・家主の形、三國屋の丸提灯を持ち、おかんと番傘を相合にて出て來り

左助　迷子の〳〵新兵衛様やァい。
茂右　迷子の〳〵小女郎さんやァい。
平次　モシ〳〵、左助さん、そこへも迷子を尋ねて來ました。
左助　あの提灯は三國屋のしるし。モシ、お前方は、深川の衆ではござりませぬか。
かん　ハイ、私しどもは、深川の三國屋でござりまする。
左助　そんなら、こなさん方も、何ぞ尋ねに
かん　サァ、聞いて下さんせ。わたしが江戸へ送つた、三國屋の小女郎さんが見えぬ。大方玉屋の新兵衛さんと駈落ち。それではわたしが濟まぬから、尋ねに出ましたわいな。
茂右　わしは本所番場町の家主でござるが、わしが長屋から、深川へ通ひのこの女中。聞かるゝ通りの難儀ゆゑ、わしも共々尋ねてやります。
左助　それは御苦勞でござります。わしが主人新兵衛も、家出いたしましたが、そんなら二人の駈落ちと見えます。兎角近所に事なかれでござります。
茂右　家主も、此やうな時が否でござります。それに又、折わるいこの雨。先刻は大きな雷でござりましたな。

かん　ありや通り物でもしたのでござんせう。
茂右　通り物といへば二人の衆も、駈落ちをするなら斯ういふ譯で、暫く影を隱すと
左助　それ〳〵、置き手紙してでざればよいに。
かん　サァ、わたしも其やうに思うたから、小女郎さんの文庫を見たら、此やうな書き物がござんしたわいな。

ト懷より書き物を出して見せる。

茂右　そいつは、てつきり書置きかも知れぬ。早く讀んで見さつしやい。
かん　イカサマ、それがようござんせう。

ト書き物を開き、淨瑠璃の役觸れあつて

茂右　なんの事だ。そりやァ淨瑠璃の役觸れだ。
かん　その淨瑠璃に語られぬうち
茂右　ちつとも早く、この川筋の上手の方へ
左平　迷子の〳〵新兵衛様やァい。
茂右　小女郎さんやァい。

ト皆々呼びながら、向うと上手へ入る。知らせにつき、件の開帳札と幟をセリ下げる。時の鐘、雨車大雷にて幕明く。

本舞臺、正面黒幕、うしろ、草土手、秋草のあしらひ、眞中に水神の森のしるしの石碑、これに竹垣、「このあたり殺生無用」の高札、すべて殺生石と見える心。この左右に、、、、三浦屋、上總屋、としるしたる番傘を開き、この蔭に新兵衛、小女郎、雨宿りの體。上の方に淨瑠璃臺、よき所に櫻の立ち樹、葉櫻の吊り枝、木母寺邊夜の景色。幕引きつけると、大雷ドンと落ちる音。これをキッカケに上手の張り物を打ち返す。爰に浜元連中居並び、前彈き無しに直ぐ淨瑠璃。

〽こい仲は、墨を硯のふた思ひ、いつか流れへ捨てられて、星へ手向けの戀の歌〽名にし東の宮戸川、岸邊にうたふ一諷を、聽いての後に死なうなら、せめて百八煩惱の、珠數の玉屋の新兵衛が、繰り言多き思ひ寢の、小女郎も同じ死出の旅　對の姿もしどけなく、濡れたるあとに雨濡れて、仇しが原の草の露、一足づゝに消えてゆく。

ト本釣り鐘、淨瑠璃の合ひ方になり、左右の傘をあげる。爰に玉屋新兵衛、やつし一本差し。小女郎深川藝者にて、道行の心。腰へ櫛を差し、兩人對の形にて、雨宿りしたる體。傘を傾け、兩人、雨も

嗜れしといふ思ひ入れ。

〽仇の仇たる仇の世も、今宵かぎりの身の上に、冥土とやらは暗き道、闇は綾瀬や向う岸、數も限らぬ提灯は、今に二人の新盆と、思へばいとゝ果敢なやと、泣いて心の佃ぶし、吹けよ川風、上がれよ簾、中の小唄と添へ乳して、ぬしの寢顔によう似た嬰兒を、抱いてどうして斯うしてと、樂しみ暮らした甲斐もなう、淺きえにしとばかりにて、行き惱みてご立ちどまる。

新兵　思ひがけないあの雷、今死ぬる身ながらも、暫しはいとふ雨宿り。

小女　互ひの袖も濡れた同士、それが高じて今宵の仕儀。所詮添はれぬ事なれば、今の雷さんに、打たれて死んだが增しかいなア。

新兵　その繰り言は尤もなれど、添ふに添はれぬ譯合ひは、其方にも常々云ふ通り、親々より云ひ號けある、あの幼な馴染みのお霜と、添へば其方に義理立たず、また云ひ號けを反古にすれば、親々への不孝。思案は二つ、身は一つ、それゆゑにこそ今の成行き。

小女　わたしとても同じ事。知らしやんす通り、兄さんの心が惡さに、わたしは深川で藝者の勤め。身儘になつて、女夫にならうと思へども、お前に添はせる事はならぬ、いつまでも勤めをせいと無得心。それよりお前と一緒に、末長う末來で添ふが、わたしや嬉しうござんすわいなア。

新兵　これを思へば昨日まで、あの梅本の居續けに、隣り座敷の連れ彈は
〳〵噂にも、氣立てが粹で、なりふりまでも、派手で蓮葉で、しやんとして、かつら男の主さん
へ、惚れたが無理かえ〳〵夏の夜に、呼び通したを内から迫かれ、逢はぬ不首尾の遠ざかり、男
の癖ぢやないかいな、惚れたが無理かえ〳〵餘所に聞ゆるあの唄も、今は我が身にかゝり船、露
の二人が袖と袖。

小女　ほんに果敢ない二人が身の上。今更云ふでは、なけれども
〳〵元この戀は過ぎし夜の、座敷ばかりの附合ひに、ちよつとお顏を三めぐりの、夜の雨より
濡れかゝり、吾妻橋と五百崎の、文の知らせと合圖の手管、首尾を小宿に待乳山、睦言つもる
床の内、人目の關や鴉の、わたせる橋場の初あらし、晴れぬ心の隅田川、今は濁りに染めやら
ぬ、蓮の臺に世帶とは、思ひの外の女夫ぞと、離れがたなき風情なり。

新兵　外ならぬ其方の心底。この上は必ず共に、未來は一つ臺の女夫。

小女　嬉しうござんす。そんなら追手のかゝらぬうち

二人　最期の場所へ

ト行きにかゝり、向うを見て

新兵　ヤヽ、あの人影は

小女　何かの樣子を

新兵　コレ。

ト兩人囁く思ひ入れ。

〳〵折に向うへ一筋の、千種の野邊の花道を、浮世渡りはさまゞに、あかしを友に猿廻し、緣
日戻りの植木賣り、臺輪をかたげて二人連れ。

ト聖天の鳴り物になり、向うより松、植木賣りの拵へにて、臺輪へかんてらをともし、これを擔ぎ、
跡より三作、裁附け、淺黃頭巾、猿廻しの拵へにて、篠竹を持ち、風呂敷包みの上へ猿を背負ひ出て
來り

〳〵これは御存じ寺島の、松は根生ひの江戸育ち、御贔屓うけて大木に、猿が人眞似猿すべり、
こゝらで一服ひねり松、一つかしの木、煙草の檜、煙り輪にして釣り惚、連れの二人は扇と扇
重ね扇ぢやないかいな、世事の話しも夜の友、浮きに浮かれて來りける。

ト兩人振りあつて舞臺へ來り、新兵衞小女郎を見て

松　ヤア、待て〳〵。この暗い所に、女と男が居るぞよ。

三作　見れば若い二人連れ。して、お前方は

小女　サア、わたしらは……オヽ、それ／＼、今まで木母寺に居りましたが、連れにはぐれましたゆゑ

新兵　二人で江戸へ歸ります。見れば一人は植木屋どの、連れのお方が背負うてござるは、何でござります。

三作　ハイ、これは猿でござります。

小女　エヽ、氣味の惡い。

三作　怖い事はござりませぬ。猿めも夜更けて眠いやら、よう寢て居りまする。

松　氣味の惡いはお前方、夜夜中といひ、合點のゆかぬ形素振り、こりやア色だな。

三作　心中と見たに違ひあるまい。

松　心中ならば惡い料簡、未來で夫婦にならうといふのか。

三作　先の世の事は知れませぬ。ハテ、死んで花實は咲きますまい。命があればどうかなりませう。爰の道理を聞きわけて

松　早くこの場を、猿廻し。

〽お猿はめでたやな。

ト猿廻しの合ひ方になり、三作、包みをおろし、猿を抱いて搖り起せども、猿はよく寢たといふ思ひ入れあつて

三作　こちの太夫は、よく寢られたさうな。

松　さりとは此奴、寢ごい奴。

兩人　さりとは／＼

〽のほゝよほゝさんな又あろかいな。聟入り姿も、のつしりと〳〵と、嫁御の機嫌も直つたりや

そこでころりとかへつたり／＼〽日吉祭りは見事な事よ、四社のおこしのちやうさや、ちやうさ、猿は山王の遣はしめ、三萬三千三百三十、しかも櫻にぶらりと下がつた、只も下がるか、子猿抱いて下がつた〽のほゝよほゝ、さんな又あろかいな、コレ〳〵〳〵、爰から早う戻らんせ戻らんせ、どうやら日和も上がつたぞ〳〵。

トこの文句のうち、兩人、猿は寢てゐるゆゑ詮方なく、松、篠竹を持ち、猿廻しのやうに舞臺を叩き三作惚りして飛びのき、これより三作を猿にして、兩人よろしく振りあつて納まる。新兵衛小女郎、思ひ入れあつて

新兵　ほんに日和も上がつたさうな。

三作　この間に早う、二人の衆。

新兵　若いに似合はぬ、段々との思し召し

小女　御深切の程、有り難うござんす。

三松　なんの、禮には及ばぬこと。

〽必ず短氣を出さぬやう、早くこの場をさる〳〵、心を添ふるこませもの、どうした緣や

これわいさ。

ト荷物を負ひ、この文句にて松、三作、下座へ入る。兩人跡見送り

小女　あれ聞かしやんしたか。他人のお方さへ、あのやうに云うて下されども

新兵　所詮長らへられぬ命。

小女　覺悟の上の今際まで、お前に貰うた松山の、矢弓稻荷樣のこのお守り、肌身離さず大事にかけて、

これ、爰に。

ト守り袋を出して見せる。

新兵　神佛にも見離され、消えてゆく身でありながら、世間の譏りを思ふゆゑ、最期の身支度、その外にも、形見ごゝろの附け屆けに、大切なる色紙を人手に渡し、預かり手形も取つたれど、今は益

なきこの成行き。

ト懐より手形を出して見せる。

小女　是非に及ばぬ二人が仲。

新兵　又もや人目にかゝらぬうち

二人　ちつとも早う

ト互ひに守り袋を預かり、手形を懐中して思ひ入れ。

〽いざと手を取りふた面、我れは浮世に秋の夜の、長き別れとなりけむと、足の歩みも陽炎の命をわれと鷄の聲、明けなばうしや水神の、森に塒の小夜がらす、心も空も影くらき、眞菰隱れや程ちかき、川添ひにこそ着きにけり。

トこの浮瑠璃のうち、兩人傘を持ち、東の歩みより中の間を通り、花道へ來る。滿元連中は、あほりにて返す。正面の道具はよき方へ引いて取る。黑幕を切つて落す。

舞臺正面より奥へかけて、眞崎稻荷を見せたる打拔き舞臺。前側は亂杭、しがらみ、川邊の心、上下に眞菰のしげり、この蔭より四つ手を下ろしたる苫船をよき所まで押出す。すべて隅田川渡し場の體

時の鐘にて道具納まる。

ト此うち兩人舞臺へ來る。

新兵　最後は同じこの川の、底の藻屑とかねての約束。

小女　そんなら爰で

新兵　夜明けぬうちに。

小女　モシ、まだ夜の明けるには間があらう。この世の別れに、新兵衞さん

ト新兵衞の顏を見る。

新兵　それぢやというて

小女　ハテ、大事ないわいなア。

新兵　そんなら小女郎

小女　わたしやどうやら

新兵　ヤ。

小女　オ、寒む。

ト兩人こなし。傘にて姿を隱す。時の鐘、鴉の聲になり、向うより茂右衞門、以前の形にて丸提灯を

持ち、跡よりおかん附いて出て來り、花道にて

茂右　ハヽア、もう夜が明けるさうだわえ。先刻の手代衆は、木場から砂村の方を尋ねに行き、わしらはこの川筋を尋ねに來たが、もう爰は隅田川の渡し場。こりや、どこまで行くのでござるな。

かん　ほんに、さぞお草臥れでござりませう。お前さんや、わたしどもに、此やうな苦勞をかけるとは憎い奴等。今にも見附けたら、首へ繩を附けて、引摺つて行かにやなりませぬ。

茂右　大事の代物を連れてゆくのみか、新兵衞さんも毎日小女郎の所へ通ふ樣子、定めて勘定も澤山ござらうな。

かん　イエ〳〵、その事はこの間も見て居りますれば、新兵衞が身にも代へられぬ、大事の寶の色紙とやらを質に入れて、わたしが方への勘定は、皆いたしました。

茂右　それはまだしもの事。この上は此方の代物、小女郎さへ尋ね出せば、外に云ひ分は無いといふもの。

かん　御苦勞ながら、もそつとそこらを、お尋ねなされて下さりませ。

茂右　合點だ〳〵。見當り次第に二人の奴等

かん　ひどい目にあはせてやらにやアなりませぬ。

ト云ひながら、舞臺の方を透かして見て

ヤア、向うに見える傘は

ト兩人舞臺へ來て

茂右　ヤア、覺えあるこの傘。

兩人　そんなら爰に二人の奴等。

ト傘を引退ける。新兵衛、小女郎、しどけなきこなし。兩人見て

うぬら、見附けた。

トかゝる。新兵衛、小女郎振り切る。また起上がつてかゝるを、新兵衛、砂を取つて打ちつける。これにて兩人「アッ」と思ひ入れ、新兵衛、小女郎の手を取つて

新兵　覺悟はよいか。

小女　南無阿彌陀佛。

兩人　南無阿彌陀佛。

ト川へポンと飛びこむ。この水音を聞いて、苫船の中より藤兵衛、四つ手引きの拵へにて出ながら

藤兵　今のは慥かに、身投げださうな。

茂右　ヤア。

ト恟りする。藤兵衛、四つ手へ手をかける。木の頭

藤兵　こいつは強氣に重い。

ト腰を入れて網を引揚げる。この先へ小女郎の帶の端見える。茂右衛門、おかん、川を見込む。これをキザミに、ひやうし

幕

序幕返し

牛島東福寺の場
番場町張子屋の場
牛の御前境内の場

役名――玉屋新兵衛。三國屋小女郎。東福寺所化、淨雲。茨の藤兵衛。玉屋庄兵衛。同手代、左助。若狹屋萬七。三國屋吉六。二階廻し、おかん。女髪結ひ、おせん。二位官和尚。家主、茂右衛門。鍛冶屋、鐵五郎。長屋、藤六。船頭、長吉。同、長八。所化、玉觀。同、雲慶。同、鯛山。同、鯛入。同、鯛門。新兵衛云ひ號け、お霜。女乞食、おたつ。同、おてふ。

本舞臺、正面黑き門、この柱に立春大吉の札、よき所に葭簀張りの茶屋、すべて牛島東福寺の門先。

髪に鐵五郎、いさみの形にて、女乞食のお辰、お蝶を引附けてゐる。これを鯛入、鯛門、黒衣、禪坊主にてとめてゐる。藤六、やつし。長吉、船宿の若い者、赤飯の荷ひをかつぎ、立ちかゝりゐる。茶屋の亭主、支へてゐる體。弔ひの半鐘にて幕明く。

ト皆々捨ぜりふにて爭ひゐる。直に流行り唄になり、向うより鯛山、所化のこしらへ、黒衣、禪宗の袈裟にて先に立ち、後より白無垢をかけたる蓮臺の輿、定役四人にて擔ぎ、茂右衞門、麻上下、若い者四人、羽織の形にて蛇形の縹燈籠を持ち、ズツと跡より萬七、羽織町人、一本差し。がま吉、丁稚にて袱紗包みを持ち、藤兵衞 やつしの形にて、二升入りの酒と澤庵一本提げて出て來り、ワヤ〳〵云ふを見附け、藤兵衞、茂右衞門、先へ駈けぬけ、中へ入り

藤兵 コレサ〳〵、乞食嗅アに長屋の手合ひ

茂右 赤飯にも構はず、何をごたつくのだ。

鐵五 こりやァ藤兵衞さん、大屋さん、聞こなさい。もう佛が來るであらうと、赤飯を素的に急いで擔いでくると、この乞食めらが出やァがつて、まだ施主も食はねえ赤飯を、くれろと吐かすワ。それから起つたごたつきだ。

萬七 アヽ、ぬし達は、赤飯を買つて來たのか。

藤六 左樣サ、わたしはお前、假にも店判をついた親分だから、先へ來て赤飯の世話をするのだ。

長吉 わしらも深川からの馴染み、二階刎しの弔ひには、船宿は當り前であらうと、めでたく送つて來たのだ。

藤兵 アヽ、そんなら赤飯をくれろ、ならねえと、それから起つた間違ひか。大概にするがよい。

茂右 意地の穢ないごたつきだ。コレ、兄ィや、てまへ達は今日の弔ひに、施主にしようと、編笠を買つて來たに、よく先へ來たな。施主がなくつてお祭りがつかへるなら、施主はどこぢやと尋ねるには人がかゝるから、據なう大屋が施主になつて來た。コレ〳〵、髪に笠があるから、わざつと冠つて、施主になつて下さい〳〵。

ト腰に提げし編笠を取つてやる。

長藤 アヽ、そんならわしらは、施主になるのかえ。

藤兵 ハテ、先刻も云ふ通り、弔ひを立派にして、施主の少ないのは、冷素麺に辛子のないやうなものと、籤取りにして、貴樣達が當つたではないか。そんなら施主は當り前だ。

鐵五 エヽ、せう事がない。施主になるべい〳〵。ぬし達も冠つて

長藤 イヤ、とつけもない目にあふものだ。

がま　コレ〳〵、藤兵衛さん、あのマア狩り者のおかんが弔ひにしては、大分仰山なかゝりだな。

長吉　モシ〳〵、あんな蛇を持つて來やした。

鯛山　こりや餘程のお物いりでござりませう。モシ、何病氣で死なれました。

茂右　なにサ、病氣も無かつたが、この頃ちつと氣の揉める話しが出來、夜つぴて迷子を尋ね歩いて、蛤の天麩羅と、西瓜の食ひ合せ、その上蟹をしたゝか食つて死んだのサ。一體この佛は、おらが長屋にゐても、獨り者の事で内へも歸らず、深川の旦那へ通ひ奉公の二階廻し、えて吉も餘ツ程貯めた話し。死ぬ時にわしに云ふには、爰に花に貰つた金が七兩二分あるから、これで素的に弔ひを賑やかにして下されと、遺言をしたから、そこで身分不相應の弔ひを始めたのよ。

鯛人　イカサマ、よい心がけの女中でござる。

たつ　モシ〳〵、お前方は留めッ放しにして、乞食はぶち殺されてもいゝのかえ。

てふ　わつちらは體が痛むよ。アイタ、、、、、。

茂右　ハテ、こいつらは、噂を聞いてねだるな。家主が挨拶だから不請しろ。その代り、赤飯はいくらでも食はせる。ハ、、、、。

たつ　そいつは有り難い。それを規模に、濟ませてしまひませう。

二人　濟ませやせう〳〵。

茂右　嘸アも濟ませるといふ。長屋の衆、不請ながら手を打つて下さい。

鐵五　乞食と手を打つも、おかしな話しだ。

長吉　さうだ〳〵、こいつは少し打てないね。

藤兵　これサ〳〵、乞食はまだ結構だ。かつたいに棒打ちといふ事がある。かつたいと棒打ちをするより、乞食と手を打つが增した。

鐵五　イカサマ、そこもあるわえ。打つべい〳〵。

皆々　アヽ、よい〳〵〳〵。

ト手を打つ。

鯛山　これはどなたも、遠方御苦勞でござりました。

茂右　サア〳〵、この勢ひで、葬むつてしまひませう。

鯛山　もう一刻延びました。お急ぎなされませ〳〵。

皆々　さうしませう〳〵。サア、佛をやらかせ〳〵。

ト流行り唄になり、輿を舁ぎあげ、この人數皆々門の中へ入る。あと掠めて禪のツトメ。

萬七　時に藤兵衛とん、いよ〳〵あの玉屋の新兵衛めと、深川を駈落ちした、貴樣の妹小女郎は、川から生きて上がつたの。

藤兵　聞きなさい。この間隅田川へ、四ッ手網を下ろして、うと〳〵とやらかした夜明け方に、何やら大きな魚が引ッかゝつたと思つて、引揚げたところが、妹の小女郎、船へ入れて介抱したところ息を吹返したと思ひなせえ。それから内へ連れて來て、養生をさせたら、仕合せと此方のもの。一緒に身投げをした新兵衛は直ぐに往生。妹を助けるとは、日頃わしが正直のお庇、妹が守りに松山樣のお札があつたが、なんと信心の德は、爭はれぬものだね。

萬七　そいつは奇妙だ。そんならいよ〳〵新兵衛めは、川流れで死んだの。

藤兵　死なねえでどうするものた……モシ、それにしても、深川の親方の方へ、五十兩の金をつけば年が拔けます。さうすればお前の女房に、今でもあけやす。どうだ、氣があるかえ。

萬七　氣のあればこそ、兄の貴樣を賴んで……併し、あの新兵衛めが生きてゐるうちは、此方へ色男の株は廻るまいと思つたに、彼奴か死んで話しが出來る。あの野郎が内に、里見のお屋敷から、定家の色紙に鑑定書を添へて、この間下がつたその譯といふは、その色紙の箱を、寸法に合はせてのお誂へ。その箱の出來るまで、玉屋の内に預かりといふ事を聞き出し、新兵衛を煽てゝ、深川の物いりに、その色紙をおれの手先で質に入れ、死人に口なしと、新兵衛を盜人にして、おれが詮議した面で、その色紙をお屋敷へ差上げれば、一籏の金だヲ。その金で小女郎の年拔き。なんと旨い話しではないか。

藤兵　それにしても、妹をわしが内へ置く事を、深川の親方へも知らせてやり、お前の事も大方は話したから、何にしろ五十兩早く拵へて、親方の方を早くつけてしまふがよい。晩には是非親方も、わしが内へ來ますから、お前逢つて、極めてしまひなさいな。

吉六　イヤア、萬七さん、藤兵衛さん、二階廻しのおかんの弔ひにござつてか。わしも歸りにこなたの所へ寄つて、小女郎が樣子も、よく〳〵見て行かうと、そこで彼奴の弔ひに來たのサ。

藤兵　こりやァ吉六さんか。たつた今お前の噂最中。

萬七　何にしろ、あの身を投げた小女郎は、おれが方で相談するから、その積りでゐるがよいぞよ。

吉六　それは有り難いね。この人の妹だが、身を投げたといふ評判があつては、とても住替への代物。どうぞお前、お賴み申しやす。

萬七　金の高も聞いたが、隨分承知だよ。

吉六　イヤモウ、お待ち申して居りまする……イヤ、それはさうとお前さん、大きにお力落しでござりませう。

萬七　そりや、なぜ〳〵

吉六　モシ旦那、お隠しなさるな。あの二階廻しのおかんは、お前さんが内證で、お世話なさるといふ專ら評判でござりました。

萬七　おきやァがれ、何の科であのおかんを

吉六　エヽ、お前お隠しかえ。死んで仕合せ、生きてゐて、この相談をあの女が聞いたなら、蛇になるか、鰻になるか、後の始末がむづかしいね。

萬七　とつけもねえ手合ひだ。コレ、必ず頼むよ。

藤六　承知でござりやす。モシ、吉六さん、弔ひが始まつてゐる。赤飯の世話でもしてやらうか。

吉六　わしもちよつと、帳に附いて來ようか。

藤六　サア、寺へ參りませう。

ト弔ひの鳴り物になり、萬七、吉六、藤兵衛、門の中へ入る。向うより庄兵衛、親仁の拵へ、杖を突き、左助、手代の形にて、供をして出て來り、花道にて

左助　モシ、旦那、若狭屋の萬七様は、この弔ひにござつたさうにござります。

庄兵　そんなら、あのお人を頼んで、悴新兵衛めが質入れしたといふ、大切な定家の色紙、鑑定書の在所探さねば、玉屋の身代にかゝわる事ぢやわいやい。

左助　左様でござります。どうぞ萬七様にお屋敷の手前、日延べの事をお頼みなされませ。

庄兵　イヤモウ、在所が知れねば、おれは悴が代りに、牢へ入らにやならぬわいの。

左助　左様でござります。サ、お供いたしませう。

ト件の鳴り物にて、兩人舞臺へ來る。この時、門の内より淨雲、長髪なる所化にて、黒衣、禪宗の袈裟、白帷子にて、塗り網代の笠、半紙綴ぢの店經を讀みながら出て來り、兩方ゆきちがうて

淨雲　ア、、どうぞ今夜は、近所だけ先へしまうて來ようか。

ト行くを、庄兵衛見附けて

庄兵　ヤ、所化の淨雲どのぢやござらぬか。

淨雲　ヤ、これは玉屋の大旦那様、お暑いに、どちらへお出でなされまする。

ト笠を取る。長髪の體。庄兵衛見て

庄兵　貴僧は、いかう長髪でござるの。

淨雲 ハイ、先達てより暑氣中りやら、誠に持病が手傳ひまして、久しく床につきましたが、この間は餘程快うござります。

庄六 それは御難儀、隨分大事にさつしやるがようござる。

淨雲 有り難うございまする……イヤ、庄兵衞樣、この間噂で承りましたが、新兵衞樣が家出をなされたとやら、その上不慮な噂も聞きましたが、いよ〳〵左樣では、お氣の毒な儀でございますな。

庄兵 忝うございます。どこで御籤を取りましても、命に決して別條は無いと申す事、それが誠に命綱。イヤ、それにつけてもお前の事、先達てよりのお賴みゆゑ、相應な寺があるから、お前をそこへ据ゑようと、檀家の世話人衆の相談で、今朝わしが所へ、掛け金の五十兩、こりやお前を寺持ちにしようと、講中が掛け貯めたこの金。わしも聞かつしやる通りの取込み。こりやお前へ渡して置きませう。コレ左助、今の金を

左助 ハイ〳〵。

ト財布のまゝ五十兩を出し

モシ、五十兩ございます。慥かにお受取りなされませ。

ト渡す。

淨雲 これは〳〵、お志しの掛け金、有り難うございまする。いづれ私しが据りまして、宜しからうと思し召しまする寺なら、何分お賴み申しまする。お取込みとあればこのお金は、愚僧がお預かり申して置きませう。

ト財布を懷中する。

庄兵 イヤモウ、常から物堅いお前ゆゑ、檀家衆の受けがよいぢや。誠にお前は以前は侍ひ。親御は慥か人手にかゝつて

淨雲 左樣でございまする。二十ヶ年以前、實の親ども私しを離別いたし、緣ございまして御家中へ養子。その養父こと、八丁縄手で闇討ちにあひ、直に家は御改易。その砌り、養父曾平次の實の娘三歳になりますが、俄の雨を凌ぐため、家來の小者、何やら荷物の中に寢させ置きましたを、金目な品と心得まして、盗み取られましたとの事。いづれに育ちまするやら、養父横死と同じ日の由。私しも身の上を悔みまして、斯樣に出家いたせしは、誠に大腰抜け。養父の敵を討ちませぬは、武士の風上にも、置かれぬ奴でございまする。

庄兵 それはイヤ氣の毒千萬。してお屋敷では、未だ養父を討ちし者の、御詮議はなされませぬかな。

淨雲　イヤモウ、却つて養父を討つたる者が、今更知れましたる時は、私しがマア心の内は、どのやうに。

庄兵　ヤ。

淨雲　ハテ、出家の身分、その敵の知れませぬが、愚僧の仕合せ。拂へられなば是非ともお仕置ア、恐ろしや〳〵。南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト思ひ入れ。

庄兵　成る程、こりやァ今更仕様はござるまいてナ……して、お前、これからいづれへござります。

淨雲　ハイ、店經に廻りまするが、あなたはモウ、お歸りなされまするか。

庄兵　左様でござる。こなたと道まで話しながら、連れ立つて行きませう……コレ、左助、てまへは跡へ殘つて、萬七様に逢うて、色紙日延べの事を、何分お賴み申して來やれ。

左助　畏りました。お目にかゝつて、是非ともお賴み申しませう。

ト弔ひの鳴り物、庄兵衞先に淨雲、帳を繰りながら向うへ、左助は門の内へ入る。矢張りこの鳴り物にて、右の道具引いて取る。

本舞臺、禪寺の本堂の體。正面本尊、天人の欄間より、誂への旛大分に下がりある。半鐘の音にて道具とまる。

ト奥より玉觀、雲慶、鯛入、鯛山、黑衣、禪宗の袈裟、所化の拵へにて、鐃鉢、銅羅、誂へのきん太鼓、この道具を運び、佛前へ蠟燭をともす。この時鐵五郎、編笠をかむり、片肌脫ぎにて、戸板に並べし白赤飯のへぎを大分持つて來る。藤六、長吉、これも編笠にて、赤飯の荷ひを持ち出す。がま吉土瓶茶碗を大分取つて來る。長屋の者四人、件の棺を持ち來り、正面よき所の奥の臺へ据ゑる。仕出し大勢出て、よき所へ坐る。藤兵衞、赤飯を盛る。皆々手傳ひ、吉六配る。茂右衞門、萬七、蛇がしら四本を束ね、持ち來り

萬七　この蛇の頭は、どこへ置くのだ〳〵。

トあちこちして、欄間にかけたる萠黃色の旛に引かけ、誤まつて旛を落す。

南無三、旛を引き落した。

鐵五　その蛇と一緒に、そこらへ寄せて置くがよい。

吉六　玆へ寄越しなさい。詰らぬ物を持つて來たな。

トよき所へ掛け置く。

茂右　モシ、お所化様、佛の戒名は何といひます。

四人　おめこう院おかんこ信女。

茂右　覺えよい戒名だ。コレ〳〵、てめえ達は、まだ編笠をかぶつてゐるか。

鐵五　施主だから、いゝぢやァねえか。

藤兵　いつまでも施主でゐるものか。モシ、大屋さん、お前の役だ。口上を云ひなさい。

茂右　成る程、弔ひの口上は、家主の役でござる。

ト思ひ入れあつて

略儀ながら、これより口上を以て申し上げ奉りまする。まづは殘暑のおいとひなう、遠方御苦勞樣に、斯樣に賑々しく葬禮にお出で下さりまする段、輿の中なる佛、おかんこ信女は申すに及ばず、長屋店中總寺中、いかばかりか有り難き仕合せに存じまする。佛の儀は、殊の外慈深き生れ、有金も餘程ございましたるにつきまして、葬禮の儀も、殊の外念を入れまして、當院の住持とも相談を仕り、昔し天竺にて、釋尊思ひつかれましたる葬禮の儀は、かん〳〵のうきうれんすと申すもの、唐音にて相勤めましたるを、今日弔ひに取組み仕り、御覽に入れまする。亡者の儀も末期に及び、好みましたる儀にござりますれば、棺の内の佛にも、葬禮の儀を聞かせたうもござりますれば、早桶の繩をほどきましてござりまする。まづは住持各〻樣へ、お目見得御禮でござりまする。

ト此の時所化四人、奥の臺を下の方へ勦かひに置き、これへ腰をかけ、鯛山は太鼓、雲慶は鐃鉢、鯛入は銅鑼、玉觀は枠にかけたるきんを摺り鉦に見立て、各〻衣の袖を捲り、鳴り物になり、よき程あつて奥より二位官和尚、紫衣、誂へ禪宗の頭巾をかぶり、如意を差し、長き松明を持ち、香をはき、出て來る。鯛門、所化にて、天蓋をさしかけゐる見得。茂右衞門思ひ入れあつて、鳴り物打あげる。

東西々々、高う扣へましたるは、卽ち住持二位官和尚。持ちましたるは秘藏の松明、これは死人に火車の附きましたる節、これにて拂ふの道具。まづは和尚引導に相かゝりまする。

ト二位官和尚思ひ入れあつて、鳴り物掠めて打つ。

二位　それ、つら〳〵おもんみれば、汝かん〳〵のう、きうのぎうれんす、きうはきうれん、さしよなら。西方十萬億土へおかんこ信女。かん〳〵と往生する事疑ひなし。南無阿彌陀佛々々々々々々

ト松明にて棺の上へ思ひ入れして

引導とは……ひいはう〳〵ホウ。

ト松明を持ち、上の方の椅子にかゝる。鐵五郎、藤六、長吉、編笠を頭巾のやうに拵へしをかむり、

各自扇を持ち、袖を手へ巻き附け、身拵へして、舞臺眞中へ立ち並ぶ。

茂右　高う迎へましたる今日の施主方へ、お慰みのため、弔ひの踊りを御覽に入れ奉りまする。解り ませぬところは、私し口上を以て申し上げ奉りまする。まづは三人の者、踊りにかゝりまする。

ト口上濟む、と三人とも、扇をたゝみ、一時に後へ投げる。四人の所化鳴り物にかゝり、二位官和尚松明を如意にてこすり、胡弓と見せる。直に地へ取り、鳴り物入り。

〽葬禮のふきう往生、お布施がりかんで寺難儀、どそならえ。隱亡、湯灌しよ穴掘り香剃り、あてみんさ、めん〳〵がよくても死んだげな。

ト三人踊る。この音を聞き、棺は段々とうごめき、とゞ倒し、早桶の中よりおかん、女形を坊主に剃りこぼち、頭に所々毛の殘りし鬘。胡麻鹽を附け、摺り鉢をかむり、經帷子にて踊り出る。

〽西方如來さん、そつちうめいたがよい〳〵か、頓死頓病折れ口で、西瓜と天麩羅食傷さ、嘘ならえ。本當のう所化達が

かん　お弔ひでは浮かみんせん。

ト踊り廻る。

〽佛が踊れば和尚も踊る、施主まで浮かれて踊るぞえ、坊主々々小坊主。

閻魔の前でも踊るぞえ。

三人　オ・サテ合點だ。

ト思ひ入れ。鳴り物早めて打上げる。おかん思ひ入れあり

かん　往生とはツィぽつくり

トこなし。藤兵衛、萬七。おかんを捕へ

二人　この佛は、魔がさしたく。

かん　イエ〳〵、魔はさゝぬが、輿の中で蚊がさしたわいな。

藤兵　アヽ、そんならおかんこ信女は、蚊に食はれて生きかへつたか。

かん　アイ、蟹を食つて死んだわたしが、蚊に食はれて生きたわいな。

皆々　イヤア、佛が生きたワ〳〵。

萬七　このおかん佛に生きられては、此方の工面が

かんヤ、お前は萬七さん

萬七　こいつは堪らぬ。

ト逃げ出すを、おかん追ひ廻して捕へ

かんエヽ、男づら、お前マアようわたしを、騙さんしたのく。
萬七アヽ、コレく、外聞が惡いく。靜かにしろく。
藤兵外聞か當分か知らないが、なぜこの佛は、摺り鉢をかぶつて死んだ。
かんサア、わたしも合點がゆかぬわいなァ。
茂右ハテ、盆の内に死んだ佛は、摺り鉢をかぶせて置かぬと、あの世から娑婆へ來る精靈が、見附け次第に頭をくらはすとの事。もし疵が附いて、間違ひが出來ると、盆前になつて店子をぶたれるは、家主が合點せぬワ。そこでかぶせたものよ。
かん頭痛の咀ひ同然なこの摺り鉢。コレ、萬七さん、いつぢやと思ひなさんす。盆前と聞いては、亡者のわたしも云はにやならぬぞや。いつぞや小女郎さんの遊びの金、二階廻しに請合はせ、どうなさんすと催促すりや、お前なんと云はんした。有やうは小女郎は附けたり、其方におれが氣があるゆゑ、毎日通ふと云はんすゆゑ、誠と思うて仇まくら、かはした程のいとしいお前。それぢやによつてわたしが請合ひ、この物前に勘定濟まねば、内證の手前、云ひ譯がござんせぬ。折角死ねば生きかへる。生きたところが深川へ、この姿では歸られず、この世迷へばあの世で迷ふ、ほんに迷ふといふ文字は、誰が書きそめしぞ。エヽ、恨めしい、萬七さん

藤兵爰らでどろく
鐵五合點だ。

ト弔ひの太鼓を打つ。

萬七エヽ、いゝ機嫌な手合ひだ。コレ、おかん、おらアてまへに請合つてもらつた借りは無いぞ。この佛めは樣々な熱を吹くな。無駄を吐かすと、女とは云はさぬ、ぶッ挫くぞ。はッッけ坊主め。
かんナニ借りは無い。エヽ、こなさんはあつかましい。その上に、知るまいと思ふか、あの身を投げた小女郎さんを、コレ爰にゐる藤さんが連れて戻り、相手の男が死んだから、天下晴れて妹を、親方へも渡りをつけ、萬七さんの女房にやると、可哀さうに、いかに相手が死んだとて、その目論見が癪の種。その上、食傷で死んだこのおかん。エヽ、お前方は惡い巧みを
藤兵コレく、佛滅多な事を云ふまいぞ。萬七さんは格別、おいらはそんな相談は、知らないぞ知らないぞ。
かんイエく、同じ長屋のわしぢやもの、よう知つてゐるわいな。
萬七よし知つてゐやうが、ゐまいが、もう斯うなつちやア、うぬらがやうな死ぞこなひに、お取上げがあるものか。こゝな間抜あまめ。

ト おかんをくらはす。おかん、額を抱へて倒れるを、茂右衛門初め長屋の者ども腹を立て

茂右　コレ〳〵、この野郎は馬鹿な奴ぢやァないか。貸借りは相對づく。なぜおらが店子の佛をぶちやァがつた。

鐵五　佛をぶたれては、長屋の者が合點しないぞ。

藤六　あの野郎を、締めろ〳〵。

茂右　家主が尻持ちだ。この猿唐人め。

ト 後に立てありし蛇の束ねたるを旛の搦みしまゝ取つて萬七をくらはす。

萬七　うぬ、大屋め、ぶちやァがつたな。

鐵五　ぶつたがどうした。店子が大屋の尻押しだワ。

萬七　ナニ、大屋の尻を押す。店子の亡者めらが

三人　この野郎め。

ト 天秤棒、或ひは手頃の割り木等を持つて、ぶつてかゝる。萬七も蛇の頭を持つてかゝる。茂右衛門ひつたくる。この時、蛇の頭へ萌黄の旛からみ、皆々の棒を一つにして、大蛇のやうに見える。

藤兵　モシ〳〵、お寺様、間違ひが出來ました。仲人を呼びに、太鼓でも打ちなさい〳〵。

二位　合點ぢや〳〵。

ト 件の鳴り物を烈しく打ち、藤兵衛とめる。茂右衛門、萬七、鐵五郎、吉六、その外皆々件の蛇の頭を遣ひながら、捨ぜりふにて奥へ入る。おかんは萬七を突きこかし、打敷をまくり、下壇の下へ入る所化皆々下座へ入る。二位官和尚殊り

二位　イヤハヤ、怪しからぬ佛ではあるぞ。

ト あたりに取散らしたる物を方附ける。かすめて靜かなる禪のツトメになり、向うより長八、高瀬の船頭にて、跡より新兵衛、釣合ひ惡き長八が紺の單衣を看て、三尺帶を締め、悄れたる體にて出て來り

長八　モシ〳〵、お前、何も其やうに、くよ〳〵思はつしやる事はねえわな。

新兵　さうではあらうが、可哀や女ばかり殺しては、どうもわしが、死んだ小女郎へ

長八　ハテ、それだからお前、坊主になつたら、死んだ女中も浮かまうではないか。

新兵　左樣ではござりませうが、ァ、、可哀さうな事をしましたわいの。

ト 悄々として舞臺へ來る。長八思ひ入れあつて

長八　ハイ、ちとお賴み申しませう。

二位　これや、小坊よ、案内があるぞ。

トこれにて鯛門出て

鯛門　どれからござりました。

長八　ハイ、私しは榎木戸の船乗りでござりまするが、ちつとお願ひがあつて參りました……モシ、お若いの、此方へ來なさい〳〵。

新兵　ハイ、御免なされませ！〳〵。

ト下の方に塵をひれつてゐる。

二位　して、願ひとは何事でござるな。

長八　イエ、別の事でもござりませぬが、私しがこの間、水神の森の下に、船を附けて居りましたが、曉方でもござりましたか、浪除けの杭にひつかゝつて、苦しみまするこの若いの、引あげて樣子を聞きましたら、女と二人心中に、身を投げたところ女は死んで、わしばかり助かりました、殺してくれと云はれますから、そりやァお前無分別、女の死んだが氣にかゝらば、坊主になつて、浮かませてやらつしやるがよいと、やう〳〵その相談にきめて、わしが内へ置きまして、今日連れて參りました。お前樣のお弟子になされて下さるまいかと、そのお願ひに上がりましてござり

まする。

二位　それは珍事でござる。二人で身を投げて、一人助かるとは、成る程、こりやまだ壽命のあるしるしでござる。して、女中は死なれましたか。

新兵　左樣でござりまする。

二位　南無阿彌陀佛々々々々々々。

新兵　只今このお人が申されまする通り、二人一緒に身を投げても、汐時の惡いのか、一向に死にきれず、汐の干潟に打上げられ、このお方のいかいお世話。此やうに單衣物まで借りまして、お願ひに上がりました。死んだ女が菩提の爲、私しを、どうぞお弟子になされて下さりませ。それがお願ひでござりまする。

二位　成る程、尤ものお願ひ、隨分と弟子に致して進ぜませうぞ。

長八　それは有り難うござりまする。

新兵　左樣なら少つとも早う、サ、、お香剃りを、お頼み申します〳〵。

二位　これは餘り性急な事でござる。その上、こなたの旦那寺がござらう。一應はこれへも屆けねば、致し憎いが、貴殿の寺はどれでござるな。

新兵　ハイ、私しが寺は、慥か牛島の東福寺でござりまする。

二位　ヤ、その東福寺はこれでござるが、愚僧が檀方の内で、貴殿は何屋の何といふ人でござる。

新兵　エヽ、これが東福寺様でござりまするか。私しは玉屋庄兵衛と申す者の倅、新兵衛と申しまする

二位　エヽ、玉屋庄兵衛どのゝ御子息か。これはしたり、お見外れ申した不調法。併し、滅多に寺へは御参詣にはならぬが、元服なされて、初めてゞござりませうな。

新兵　左様でござりまする。まだ前髪のござる時、参つたまゝでござりまする。

二位　左様かな。御信心な儀でござるが、とても内へ知らせましたら、よもや親達が、坊主にしようとは申されまい。

長八　こりや邪魔の出來ぬうち、お弟子になさるがようござりまする。

新兵　左様々々、とても思ひ立つた事でござるから、早う剃つて下さりませ。

二位　左様に申さるゝ事なら、ようござる、愚僧が香剃り致して進ぜう。

新兵　ハイ〳〵、有り難うござりまする。

二位　コリヤ、小僧、剃刀を持つて参れ。

鯛門　ハイ〳〵。

トあたりより箱入りの剃刀を、金盥と共に持つて來る。

長八　これはハヤ、お手づから、お世話様でござりまする。

トこの時、二位官和尚、鋏にて新兵衛の元結を切る。新兵衛は散らし髪になる。二位官和尚思ひ入れあつて

二位　念佛衆生せつしゆふせ。南無阿彌陀佛々々々々々々々々。

ト手合せする。この時分、奥より左助出かゝり、よく似た人と思ひ、窺ひゐる。新兵衛、髪を揉みしまひ

新兵　モシ、お所化様、毛請けを貸して下さりませ。

鯛門　ハイ〳〵。

トそこらを尋ね廻りても、團扇も無きゆゑ、佛前にある七本卒塔婆を持ち來り毛請けは見えませぬ。これでもお使ひなされませ。

ト渡す。

新兵　これは七本卒塔婆ではござらぬか。

二位　左様でござる。併し、卒塔婆で香剃りの髪を請けまするも、これも佛縁でがなござらう、南無阿

彌陀佛々々々々々々。

ト既に剃りにかゝる。左助、この時走り寄り

左助　ア、、モシ〳〵、お待ちなされませ〳〵……ヤア、お前は若旦那様でござりまするな。道理こそ知れませぬ筈。モシ〳〵、お前様のお行くへが知れませいで、お内は誠に亂騒ぎ。サア〳〵、お歸りなされませ。

ト手を取りにかゝる。

長八　ア、、コレ〳〵、そんならこのお人は、お前の旦那か。

左助　左様でござりまする。

新兵　コレ〳〵、左助、とてもモウわしは、内へとては歸らぬ程に、この段を親仁様へも、よう話してくれ。そして、お屋敷から參つた、あの色紙と鑑定書は、小女郎が花代につまつて、あの出入り朋輩、若狭屋の萬七、あの男を頼んで質へれしたほどに、委細はあの萬七に聞けば解るゆゑ、よいやうにしてくりやれ。あの品も、お屋敷の預かり物と知らば、なんの質に置かうぞ。こればかりは云ひ譯ない。誠に、内に安閑としてゐると、あの云ひ號けのお霜と、祝言をせねばならずそれでは小女郎へつがうた詞が反古になるゆゑ。あの女と二人、派手な衣裳を拵へて、心中して

と身を投げたに、女は死んで、わしは助かる。よく〳〵な業人。もう〳〵、浮世に飽いて、コレこのお方を頼んで、坊主になるつもりぢやほどに、一家親類へこの由を云うてくれ。サア、香剃りをお頼み申しまする。

左助　ア、、モシ〳〵、それはお前様、餘りな思ひ切りでござりまする。あの色紙の行くへが知れませぬので、お前様が盗んで駈落ちしたのであらうと、誰れ云ふとなく悪い噂。あの品が出ませぬと、大旦那は入牢とならうも知れませぬ。今一度お歸りなされませ。

新兵　サ、それ程の御難儀ぢやによつて、出家するのぢや。今更内へづか〳〵戻つて、ひよつと物事がめでたうゆけば、おれはあの内の跡取りではないか。その時はソレ、嫁を取れと云ふワ。それ、その嫁は誰れぢや、云ひ號けゆゑお霜を持てと、親類が勸めるワ。ソレ、その時は、死んだ小女郎へ、どうして義理が立たうぞ。それぢやによつて、矢ッ張り坊主ぢや。サ、お香剃りを〳〵

左助　成る程、これは御尤もでござりまする。

長八　どうでこの人は、死神ではなうて、坊主神に見込まれたのであらう。矢ッ張り坊主になるがようござらう。

左助　不料簡な事をなさるゝよりは、坊主の方が増しでもあり

新兵　それぢやによつてこの通りを、親類内へ話してくれ。どう思つてもおれは

トこのせりふ云ひながら、また月代を揉みにかゝる。この毛請けに使ひし七本卒塔婆の裏に書きし、

戒名、施主の名を書きたるを新兵衛見附けて、思ひ入れ。

ヤ、「俗名玉屋新兵衛菩提のため、施主三國屋小女郎」……ヤ、、、、、似寄りの名もまゝあれど、玉屋新兵衛菩提のためと書きたる上、施主は三國屋小女郎。誠に命日は……ヤ、今月今日。もしもこの程二人連れ立ち、身を投げたその時に、あの小女郎が助かつて、わしは死んだと思ふから、お寺へ頼んで寄越したか。そんなら、彼奴は死にもせず、生きてゐるかえ〳〵。

ト俄に腹の立つ思ひ入れ。おかん、打敷を上げ、窺ひゐる。

二位　それに致せこの卒塔婆は、どこから頼んでこの寺へ

トよき時分より鯛入立出で

鯛入　ハイ〳〵、その卒塔婆は、先程女髪結ひのおせんとやらいふ女中が、深川から參つたというて、この香奠を添へて、戒名も無い佛、川へはまつて死んだ男、まだ戒名もない程に、よろしくお附けなされて、御回向をお頼み申しますると、香奠と一緒に持つて見えました。慥か小女郎といふ藝者から寄越されました。

ト香奠を新兵衛へ渡す。

二位　もしやお心當りはござりませぬか。

ト新兵衛、香奠を見て

新兵　ヤ、女の手跡で回向料、三國屋小女郎と書いたる手は、こりや死んだと思ふた小女郎が手ぢや。そんなら彼奴は、死なずにゐたかいやい〳〵。

ト腹立てし思ひ入れ。おかん、前へ出て

かん　新兵衛さん、小女郎さんは、死なぬぞえ〳〵。皆々ヤ、化け物ぢや〳〵。

ト逃げ出す。

二位　コレ、この女中は、葬禮の半に蘇生した佛。

かん　二階廻しのおかんぢやわいな。新兵衛さん、恥かしうござんす。

新兵　はんにこなたは、深川のおかんぢやないか。どうしてマア

かん　サ、わたしが俄にとりつめて、往生したも、お前や小女郎さんが、身を投げて心中と、聞くとそのまゝ持病の癪。おいとしいお二人と、思うてゐるうち、合長屋、兄の惡者藤兵衛が、内へ連れて

來たのは妹の小女郎、あの惚れてゐる萬七を、内へ引ッ込み深川の、年の殘りも勘定して、萬七どのへ女房にやると、聞くとわたしはとりつめて、死んだ葬禮、思はぬ蘇生。そんならお前も死なぬのかえ。小女郎さんにこのおかん、お前も息災で、こりや近年は、死んで生きるが流行りと見えた。

新兵　それでわかつたあの小女郎め。わしに愛想が盡きたゆゑ、心中と僞つて、もしか死んだその跡で、あの萬七めが女房になる約束で、あの兄めと云ひ合せの惡だくみ。おのれマア、どうしてくれうぞ。

ト腹の立つたる思ひ入れ。

左助　さう聞いては、腹の立つのも御尤も。

長八　寢返りをした女め。振り込んで、ぶッ挫け〳〵。

ト長八立騷ぐを二位官和尚とめて

二位　ア、、コレ〳〵、人の過ちある事を、出家が聞いてそのまゝに。後では寺の名の出る事。どうか仕樣が

新兵　どうしたらマア腹が癒よう。あのマア情なし藝者づらめが。腹が立つわえ。

かん　サ、その腹立ちを晴らす仕樣は。モシ、わたしが智慧は、斯うぢやわいな。

ト新兵衞へ、とつくりと囁く。

新兵　ア、、そんならおぬしが經帷子、胡麻鹽あてゝ、彼奴が内へ

かん　幸ひ盆の十三日、その新盆を幸ひに、ヒユウドロ〳〵と出かけたら、なんぼ氣強い藝者でも、癪を起すか、目を廻すか。

新兵　それで彼奴が死にをれば、手も濡らさずに戀の意趣。見かへられたる萬七めも、どうぞ首尾よう目を廻させ

かん　男も女もとり殺せば、お前もわたしも恨みが晴れ、濡れ手で粟とはこんなもの。

二位　佛が二人出來たなら、その弔ひで寺は大慶。

左助　日が暮れたなら早速に。

かん　その幽靈の稽古が肝腎。

新兵　親仁の年忌に、幽靈は如何な事ぢやが、これも追善、手向けの水。

かん　わたしが脫いで

長八　早く支度を

新兵　ドリヤ、着替へようか。

ト新兵衛帯を解き、おかん、帷子を脱ぐ思ひ入れ。長八、左助、皆々手傳ふ思ひ入れにて、捨ぜりふよろしく、時の鐘・鐃鉢の音にて、道具廻る。

本舞臺、番場町張子屋の體、二重舞臺、軒に盆提灯を吊し、下の方勝手元、揚げ流し、水瓶、その外臺所道具の畫き起し。よき所に半窓。その前に精靈棚、門口に小女郎の衣裳を棹に通し、その側に件の守りと、松山のお机、竹に掛け干してある。門口に張子の達磨、下張りのまゝとり散らし、上の方障子屋體、筒行燈をともしあり、すべて七月十三日の夜、鐃鉢、甚句の合ひ方にて道具とまる。ト萬七、吉六、酒機嫌にて踊つてゐる。藤兵衛、達磨の干したるを片寄せてゐる。あたりに誂への銚子、盃をとり散らしてある。

藤兵　モシ／＼、お前方も、いゝ加減に踊りなさるがいゝ。盆前だに、よい機嫌な手合ひだ。

吉六　これは兄貴、どうだ。いゝ機嫌どころか、おいらは小女郎の相談がきまれば、盆前に五十兩取れるもの、誠に大浮きサ。

萬七　その盆前にさしかゝつて、金のいるのはおればかり。爰にゐるあの吉六どのゝ方も、年拔きの五十兩。兄ぃ藤兵衛も、小女郎を貰ふ支度金が

藤兵　わしが妹の支度金は、まだ外に五十兩。そいつを取つても、今直に上げるのではない。當分わしが内で、藝者に出すつもり。餘ッほど稼いだ上に、お前の方へ進ぜますワ。いはゞ女房にやらうといふ、その五十兩は手附といふものだ。

萬七　それぢやァ深川の年拔きが五十兩、兄貴が五十兩、都合で百兩、金は出しても小女郎は、矢ッ張り町藝者。あの子に逢ふ度に、花代が出るのか。

藤兵　左樣サ。茶屋小屋は勿論、お前のお内から呼びに寄越さしつても、花代を取りやす。その代りにころばすのは、お前の物だから勝手にするがよい

萬七　そりやァ又、世話をする旦那だもの、そこらは目こぼしもあらう。何にしても高い代物だ。

藤兵　高い筈サ、明日から雇ひに出すにしても、丸裸だわな。帶も着物も川へはまつたから、あの通り汐水に染まつて、毎日干すが、しめりが取れぬ。

吉六　そりやァその筈サ。併し、お月樣で干したといつて乾くまい。それに、あの守りやお札も濡れたのか。

藤兵　ありやァ妹が懐にあつた、矢弓樣のお札サ。時に今夜は、お迎ひ火を焚くものだ。このマア干

した達磨も片寄せて置かうか。

ト達磨を隅へ片寄せる。

吉六　ア、、そりやア達磨だの。わしは悪い目だ。西瓜船が着いたと思つた。

萬七　何を、無駄を云ふな。して、小女郎は内か。

藤兵　ア、、いま髪を結つてゐやす。コレ、妹や、よくば來さつし。妹や〳〵。

ト簾の内にて

小女　アイ〳〵、いま參りまするわいな。

ト合ひ方になり、藤兵衛が大縞の浴衣を着て、平括けの帶。女髪結ひおせん、手を拭きながら出て來り、二人を見て

これは深川の親方さん……萬七さん、ようお出でなされましたな。

萬七　おせん坊、爰まで結ひに來るのか。

せん　アイ、どういふ事か、小女郎さんは、わたしが結うてあげぬと、外の手では氣味が惡いと云うてな。

藤兵　モシ、御覽じませ、妹が形はわしが浴衣サ。とんだ化け物だね。

萬七　併し、別條もなく助かるとは、それも今兄貴が話した、矢弓樣のお守りの所爲であらう。イヤ有り難い稲荷樣だ。誠に仕合せな事だ。

小女　お稲荷樣は有り難うござんすが、有やうはあの時に、いつそ殺して下さんしたら、今の思ひはござんすまいに、いとしい男と死別れ、わたしが一人殘つたとて、なんのこれが仕合せでござんせう。生き殘つたは、却つてわたしが不仕合せ。助けなさんしたお稲荷さんが、恨みでござんすわいなア。

せん　これはしたり、なんのお稲荷さんを恨みなさんして、よいものかいなア。

藤兵　モシ〳〵、おせんさん、打ちやつて置きなさい。ありやア稲荷樣に云ふのぢやない、わしに云ふねすり事だ。この間鐘ケ淵で、網にかゝつて上がつたは妹。それからわしが看病して、とう〳〵此方の物にしたから、今日はめでたく髪を結つて、深川の方の年拔けが濟めば、萬七さんと相談づくで、今日からでも町藝者に出すつもりサ。それに、聞きなさい、心中して死んだ男の事ばかりくよ〳〵と。コレサ、てめえを釣り出して、死なうとした新兵衛め、いはゞおれが爲には妹の敵。同じやうに網にかゝつて上がつたとて、なんの彼奴を助けるものか。いゝ加減に無駄を云ふものだワ。

小女　モシ、兄さん、そんならわたしの氣合ひが直ると早々に、アノ町藝者と云ひなさんすが、どうでもわたしや、出にやならぬのかえ。

藤兵　知れた事サ。深川の親方も、心中の身投げ藝者、抱へても居られぬから、早々住替への相談。折よく萬七さんが聞きつけて、五十兩の年拔きも出さうし、その上、身のまはりの支度金も五十兩出して、都合百兩で、行く〳〵はあなたの女房。當分のうちは、町藝者に出すを合點で、取極めた相談サ。

小女　その相談は、極まつたでござんせうが、兄さん、お前マア、よう考へて見なさんせ。云ひ交した新兵衛さんと、身を投げたわたし。ぬしばかり死なしやんして、わたしはおめ〳〵助かつて、人さんのお世話になり、町藝者に出る時は、世間で何と云ひませう。呼ばれた先の客人へ、どうして顏が合はされませう。こればかりは、わたしやどうも否でござんすわいな。

藤兵　ナニ否だ。否ならよいと云ふやうな、兄さんだと思やアがるか。よう〳〵這ひづる時分から、親知らずに貰つたうぬ、煮て食はうが、燒いて食はうが、兄の威光で好きにするわえ。

小女　そのやうに、お前の氣に叶はぬ妹なら、わたしを貰うた親許へ、譯を云うて返しなさんせ。して、實の親は、どこでござんすえ。

藤兵　その親は、ナニ、アノそりやア

小女　どこから貰ひなさんしたえ。

藤兵　べら坊め、不通に貰つた貧乏人、今時分は死んだも知れない。それまでおれが知るものか。

小女　なんの知れぬ事がござんせう。尋ねて返して下さんせいなア。

藤兵　まだうぬア兄に口答へひろぐな。萬七さんの世話にならにやア、ぶんのめしても得心させるワ。うぬ。

ト割り木を持つて打つてかゝる。皆々とめて

萬七　コレ、兄貴、そりやアこなた、氣が早いといふものだ。

吉六　左樣サ。コレ、わしが方の年拔けが濟まねば、此方の代物だ。手荒くさつしやるなよ。

せん　小女郎さんも、氣も揉めやうが、マア〳〵、相談づくになされませ。

萬七　さうサ〳〵、物事相談づくにするがよい。併し、身を投げようとした妹。この上またどんな事をしようも知れぬ。兄貴、必ず刃物を散らして置かぬがよい。

藤兵　さうぢや。さう死神にとツつかれては油斷がならぬ。小刀一本でも出しては置かれぬ……爰には出刃も刺身庖丁も、取上げ婆アだ。

ト そこらを尋ね、刃物を殘らず取上げる。

吉六　それにしても今の話しは、今夜中に解りますか。

萬七　いづれ兄貴と、もう一遍談じねばならぬ。

小女　いくら相談しなさんしても、わたしや不承知でござんすぞえ。

藤兵　ナニ不承知だ。このあまめ、うぬ、叩ッ挫いて

ト 立ちかゝる。

萬吉　ハテマア、靜かにさつしやい。

藤兵　それだといつて、あんまり口が過ぎますわな。

ト 合ひ方になり、鐃鉢の音。萬七、吉六、藤兵衛をなだめながら、奥の方へ連れて入る。小女郎を、

せん　お前も定めし氣も揉めやうが、惡い兄さんを持ちなさんしたが、その身の不仕合せといふもの。

其うちには、よい智慧も出ませうほどに、マア〳〵、急かずと氣を長うしてゐなさんせ。それにつけても、おいとしいは新兵衛樣、お前のお頼みなさんした通り、わたしやお寺へ行て、御回向を頼んで參りました。大方明日は、戒名も附けて下さりませうほどに、また明日參つて、戒名を

貰うて參りませうわいな。

小女　そりや嬉しうござんす。したが、兄さんへは、沙汰なしに頼むぞえ。

せん　承知でござんす。新盆ではあり、お精靈樣に、線香も絶えぬやうになされませ。モシ必ず不料簡な事しなさんすなえ。わたしや明日參りませう。

ト 出かける。

小女　おせんさん、また明日來て下さんせえ。

せん　アイ〳〵、參るわいな。

ト 干しある着物を見つけ

これはしたり、夜干しにしたとて乾かうかいなア。男といふものは氣の附かぬもの。掛け竿にな

と掛けて置きなさんせ。

ト 干し物を取込み、よき所へ置き

ハイ、左樣なら又明日。

小女　また來なさんせえ。

ト 唄に鐃鉢の音。おせん思ひ入れあつて、向うへ入る。合ひ方。

ほんにマア、あのおせんさんは、丁度わたしの兄弟のやうに、よう世話して下さんす。わたしも又、新兵衛さんの事が、どうして忘られう。いとしい男はむごたらしう、水に溺れて死なしやんす。跡に残つてこれがマア

ト思ひ入れあつて

これはしたり、香爐も消えてある。ドレ、盛つて置きませうか。

ト唄かすめて鐃鉢の音。向うより鐵五郎、藤六、長吉、竹笛を吹きながら、所化の玉觀、雲慶を引つ張つて出てくる。跡より淨雲、店經に出し髷にて出てくる。

鐵五　コレ〳〵お所化、おらが内は爰の裏だ。寄つて話して行きねえな。

玉觀　それは有り難いが

雲慶　今夜は店經に出ました。

淨雲　モシ〳〵　あなたは鍛冶屋の鐵五郎樣、お前樣は、この裏でござりまするか。

鐵五　さうサ。寄つて話しなさいな。今夜は盆だから、若い者が寄つて、竹笛の稽古を始めるつもりサ

藤六　コレ〳〵、鐵公、てめえは夜なべだらう。この暑いのに、鍛冶屋の夜なべはあやまるの。

鐵五　馬鹿を云へ、盆前だぞ。

玉觀　盆前だから、取分け坊主は急がしうござりまする。

長吉　その代り、お布施がしつかりだらう。少つと奢りねえな。

雲慶　また惡口を仰しやります。

鐵五　マア、少つと寄りねえ。イヤ、とんだ切り見世だ。

ト三人して三人の所化を引つ張り、手が廻らぬゆゑ、淨雲は此方へ來る。そのうち三人、所化を引つ張つて路地へ入る。淨雲殘り、跡を見て

淨雲　ヤレ〳〵、しつこい若い衆ぢや。たうとう二人は引ッ張られて行つたか……慥か張子屋藤兵衛樣は、爰であつたか知らぬ……モシ、お頼み申しませう〳〵。

ト門口より訪れる。矢張り合ひ方。内には小女郎、新兵衛の事を思ひ出したる體にて、門口へ心づか

す

小女　どうで邪慳な兄さんが、わたしが儘にも、よもやしては下さんすまい。と云うて親方さんへは五十兩、その金の出來ぬときは、わたしが生きてゐるうちは、藝者奉公せねばならず、生きてゐては、人さんの笑ひ物。矢ッ張りわたしや新兵衛さんへ心中立て、死んだら惡い噂も拔けやう。こりや矢ッ張り死ぬ心に

トあたりを見廻す。淨雲門にて、この樣子を窺ひぬる。

自害せうにも刃物さへ、取上げられて不自由な憂き目。どうぞ外に、よい死やうが、

ト思ひ入れあつて、引窓の繩を上げてあるを見附け

ほんに、あの引窓の繩でなりと、見苦しい事ながら、首かゝりして

ト綱を執へて

此マア綱を、どうしたらよからうやら。人さんの噂に、聞いたやうにして、この踏つぎの上から飛んで、一思ひに

ト踏臺を持ち來り、よき所へ置き、その上へ上がり、繩を持つて、思ひ入れあつて

跡で人さんが笑はうとまゝ、先立たしやんした新兵衛さんの、お跡を慕うて、南無阿彌陀佛。

ト飛ばんとするを、淨雲窺ひぬて、あわてゝ抱きとめ

淨雲　アヽ、コレ〳〵、早まるまいぞ〳〵。

小女　イエ〳〵、放して下さんせ〳〵。

淨雲　ハテ、死なうとは惡い料簡ぢや。マア〳〵、待たつしやれ〳〵。

ト抱きおろして、介抱して

女中の死なうといふは、親子喧嘩か、色事か。大概知れた筋合ひ。必ず不料簡な事さつしやりますな。わしも今、東福寺から爰の内へ、店經に來た所化でござる。いはゞ檀家の女中、見殺しにはしませぬ。マア〳〵、待たつしやれ〳〵。

トとめる。小女郎思ひ入れ。

マア、どういふ譯で、死なうとさつしやる。

小女　御出家樣の御深切なお詞、その譯と申しまするは、わたしや三國屋の小女郎と申す、藝者でございますが、云ひ交した男がござりまして、若氣の至り、心中に身を投げましたが、どういふ事やらそのお方は川へ沈み、わたしはその時兄さんが、下ろした網にかゝつたゆゑ、直に引あげ介抱して、鳥災にはなりましたが、つれないは兄さん、わたしに外の男を持たすとの事。もしさういふ事になつては、死なれた男へ立ちませぬゆゑ、それでわたしや、首かゝりして、死なうと思ひますわいなア。

淨雲　成る程、さう聞いては、云ひ交した男を殺し、不心中ゆゑ死なうといふ、これも尤も。それを又お前の兄御が、其やうに云うても聞きわけぬのか。

小女　固意地な生れ、外の男を持たすと云うて、聞きわけて下さんせぬわいなア。

浄雲　ハテサテ、それは困つた事ぢやな。併しお前は、云ひ交した男は死なれるし、外へやらうと云はれるも尤も。現在云ひ交した男が生きてゐられたら、よもや其やうな無體な事も

小女　アイ、わたしも左樣存じまする。死なれた人は外にして、現在この世に約束した、男があると云うたなら、尤もな事ぢやと思うて、聞きわけてもくれませうわいなァ。

浄雲　イカサマ、そこらぢや、それはよい〳〵。死んだ人でなうて、息災である男に、云ひ譯がないと云ふのが近道。それに極めるがようござるぞや。

小女　サア、よい事はようござりませうが、してその男は、どこの何者ぢやと聞かれたら、そのお方が無うては

ト思ひ入れ。

浄雲　成る程、お前と云ひ交したといふ、男が無うてはそれも出來まい。ハテ、困つたものぢやの。

ト手を組む。小女郎こなしあつて

小女　最前から深切に、思うて下されまするあなた。申し兼ねた事ながら、云ひ交した男はわしぢやと どうぞお前樣、少つとの間、わたしが色になつて下さんせいなァ。

浄雲　ヤア、この坊主に、こなさんの色になつてくれとか。これは御免々々。どうしてマア出家の身で

左樣な事が……俗に落ちたら兎も角も、この姿では……イヤ〳〵、其やうな事は、決して罷りなりませぬぞ。

小女　さう仰しやるも御尤も。切ないまゝに無理なお願ひ。モシ、折角おとめなされて下さんした事ながら、とてもわたしや、死なねば叶ひますまい。お前樣も、爰をお歸りなされて下さりませ。

ト ほろりとする。

浄雲　そりやハヤ、歸るまいものでもないが、わしが歸れば、歸つた跡でお前は

小女　ハイ、只今のやうに、死なねばどうも

ト思ひ入れ。

浄雲　さう思はるゝを見捨てゝ歸れば、跡で死ぬであらうし、助けんと思ふには、色ぢやといふ相手が無くてはならず。アヽコレ、惡い所へ來かゝつて、女中一人を助けようと、殺さうと、こりや愚僧が心一つになつて來たわえ。

ト手を組んで思ひ入れ。

小女　とても死なねば、女子の道も立たぬばかりか、嫌な男に添はねば、現在兄さんの心に違ふ手詰めの今宵。こりやモウわたしや

ト思ひ入れ。淨雲、顔を上げて

淨雲　色になりませう。

小女　エヽ。

淨雲　お前の難儀を見捨てもならず、佛に誓ひし出家の身で、派手な藝者のお前の色ぢやと、墮落せぬ身で破戒の僧。人の命を助ける儞り。いかにも色ぢやと云つて進ぜう。

小女　エヽ、嬉しうござんす。それではわしが云ひ交した、男へ心中屈くの道理。そんなら必ずでござんすぞえ。

ト思ひ入れあつて、手を合せて拜む。この時奥にて

藤兵　サア〳〵、萬七さん、表の方が風が參りやす。

トこの聲を聞き

小女　ありや兄さんぢやわいなア。

淨雲　オツト、承知ぢや〳〵。

ト盆棚へ向ひ、店經にかゝる。小女郎そこらを方附けゐる。藤兵衛、萬七、吉六、醉うたる體にて出て來り、小女郎を見て

藤兵　コレ、妹、今日は日もよいから、わざと萬七さんと、杯をして置くがよい。親方も承知だから、さうしやれ〳〵。

ト銚子、杯を持つてくる。小女郎、思ひ入れあつて

小女　モシ、兄さん、先刻に云うたぢやないかいな。わたしには、云ひ交した男があるゆゑ、そのお方への心中に、外の男はどなたにも、樣子があつて持たれませぬと、あれ程お前に

藤兵　コレ妹、いゝ加減に馬鹿を云へ。われが云ひ交したといふ男は、身を投けて死んだでないか。それとも外に男があるか。

萬七　さうだ〳〵。併し生きてゐる色があるなら、此方もまた相談ものだが、よもや死んだ男の外に、てまへに色が

小女　アイ、外にござんすによつて、そのお方に、どうも義理が悪いわいな。

藤兵　ナニ、死んだ奴の外に、云ひ交した男があるか。

小女　ハイ、しかもそのお方は、ソレ、ツイそこに、聞いてゐる他の男とは

三人　聞いてゐる他の男とは

小女　アレ、アノ、ぬしぢやわいなア。

ト淨雲の方へ指さして見せる、皆々恟りして

藤兵　イヤア、妹の云ひ交した色男は、あの店經の

萬七　坊主の色か……イヤア。

小女　それぢやによつて、わたしやどうも外のお方の

藤兵　世話にはならぬと強情云ふのか。いゝワ、どうするものだ。

ト淨雲へ立ちかゝつて

モシ、坊さん、ちよつと此方へござりませ。

淨雲　店經に參つた、愚僧に御用かな。

藤兵　左樣サ。

ト淨雲、念佛を申しかけ、此方へ來る。

モシ、お前は東福寺からござりましたか。

ト合ひ方。

淨雲　左樣でござる。今晩店經に參りました。お前がお内の

藤兵　アイ、茨の藤兵衛とはわしでござるが、今聞けばお前、わしが妹と云ひ交してござると、あの女

の口から聞きましたが、坊主の身で、いよ〳〵さうか。

淨雲　こりやハヤ、お初に、お目にかゝつた藤兵衛樣。成る程、其許へは沙汰いたさぬが、妹御のあの

小女郎とは、愚僧、よんどころなう、色でござる。色でござるぞ〳〵。

藤兵　そりやア、どこでこなた、色になつた。

淨雲　サ、その色になつたのは、アノ、どこでか色に

小女　アヽ、モシ〳〵、そりやお前、深川でぢやわいな。

ト呑み込ませる。

淨雲　成る程〳〵、深川々々。

藤兵　して、深川はどこで

淨雲　深川は、慥か海福寺々々々。

小女　アヽモシ、違うた。ソレ、色になつたは、アノ、洲崎の汐干の時分、武藏屋で

淨雲　アヽ、武藏屋は向島ではござらぬか。洲崎にも……ほんに、ござつた〳〵。汐干によつて三月の

事ぢや。ついした事で、この女中と色になつた愚僧。後々は還俗して、女房にも持ちませうと、

物事かたう約束した、いかにもわしは色でござるぞ。

小女　あれ聞きなさんせ。あれ程までに云ひ交したお方があれば、外の男は、わたしやどうでも持ちませぬ。兄さん、さう思うて下さんせ。

萬七　コレ〳〵、兄貴、今まで聞かぬ坊主の色客。こいつはてつきり

藤兵　ハテ、色なら色にして置いて、モシ、わしに任せて置かつしやりませ……コレ、坊さん、お前、妹が色なれば、爰にござるは深川の親方、ぬしの所へ年拔きの金がいるが、今夜その金が出來ますかえ。

淨雲　エヽ、アノ色ぢやと云へば、金がいりますかえ。

小女　アヽモシ、その金の事は、どうしてお前に

藤兵　コレ妹、色だといふ人の所から金が出ないで、どこから出るものだ。但し金が出ないのは、この坊さんは色ではないか。

小女　イエ〳〵、あなたが眞實の

淨雲　色でござるぞ。

藤兵　色なら女の身拔きをする、金を出さつし。

淨雲　そりやいかほど

藤兵　たんとでもない、五十兩。

淨雲　エヽ。

ト惘りする。

藤兵　藝者を色に持つ程な、御所化樣でも妹の、身の代は五十兩。店經のお布施を搔き集めても、五十か百のひねり錢。それとも盆のお供物に、耳を揃へて五十兩、色なら出すか。

淨雲　サア、そのお金は

藤兵　出さずば色と云つたは嘘か。

淨雲　イヽヤ眞實

藤兵　そんなら金は

小女　どうしてあなたへ

藤兵　拵へるか。

小女　サアそれは

藤兵　サア

小女　サア

二人　サア〳〵〳〵

藤兵　よもや坊主の色ではあるまい。

トきつと云ふ。小女郎苦しき思ひ入れ。此うち淨雲、懐中の金を出しかけ、いろ〳〵あつて、この時思ひ切つて

淨雲　女中の身の代五十兩。

ト藤兵衛へ打ちつける。恡りして取上げ見て

藤兵　ヤア、こりや五十兩。どうして所化のこなさんが

小女　エヽ、アノ、お前の

淨雲　その金出さねば女中の身が、生死にかゝはる氣の毒さ。一寺を預かる禪僧の、檀方衆の志し、それを無足に藝者の身の代。兄御寮、それ出すからは、いよ〳〵愚僧は色でござるぞ。

トきつと云ふ。皆々思ひ入れ。この時路地より、玉觀、雲慶、歸り來り、淨雲を誘ふ心にて、門口より覗き、この體を見て囁き合ひ、立ち聞きゐる。

藤兵　よもやと思つた五十兩、金さへ取れば誰れでもいゝ、成る程こなたは色であらう。

小女　無理に賴んだその上に、思ひもよらぬ五十兩、あなたにそれを出させては

ト寄るを押へて

淨雲　ハテ、金を出さねば色ぢやと云はれぬ。それぢやによつて出した金。いよ〳〵こなたは愚僧が色ぢや。心得てゐさつしやれ。

萬七　そんなら所化は小女郎が色か。いかにひねつた藝者でも、坊主を色とは、色氣がねえな。

トこの時醉うたる吉六、ふら〳〵しながら起上がり

吉六　イヤア、その色容が出した金なら、小女郎が身拔きの五十兩。約束だ、サア、兄貴、おれが取るぞ、おれが取るぞ。

トひよろ〳〵する。藤兵衛、財布のまゝ渡して

藤兵　エヽ、醉つてゐながら慾張るの。約束なれば是非がない。惜しいものだが五十兩、お前に渡せば妹は兄の代物、證文を寄越しなさい。

吉六　勿論〳〵。やります〳〵。サ、これが小女郎の年期證文サ。

ト紙入れより出して渡さうとするを、小女郎中より取つて

小女　イヽエ、わたしの證文は、あなたへお渡し申さねば、どうも義理が

藤兵　誰れにやるのだ

小女　御出家様へこの證文、お預け申して身抜きの金、わたしがきつと拵へて、お返し申すそれまでは
せめてこれなとお渡し申して
ト淨雲へ渡す。淨雲取つて
淨雲　藝者子供の年期證文、出家が取つても不用な品、お返し申す筈なれど、返したなればこなたの身
の上、どのやうな
ト藤兵衛へ思ひ入れあつて
然らばこれは預かりませう。
ト懐中する。吉六、横に寢る思ひ入れ。この時門口より玉觀、雲慶入り
二人　樣子はみんな聞いたぞ。
淨雲　ヤア、そんなら譯を
雲慶　友吟味するお寺の習ひ。誠に日頃は物堅く、おいらを苛める淨雲が
玉觀　藝者を女房に持つといふ、一部仔什を皆聞いた。この通り方丈樣へ
淨雲　アヽコレ、これには段々譯合ひの
二人　出家が女房を持つといふに、なに譯合ひがあるものだ。

萬七　さうだ〳〵。墮落破戒のその坊主、こなた衆はこの譯を、よく和尚に告げさつしやい。告げるに
しても證據のため、衣も袈裟も剝がつしやい。わしも側から手傳つて
二人　お賴み申します。
淨雲　アヽコレ、樣子のある事、聞いた上にて
萬七　何も樣子は知らねえ。藝者と色の捨て坊主。キリ〳〵衣を
二人　いつそ斯うして
ト淨雲に立ちかゝり、袈裟、衣を引つたくる。萬七これを手傳ひ、淨雲、白帷子一つになり、縋つて
淨雲　アヽ、コレ〳〵、これには段々樣子のある事。何事も、穩便に〳〵
玉觀　イヤ〳〵〳〵、穩便にはならぬ。日頃からわしらが事、小言を云うたその返報。
雲慶　見た通り寺中へ觸れる。覺えてござれ。
ト二人は袈裟、衣を持ち、捨ぜりふにて向うへ走り入る。
淨雲　アヽ、コレノ〳〵、これには段々譯のある事。お住持樣へは、必ずともに穩便に
ト向うを見て
アヽ、もう行たか。これが寺中へ沙汰あつては、覺えなき身に不慮の災難。その云ひ譯も云はれ

ぬ仕儀。

ト小女郎へ思ひ入れ。

小女　初めて逢うて打ちつけに、お頼み申したわたしが科人。モシ、どうぞ仕様は

ト當惑の思ひ入れ。

淨雲　仕様もやうも今更に、あらはに云はゞ女中の難儀。預かり置いたあの金を、出して救うたばつかりに、却つて愚僧が身の難儀。これといふのもあるまじき、色と云うたるその罪が、忽ち報ふも出家ゆゑ……もう斯うなつては

ト思ひ入れあつて小女郎の手を取り

サ、愚僧と一緒に

小女　お前はわたしを

淨雲　身は雲水の定めなき、その行く先までこなたを連れて

藤兵　イヽヤ、妹はやられない。

淨雲　でも五十兩愚僧が手から。證文までも受取つて

藤兵　あの五十兩はコレ爰に、醉ひ倒れたる親方に、渡して年季の證文は、こなたが取らうが現在の、

兄が前からこの女、貰つたといふ證據があるか。

淨雲　サ、さういふ分けはなけれども

藤兵　そんなら誰れに妹を貰つた。

淨雲　ヤ。

藤兵　初手から兄の氣に入らぬ、納所坊主がたつた今、寺をこくつてこの末は、はつち坊主は見るやうだ。そんな詰まらぬ客人に、なんで妹をやるものか。それとも女が支度金、耳を揃へて五十兩、持つて來たなら相談もの。マア、それまでは妹は、貧乏ゆるぎもさせないワ。

淨雲　すりや、身の代のあゝの外に

藤兵　兄を貰ぎの金がいるわえ。

萬七　この萬七は承知して、兄貴の前へ五十兩、拵へて來たなれば、その時妹は矢ッ張りおれに

藤兵　約束通り進ぜます。

萬七　それで安堵だ。

藤兵　これから妹が支度金。

萬七　拵へかゝる工面に行かうか。

小女　ア、モシ、その金持つてござんしても、わたしは行かぬ、萬七さん、さう思うて下さんせ。

萬七　そんならどうでも。

藤兵　ハテ、何と云はうと、わしが承知だ。モシ、必ず氣遣ひ

ト呑み込ませるとて、寢てゐる吉六をしたゝか踏む。吉六、目を覺まし

吉六　アイタ、、、、、誰れが踏んだか。これは眞平。ハ、、、、、。

ト他愛なき事を云ふ。吉六が懷中より、財布出かゝつてあるを見附け

藤兵　コレ、親方、萬七さんもお歸りだ。一緒に行きなさい。

ト介抱しながら、外へ見えぬやうに、そつと財布を取つて袂へ入れる。吉六これを知らず

吉六　ナニ一生懸命だ。そりやア誰れが……こいつはとんだ話だなア。

萬七　歸るなら、一緒に行かうといふ事だ。

吉六　ナニ歸るなら一升飲ますと……エ、、素的だの。

ト よろ〳〵するを、萬七手を引つ張り、外へ出て

萬七　コレ、兄貴、必ず小女郎は

藤兵　ハテ、胸にありやす。

吉六　ナニ胸にある。そいつは何が

萬七　エ、、おべねえ連れだ。

ト四つ竹の合ひ方になり、萬七、醉つてゐる吉六を、引つ張り〳〵、捨ぜりふにて向うへ入る。

藤兵　カウ、坊さん、店經濟んだら用はねえ。

淨雲　イヽヤ、愚僧は金まで出して

藤兵　誰れが頼んだ。イケ馬鹿々々しい。

ト無理に淨雲を門口へ突き出す。

淨雲　すりや、これ程の日にあうたも、餘所に見なして、アノ其方は

小女　イエ〳〵、見捨てはせぬ。御恩のお前は

ト淨雲の側へ行かうとするを、藤兵衛引退け

藤兵　エヽ、打ちやつて置け。今時の坊主に油斷がなるものか。

淨雲　イヽヤ油斷のならぬは兄弟。こりや云ひ合せて愚僧が所持の、あの金を出させるための、拵へ事であらうがな。

藤兵　拵へ事とは何の事だ。おれが頼んだ事ぢやアねえぞよ。

淨雲 成る程、こなたは頼まぬ。頼んだはあの女中。よもや忘れはしまいな。

小女 なんのそれを忘れませう。お痛はしいそのお姿。あなたのお身の納まる仕様も

淨雲 エヽ、よい口な事ばかり。今となつて其やうな事、云うたとて屆く事か。金を戻して

ト内へ入るを藤兵衛とめ

藤兵 エヽ、何を云はつしやる、御出家。囘向が濟んだら用ないこなた。キリ〳〵爰を

ト淨雲の手を取つて、無理に門口へ突き出す。淨雲、ヨロ〳〵と轉げる。藤兵衛、門口をピツシヤリたてゝ

歸らつしやりませ。

トかき金をさす。淨雲起上がり、「ムウ」とこなしあつて

淨雲 遊里の女子はあゝしたものと、知れてはあれど色情に、迷はぬながら女の口に、たくしこまれたこの身の誤まり。こりや兄弟して、手管とやらにかけたのぢやな。

トきつと思ひ入れあつて氣を替へ

アヽ、まゝよ。

トすご〳〵と花道へ、思案しい〳〵行き、こなしあつて

とはいへ、脫衣されたら侍ひの胤。出村は武士だ。

ト本舞臺へキツと思ひ入れ。この時藤兵衛、門口をソツと明け、淨雲と顏見合せ、藤兵衛、門口をピツシヤリたてる。淨雲氣を替へて

思案しにやならぬわえ。

ト唄になり、手を組み、思案しい〳〵向うへ入る。跡に小女郎、浮かぬ顏にて俯向きゐる。

藤兵 コレ、妹、何もそんなにふさぐ事はない。女は氏なうて玉の輿だわな。ナニあの納所坊主に……それともてめえ、行きたくば、やりもしようが

ト此せりふの內、懷の金財布を、小女郎へ見つからぬやうに、あちこちして、足許に落ちてある稻荷森のお札を、足でソツと取つて、財布の形を見せじと、件の札紙に包み

コレ、二つどりなら坊主はよしやれ。ハテ、罪になるわな。それより萬七どのゝ方が、餘ッほど氣が利いてゐる。

ト此うち路地の裏、鍛冶屋の槌の音。竹笛の稽古の音聞える。藤兵衛、聞きつけて

アヽ、あのチャン〳〵は、また長屋に佛が出來たか……イヤ〳〵、鍛冶屋が夜なべだな。イヤ、べら坊に精を出す野郎だなア……アヽ、あの笛は、若い奴等が稽古か。やかましい。日が暮れる

と吹きやアがる。彼奴等もしまひは按摩だわえ。

ト此せりふの内、件の札紙を脇へ足にて隠す。小女郎心附かず

小女　モシ、兄さん、お前、流し元に、何してゐなさんす。

藤兵　サア、おれが爰にまごついてゐるのは、アノ、なによ。オヽ、それ〳〵、盆といふものは水のいるものだから、水が無くば汲んで置かうと思つて、それでアノ、水瓶を

ト蓋を取つて、中を見て、素知らぬ體

小女　瓶に水がござんすなら、水向けを汲みかへて置かうわいな。

ト大鉢を取つて行かうとする

藤兵　アヽ、コレ〳〵、水を汲みかへるなら、おれがしよう。爰へ寄越しや。

ト水瓶の側にまごついてゐるゆゑ、小女郎、大鉢を持ちゆき渡す。藤兵衛、捨ぜりふにて水を入れかへ渡す。此うち矢張り鍛冶屋の槌の音、稽古の笛聞える。向うよりおかん、紺の手拭にて頬かむりをして、弔ひの太鼓と撥を持ち、新兵衛が着てゐたりし紺の單衣を着て、後より新兵衛、おかんの經帷子を着、胡麻鹽をあて、大風呂敷をかむり、忍び〳〵出て來り、門口におかん、内を指さし、兩人囁き合ひ、新兵衛路地へ入る。おかん。内を窺ひゐる。

小女　兄さん、お前、お迎ひ火は焚きなさんしたかえ。

藤兵　馬鹿を云へ。この暑いのに、どうして焚かれるものだ。

小女　エヽ、お前も勿體ない。盆ちやといふに、お迎ひ火も焚かぬといふは

藤兵　併し蚊いぶし代りに焚くもいゝが。そこらに苧殻があらう。

ト尋ねる。この時奥にて、ドンと物音する。兩人悔りして

なんだ、あの音は。また盗人猫がなまり節へかゝつたな。うぬ、イケ畜生め。叩き殺してやらうシッ〳〵。

ト合ひ方、捨ぜりふにて、奥へ駈けて入る。小女郎思ひ入れあつて

小女　常から心よからぬ兄さん。只氣の毒なは御出家様。わたしが頼んだばつかりに、思ひがけなう、持つてござんす五十兩、その上にお寺へ知れての御難儀、元の起りは皆わたし。云ひ譯したうても、よもやお寺へあの儘では

ト盆棚を見て、こなしあつて

新兵衛さん、さぞ迷うてゞござんせう。と云うてわたしもお前に別れ、なんで生きて居られませう。折を見合せ又ぞろや、身を投げてなとお跡から

ト思ひ入れあつて

お迎ひ火を焚くほどに、どうぞわたしが内のお棚へ來て、ならう事なら逢ひたうござんす。必ず浮かんで下さんせえ。

ト跳への合ひ方、風の音、件の竹笛、槌の音する。小女郎、孝殼紅殼など取あつめ、門口へ出かける。

おかん、ちやつと隠れる。小女郎、外へ出て、迎ひ火の拵へする。この時おかん、そつと内へ入り、太鼓を持つて精靈棚の下へ入る。小女郎、門口にて迎ひ火を焚きつける。矢張り鳴り物聞える。風の音。中窓をソツと明け、新兵衛、内へ忍び入り、あたりを見廻し、盆棚へ上り物の菓子を食ひ、茶湯の茶を飲みゐる。小女郎、これを知らず

お迎ひ火を焚いてあげたほどに、どうぞ此方の内へ來て下さんせ。まだ戒名は知れぬゆゑ、俗名玉屋新兵衛様、頓生菩提、南無阿彌陀佛々々々々々々々。

ト よろしくあつて水向けをしまひ、火をしめし、鉢を持つて盆棚へ置かうとして、思ひ入れあつて

どうやらお棚に

新兵 アイヤ、小女郎。エヽ、恨めしい。

ト思ひ入れ。棚の下にておかん、ドロ〳〵を打つ。小女郎悔りして

小女 ヤア、さう云はんすは新兵衛さん、逢ひたかつた〳〵。ようマア來て下さんしたなア。

新兵 ナニ、よう來てくれたたとは、エヽうぬ。こゝな嘘吐き藝者め。エヽ、恨めしい。

ト おかん、ドロ〳〵を打つ。程よく竹笛の合ひ方、槌の音は一つ鉦に聞える。新兵衛のせりふ、切れ目〳〵にドロ〳〵。

小女 サア、尤もでござんす〳〵。どうでわたしもお前の跡から、モシ、浮かんで下さんせ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

新兵 イヽヤ浮かまぬ、嘘吐き藝者め。おればかりに身を投げさせ、うぬはそのまゝ這ひ上がり、あの萬七が女房にならうとは、思へば〳〵恨めしい。よくおれ一人殺したなア。

ト 又おかん、ドロ〳〵を打つ。

小女 イヽエイナ、なんのわたしがお前一人を先立てゝ、わたしばかりが助からうといふ、其やうな不眞實な、わたしではござんせぬ。どういふ事にか、思はず兄さんの下ろしたる、四ツ手の網にかかつたばかりに、助かつたわたし。それゆゑ今日も今日とてナ、お前のためにお寺へ布施物、四十九日も弔うてナ、折を見合せわたし一人、死んでお前に逢ふ氣ぢやわいなア。

新兵 イヤ、その手はくはぬ。嘘吐きめ。今更さうは拔けさせぬ。あの萬七を、しかも今夜日がよいと

て、祝言の杯もしたとの事。その上、彼奴がために江戸藝者に出て稼がうとは、思へば〳〵腹の立つ。嘘吐き藝者め。

ト盆棚の下にてドロ〳〵。

小女　これいなァ。なぜ其やうに疑つて下さんす。先刻にも情ない、御出家様をお頼み申し、五十兩といふ金までも出させましたも、兄さんが萬七さんへ添はすといふ、それを斷わり云はうため。おいとしや御出家様、わたしゆゑにお寺に聞え、思はぬ御難儀。それといふのも、お前へ立つる、わたしの心中

新兵　それをおれが知るものか。エ、、おのれ、恨めしいわい〳〵。

ドロ〳〵〳〵。

小女　コレ、知らぬとはお情ない。わたしやお前へ心中に、これ、見さんせ。

ト左の手を捲り

新兵衛一心命、とは、野暮な昔の刺青ながら、わたしが手には此やうに、産みつけたるこの痣の形は、丁度「心」といふ字。外の文字は彫つたれど、心の文字は産れの痣。これ程までに思ふわたしが胸の中、この世を去りし業通にて、それがお前に知れぬかいなァ。

新兵　ナニ知るものか。兎角無暗に恨めしい。おれと一緒に冥土へ來れ。

ドロ〳〵〳〵。この時茂右衛門、路地の内より錠を振つて

茂右　締まります〳〵。

ト云ひながら出て、門口へ來り、内を覗き、恟りして、慄へ〳〵、見てゐる。

小女　そりやモウお前が、わたしを、一緒に連れて行て下さんすなら、行かいでかいなァ、サア、參ります〳〵。どうぞ連れて行て下さんせ〳〵。

新兵　ナニ冥土へ連れて行けと。うぬ、それは嘘だワ〳〵。嘘吐きめ。

小女　なんの嘘を吐くものかいなァ。これほど誠を明かすわたし。それを嘘ぢやと云はしやんすは、こりやお前は、合點のゆかぬ幽靈さんぢやわいなァ。

新兵　ナニ合點のゆかぬ幽靈だ。うぬ、おれを疑ふな。疑はれては佛が立たぬ。サア、冥土へ來れ〳〵

ト盆棚より下りて來り、小女郎が手を取つて引ッ立てる。

小女　行かいでかいなァ〳〵。サア、連れて行て下さんせ。お前と二人暮らすなら、無間の底へも行きたうござんす。

ト縋りつく。新兵衛思ひ入れあつて

新兵　そんならてめえ、おれが行く所なら、無間地獄の底までも
小女　行かいでかいな、新兵衛さん、氷の地獄、火の車。
新兵　呵責の責めもいとひなう
小女　お前ゆゑなら何のいとはう。新兵衛さん
新兵　小女郎
小女　いつそ殺して下さんせいなァ。
　ト抱く。おかん見て、太鼓を投げ出し
かんエ、、勝手にしなさんせ。
　トこなし。門口の茂右衛門も、こなしあつて
茂右　夢になれ〳〵。
　ト門口を明けて内へ轉げかゝる。兩人悔り。この聲に藤兵衛、何心なく出て、この體を見て
藤兵　イヤァ、幽靈だ〳〵。
　ト騒ぐ。この聲を聞き、路地より鐵五郎、藤六、長吉。役場提灯、長高、六尺棒なぞを持ち出て來り
二人　なんだ、幽靈だ〳〵。

　ト茂右衛門も起きて騒ぐゆゑ、新兵衛、おかん驚いて駈け廻る。おかんは以前の盆棚の下へ駈けこむ
　新兵衛は水瓶の所へ隱れる。皆々思ひ入れ。小女郎を介抱して
藤兵　ヤイ、妹やァい〳〵。氣を慥かに持て〳〵。
小女　イ、エイナァ、わたしや氣は慥かでござんすが……新兵衛さんも別條なうて、わたしが所へ恨み
　を云ひに
藤兵　ナニ、新兵衛の幽靈が。その幽靈は、どこへ行つた〳〵。
小女　どこへ行つたやら。大方消えたであらうわいなァ。
茂右　併し、また幽靈の搖り返しがあらうも知れぬ。この子は爰へは置かれまい。
長吉　さうだ〳〵。この子は奥へ連れて行くがよい。怪我でもあつては惡い。此方へ來なさい。
小女　ハテ、大事ないわいなァ。モシ、幽靈さん、消えなさんしたかいなァ。
長吉　イ、エサ、危ないよ。來なさいよ〳〵。
　ト無理に引ッ張つて奥へ連れて入る。
藤兵　モシ〳〵、大屋さん、今出た幽靈は、白いばかりぢやァござりませぬ。黑い幽靈もゐやした。
茂右　サ、、わしもさう見ました。黑白二人の幽靈だ。待ちなさい〳〵。慥か水瓶の後に、白いものが

見えるワ。

皆々　其奴が幽靈だ。突き出せ〳〵。

ト流し元へ駈けより、捨ぜりふにて棒にて突く。新兵衛堪り兼れて駈け出る。この時、藤兵衛が隱せしお札と財布、足に搦み、何心なく逃げるを、皆々追ひ廻す。新兵衛向うへ逃げて入る。

藤兵　南無三、白いのは逃がしたが、まだ黑いのが一疋るたぞ。

茂右　アレ〳〵、精靈棚の下に、眼ばかり光るは幽靈であらう。

四人　突き出せ〳〵。

ト長高や棒にそ下を突く。中にておかん呻る。

そりや幽靈が、呻るぞ〳〵。追ひ出せ〳〵。

ト又突く。おかん堪へ兼れ、逃げ出す。皆々追ひ廻し、ぶち倒し、藤兵衛押へて

藤兵　サア〳〵、騒ぐまい〳〵。黑い幽靈は、生捕つたぞ〳〵。

三人　お手柄〳〵。面を見ろ〳〵。

トおかんを引立て、弓張や行燈にてよく見て

藤兵　イヤア、丸い頭の幽靈は

三人　今日蘇生した合ひ長屋

かん　おかんぢやわいなア。

四人　大べら坊め。

かん　オヽ、恥かし。

ト顏を隱す。時の鐘の送りにて、道具廻る。

本舞臺、向う黑幕、松杉の大樹重なり、牛の御前の宮の後を見たる體。よき所に神木の杉、注連を張り、所々に石燈籠、物凄き道具。時の鐘、誂らへの合ひ方、砧の音にて、道具とまる。

ト向うよりお霜、白無垢の振り袖、しごき、おぼこ娘の拵へにて、灯をともせし鼎を頭へさゝげ、高足駄、釘と金槌を持ち、跡先へこなしありて出て來り、直に舞臺へ來て

しも　嬉しや〳〵。今宵が七日の滿願ゆゑ、往來の人に逢ふまいと、爰までも來るうち、往來も途絶えいつもの通り、あの神木へ

ト杉の下へ來り、思ひ入れあつて

云ひ號けの新兵衛さんは、小女郎さんといふ藝者さんに、わたしや見替へられ、とても添はれぬ

事なれば、我が身の命を七日のうちに、お取りなされて下さりませ。添はうと思ふ新兵衛さんのお顔も知らぬ果敢ない生れ性でござりまする。どうぞこの身を立ち所に命をお取りなされて、新兵衛さんと小女郎さんと、添はせてあげて下さりませ。大願成就、なさしめ給へ〳〵。

ト一心に伏し拜みゐる。向う、バタ〳〵にて新兵衛、件の財布を、足に引つかけ出て來り、花道にて

新兵　ヤレ〳〵、嬉しや〳〵、あの兄めが追ひ駈けて來る樣子であつたが、餘程後になつたやうぢや……オヽ、爰は牛の御前の社内さうな。ちつとマア爰らで、息をしてから逃げませう。したが、あの樣子では、小女郎が胸も、大概知れたやうぢやが

ト舞臺へ來り、お霜を不思議さうに窺ひ見て

ヤ、幽靈ぢやな。

しも　お前がかいな。

ト二人とも互ひに瞻をつぶし、「ヲッ」と云うて左右へ倒れるはずみ、お霜が頭の灯消えて、穿いたる足駄の齒ぬける。新兵衛も悔りして

新兵　女の幽靈樣、浮かんで下さりませ。南無阿彌陀佛々々々々〳〵々々々。

しも　モシ〳〵、男の幽靈樣、わたしや幽靈ぢやござりませぬほどに、どうぞお前樣、消えて下さりませ。南無阿彌陀佛々々々々〳〵々々々。

新兵　なんぢや、幽靈ではない。さうでもあらうか。なんぼ盆ぢやというて、其やうに幽靈も來まいがして、白い女中は何ぢや。

しも　アイ、わたしや迷ひの者ではござりませぬ。呪ひ者でござりまする。

新兵　ナニ呪ひ者ぢや……成る程、寺と違うて、牛の御前のお宮の前。ア、、そんならこなたは、丑の時參りぢやの。

しも　アイ、左樣でござりまする。只今わたしや、お前のお姿を見て、ハッと思うて爪づいてナ、足駄がぬけまして、ッイ爰へ

新兵　轉けさしつたか。

しも　ハイ。

新兵　ハテ、それは危ない事、怪我はござらぬか。

しも　有り難うござりまする。お庇で怪我は致しませぬが、お前樣、マア、なんで其やうな白い形で

新兵　ハイ、わしがこの白い形は、ちつと譯のある女に、恨みを云はうと思つて、そこで幽靈の眞似をして嚇したのサ。

しも　エヽ、そりやマアなんで其やうな、眞似をなされまする。
新兵　アノ、それといふも、その女とわしと心中して、身を投げたからの事サ。
しも　エヽ、心中に身を投げさんしたのかえ。
新兵　左樣サ……して、今聞けばお前、穿き物の齒が拔けたではないかえ。出しなさんせ。直して上げよう。
しも　これはしたり、お慮外でござりまする。
新兵　ハテ、大事ない、出しなさいノ〳〵。
しも　左樣なら、お慮外ながら
　ト足駄を差出す。新兵衛取つて
新兵　モシ、そこに釘があるかえ。
しも　アイ、爰にござりまする。
新兵　序にその金鎚を貸しなさい。
しも　アイノ〳〵。
　ト差出す。新兵衛、足駄の齒を入れ、釘を打ち、思ひ入れあつて

新兵　イヤ、又お互ひに此やうな形で、逢ふといふも不思議な緣ぢやが、お前、誰れを呪ふために、時參りをさつしやるのぢや。
しも　アイ、わたしや誰れを呪ふのでもござりませぬ。お話し申せば恥かしながら、わたしには云ひ號けの殿御がござりまするが、今以て、云ひ約束を致したばかり、夫に持ちまする男の顏さへ知らぬわたし。誠にそのお方は、外に增す花あるゆゑに、云ひ號けのわたしが事は、思うても下さんせぬ。その嫌はれたわたしゆゑ、いつそこの身をこの身で呪うて、死ぬるものなら一日も早く、私しも死にたい願ひ。その云ひ號けのお方へ、好いた女中を添はさうと、それが私しの願ひでございまする。
新兵　ハテサテ、お前は眞實なお方ぢやわいの。嫌はれてゐる夫の事、見替へられたる女の事を、恨めしいといふ心もなく、我れと我が身を呪ふがための時參り。わしも云ひ號けの娘がござれど、丁度お前と同じ事、女房にする女の顏、今日の今まで逢はぬゆゑ、逢うたというて知らぬ同士。
しも　わたしも知らぬ男の顏。見かへられたる女子の顏も
新兵　御存じないか。
しも　アイ。

新兵　ハテ、似た事もあるものぢや。

ト足駄の歯を直して

サア、穿き物が出來ました。穿いて御覽じろ。

しも　これはマア、有り難うござりまする。不躾ながら知らぬお方に

新兵　知らぬ者と思うてなら、なんぞお禮が

しも　お禮と申してお互ひに

新兵　そのお禮には、ちよつと爰で

トしなだれる。

しも　ア、モシ、惡い事を

新兵　イヤ、よい事ぢや。

ト又しなだれるをお霜、新兵衞を突きこかす。よろ〳〵として轉ける。此うち、足に搦みし財布を見附け、探り見て

走つて來たゆゑ取のぼせ、心づかずに今まで居たが、足に搦むは、どうやら財布。上は何やら、守りのやうな

ト探り見ながら、お霜の裾を捕へゐる。

しも　ア、モシ、爰を放して

ト振り切らうとする。新兵衞、無理口說きの立廻りよろしく、此うちバタ〳〵になり、向うより藤兵衞、鉢卷をして、棒を持ち、新兵衞の跡を追ひかける心にて走り出て來り、新兵衞に突きあたる。

藤兵　アイタ、、、、、。

ト互ひに驚き、藤兵衞、二人を見て

ヤ、幽靈だな。

しも　エ、。

ト悔りして新兵衞に縋りつく。チヨント木の頭。

新兵　夢ぢやァねえか。

トにつたりとこなしあつて、お霜を引寄せる。藤兵衞、身ごしらへして、兩人を透し見る見得。双方よろしく、ひやうし

幕

二幕目

洲崎武藏屋の場
中木場の場

役名――倉橋官藏。若狭屋萬七。玉屋庄兵衛　梅田村のお倉。女中、お園。同、お松。奥女中、竹川。小女郎兄、茨の藤兵衛。玉屋番頭、左助。新兵衛云ひ號け、お霜。三國屋小女郎。玉屋新兵衛。

本舞臺、三間の間、正面床の間、遠ひ棚、左右腰障子、いつもの通り。爰に萬七、前幕の拵へ、お園、お松、茶屋女の拵へにて、酒肴を取散らし、酒盛りの體。すべて洲崎武藏屋の模樣。流行り唄にて幕明く。

皆々　リウコウサン、スムカ〳〵。

ト拳を打ち、萬七負ける。

萬七　これは閉口々々。

二人　サア、木場萬さん、一つお上がりなされまし。

萬七　イヤモウ、此やうにたぼ揃ひでは、一つ飲まずばなるまい。

そのほんにこの間も、仲町の衆がお出でなさると、お前とおかんさんの話しがござりましたぞえ。

まつ　あのやうに浮名が立つては、此まゝでは濟みますまいぞえ。

萬七　サア、おれもフツとした出來心で、飛んだものに引つかゝつたのサ。

二人　イヨ〳〵、色男さま〳〵。

萬七　これは面目ない。

二人　サア〳〵、一つお上がりなされませ。

ト流行り唄になり、向うよりお倉、田舍婆にて、風呂敷包みを背負ひ、菅笠を持ち出て來る。跡よりお霜、振り袖娘、これも菅笠を持ち出て來り

くら　コレ〳〵、娘、あれを見や。向うに見ゆるが江戸の海、なんとよい景色ぢやござらぬか。

しも　そんなら爰が、洲崎の辨天樣とやらでござんすか。

くら　今日こゝの武藏屋とやらへ、其方のテひ號けの新兵衛樣が、お出でなさるゝとの話し。それゆゑ今日は八幡樣や、三十三間堂を見物がてら、爰まで來ました。おッつけ主に逢はせるほどに、あれへ行て尋ねて見ませうわいの。

しも　そんならあれへ行て待つて居れば、云ひ號けの新兵衛さんに逢はれまするかえ。

くら　オヽ、今にこの母が逢はせまする。あまり其やうに、キナ〳〵思うて、暑い時分ぢやほどに、必ず煩らうてたもんなや。

しも　暑い時分と申しますれば、わたしや扇を忘れて參りました。

くら　ハテ、それは困つたもの。オヽ、幸ひ〳〵、いつぞや玉屋のお内へ行つた時、わしも其方のやうに扇を忘れたぢや。新兵衛様の仰しやるには、見苦しくともこれなと使へというて、下さつた扇、なんと見や、よい扇ぢやないか。これを其方に

ト杏葉菊の附いたる女扇を出す。お霜取り

しも　この扇の紋ぢらしは杏葉菊。すりや、新兵衛さんの替へ紋でござんすかえ。そんなら、この持ち主の、お方に早う

くら　いまにござつたなら、この母が早速に、逢はせますとも〳〵。サ、斯うおぢや。

ト お倉、お霜の手を取り、舞臺へ來る。

そのこれは〳〵あなた方、よう入らつしやいました。サア〳〵、あれへお上がりなされませ。

くら　ア、コレ〳〵、わしどもは客ではござらぬ。今日こゝの内へ、玉屋新兵衛様と、小女郎様とやらいふ藝者がござるとの事。どうぞお出でなら、ちよつと逢はせて下さりませ。

そのハイ、小女郎さんは只今、お客様のお座敷へお出でなされましたが

まつ　新兵衛さんは、まゝお出でなさんせぬ。今にもお見えなされたら、早速お知らせ申しませう。

萬七　見れば、遠方からござつたさうな。奥へ御案内申すがいゝ。

二人　畏りました。お二人さん、斯うお出でなされませ。

しも　そんなら母さん、お邪魔ながらあれへ行て

くら　お出でを待ちませう。どなたも御免なされませ。

ト流行り唄になり、皆々奥へ入る。萬七殘り、跡見送り思ひ入れ。

萬七　あの娘は、田舍者にしては美しいもの。可哀さうに、知らぬが佛とはいひながら、身を投げて死んだ玉屋新兵衛、それを尋ねて來るとは、ハテ怪しからぬ事。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、藤兵衛、しみつたれの拵へにて出て來り

藤兵　萬七さん、これにお出でなされますか。

萬七　イヤア、藤兵衛さん、今日は小女郎に附いて箱廻しか。御苦勞々々々。

藤兵　妹の小女郎も、町藝者の今日が店開きサ。男が間に合はぬから、わしが附いて參つたら、このやうなしみつたれな形ゆゑ、兄弟だと云ふと外聞が惡いと申しまする。高慢な奴サ。

萬七　其やうに述懷を云はずと、一服のまつしやい。

藤兵　ハイ〳〵、モシ、海が近い所爲か、いゝ風が參ります。ドリヤ、一服いたしませうか。

トこの時、奥より下女、摺り物を持ち、出て來り

下女　モシ〳〵、萬七樣、只今勝手へ、この摺り物をお前に上げてくれろと、持つて參りました。

ト出す。萬七見て

萬七　ハヽア、延壽太夫の弟子の浚ひであらう。時に藤兵衛さん、貴樣名代に行つて、一杯飲んで來さつしやい。

藤兵　畏りました。どこで浚ひをするか。ちよつと摺り物を

ト見て

ハヽア、兩國の大のしだな。女中さん、使ひの人に、酒でも飲まして下され。

下女　ハイ〳〵、畏りました。

ト奥へ入る。

藤兵　モシ、萬七さん、當日には金のいる話しだねえ。

萬七　オヽサ、また痛事よ。それについて藤兵衛さん、この中約束した通り、貴樣の妹の小女郎、支度

金五十兩で、いよ〳〵わしが女房に

藤兵　隨分あげます。支度金五十兩、不躾ながら大金でござります。お前、その當がございますか。

萬七　オヽット、皆まで云ふまい。その支度金の當がある。

藤兵　それはお手柄。して、その出所は

萬七　サア、聞いて下さい。その金の出所といふのは、この間身を投げた玉屋新兵衛の手から、大金になる定家の色紙を、五十兩の質に取つて置いたれば、紛失の色紙を、おれが尋ね出した顏で、里見の屋敷へ上げれば、大枚の金になる。その色紙の盜人は、身を投げた新兵衛に塗りつけて置けば、死人に口なし。その科で親の庄兵衛は牢へ行く、さすれば跡の屋敷出入りはこの萬七。これといふも、この色紙が元手、なんと巧いではないか。

ト懷より箱入りの色紙、袱紗包みの鑑定書を出して見せる。

藤兵　ヤア、そんならそれが大金になる、色紙と折紙でござりまするか。

萬七　オヽサ、その時にはこなたも、その儘では置かぬ。それぢやによつてあの妹を

藤兵　隨分お前に上げませうが、必ず共に帶代の

萬七　五十兩は呑み込んだ。

藤兵　それは有り難うございます。イヤ、それで思ひ出した。この間折角儲けた金を、盗まれぬやうに松山稲荷のお守りへ包んで、隠して置いたのがなくなりました。泥坊の業とも思へず、どうも合點がゆきませぬ。

萬七　泥坊の業でもなく、隠して置いた金を盗まれたとは、そいつはてつきり

藤兵　稲荷様が盗んだのかも知れませぬ。

萬七　何を云ふのだ。

藤兵　左様なら萬七さん、前祝ひに一杯。

萬七　イカサマ、よからう。そんなら藤兵衛、ではない舅どの

藤兵　花婿様。

萬七　サア、來やれ。

ト流行り唄になり、兩人奥へ入る。引ちがへてお倉出て來り、あたりをウロ〳〵見廻しながら

くら　ヤレ〳〵、流石はお江戸の繁華。この内にも美しい女中は澤山、どれが小女郎どのやら。早う逢ひたいもの……モシ、どなたぞちよつと、お頼み申します〳〵。

小女　アイ〳〵。モシ、どなたかお出でなされましたぞえ、

ト合ひ方になり、奥より小女郎、好みの藝者姿にて出て來り

只今お呼びなされたは、あなたでござりますかえ。ようお出でなされました。マア〳〵、あれへお出でなされませ。

くら　イヤ〳〵、必ず構うて下されまするな。わしはお客ではござらぬ。

小女　して、お前さんわえ。

くら　ハイ、わしは近在の田舎婆アでござるが、今日こゝの内へ、江戸藝者の小女郎様とやらが、來てござるさうなが、どゝぞそのお方に、ちよつと逢はせて下さりまし。

小女　その小女郎は、わたしでござります。

くら　ヤア〳〵、小女郎どのとは、お前の事でござりますか。ドレ〳〵

ト前後へ廻り、よく〳〵見て

ほんにマア、姿なら形なら、お優しい女中様。女子のわしでさへ惚れるもの、殿達の惚れるは尤も。ヤレ〳〵、美しい事なア。

小女　モシ〳〵、其やうに云うて下さりますと、わたしやお氣の毒に存じます。

くら　アノマア、云はしやんす事わいなア。瓦を玉とは云ひませぬ。ほんに田舎の正直一遍。お江戸育

ちは又格別……それ〳〵、女中さん、この品はあまり輕少ながら、新製の麥こがし。又これは、畑へ出來た玉蜀黍、お前へ土產にこの婆が、はる〴〵背負うて來ましたわいの。

ト風呂敷包みより、麥こがしと玉蜀黍を出す。

小女　これは〳〵、有り難う存じます。さりながら、一度もお目にかゝつた事のない婆さんが、其やうに云うて下さんすは、わたしやどうも、合點が參りませぬわいなァ。

くら　成る程、合點のゆかぬは御尤も。何を隱しませう、わしは梅田村と申す所の者、お前も御存じであらう、玉屋新兵衛と云ひ號けの、お霜が母でござるわいの。

小女　エヽ、アノ、お前さんが

くら　サア、それについて小女郎さん、わしやこなさんに、賴みがあつて來ました。

小女　して、わたしへのお賴みとわえ。

くら　緣が切つてもらひたい。

小女　そりや誰れさんと、緣を切るのぢやえ。

くら　玉屋の新兵樣樣と

小女　エヽ。

くら　サア、こなさんと、新兵衛どのと、緣が切つてもらひたい。

小女　そりや又なぜでござんすえ。

ト思ひ入れ。合ひ方。おくら、こなしあつて

くら　サア、この婆は以前玉屋のお內へ、雇ひお針のその緣で、わたしが在所へ玉屋の大旦那樣がござつて、どうぞこの娘をくれい、始終は悴新兵衛と添はすと、無理無體の云ひ號け。輕い身分で玉屋の御子息樣と、云ひ約束は娘が仕合せ。お霜が父親は、わしの連合ひの伯父、わしとは生さぬ仲なれど、連合ひと夫婦別れする時、女の子は女に附くが大法と、この婆が引取つて、育てた娘、わしも以前は侍ひの女房ゆゑ、娘にも云ひ聞かせ、嫉妬の心はさておき、恨みつらみも云はねどハテ、そこは何を云うても女の心、辛氣をこらしてこの頃は、ぶら〳〵病ひ。それゆゑ今日來ましたは、外の事でもござらぬ。一旦お前と新兵衛の緣を切り、云ひ號けの娘と、三日たりとも添はせて下さりませ。左樣いたせば娘の命は助かります。モシ、小女郎どの、この母が手を合せて拜みます〳〵。ハテ、その上で、病身を云ひ立て、わしの方へ引取つて、娘は一生後家やもめ。その跡では相談づくで、お前と新兵衛樣と女夫になり、玉屋のお家を、丸う納めたいわしが心底。それといふも、義理ある娘が可愛さ。お前もいとしい男と、緣を切るのは否であらうが、爰の道

理を、聞きわけて下さりませ。

ト此うち小女郎、こなしあつて

小女　成る程、事を分けてのお詞ゆゑ、隨分と聞きわけませう。

くら　縁を切つて下さりますか。

小女　アイ。

くらヤア。

小女　否でござんす。

くらヤ。

小女　ハテ、親類衆は元より、玉屋のお内では、三國屋の小女郎は、丁度三國の姐妃ぢや。人を誑かす

ありや狐藝者ぢやと、人さんにうしろ指さゝれたも、みな新兵衛さんゆゑ。とても異名の附いた

わたしぢやもの、今更どうも、その事ばかりは

くら　ならぬと云はつしやるか。

小女　重ねて云うても下さんすな。

くら　すりや、これ程に譯を云うても

小女　どうもその事ばかりは

くら　ならぬとあれば、この場に於て

ト お倉、床の間にある脇差にて死なうとする。小女郎とめて

小女　マア待つて下さんせ。

くら　そんなら聞きわけて下さんすか。

ト小女郎思ひ入れあつて

小女　サア、わたしが心たつた一つで、三人四人の命とあれば、いかにもお前のお頼みは

くら　聞き屆けて下さるか。

小女　萬事はわたしに

ト お倉の刃物を押へて

お任せなされて下さりませ。

ト思ひ入れ。嗔になり、道具廻る。

本舞臺、三間の間、常足の二重、正面違ひ棚、三尺の瓦燈口、上手に小座敷、左右四つ目垣、植込み、

門口に吊り燈籠。舞臺よき所に交貼りの屏風。茅門の門口。この外下の方料理屋の半障子、これに明立てあり、誂への通り。爰に官藏、竹川、奥女中のなり、萬七、お松以前の形、庄兵衛、老けたる拵へにて扣へてゐる。酒肴み取散らし、各〻よろしく住ひ、酒盛りの體、流行り唄にて道具とまる。

萬七　コレ〳〵、女中、只今申しつけたお肴を、早く頼みます。

まつ　ハイ〳〵、畏りました。

官藏　イヤモウ、終日の馳走忝い。時に、小女郎はいづれへ參つた。

萬七　只今着替へに參つたと見えます。

まつ　其うち一つ召上がりませ。

庄兵　御酒宴なかばへ、斯樣申すも如何なれど、只今お願ひ申し上げましたる通り、何卒紛失の色紙、詮議の日延べを、今少しの間、お願ひ申し上げまする。

官藏　ヤア、又しても〳〵、日延べの願ひは叶はぬぞ。色紙が紛失すれば

竹川　おろそかならぬお家の大事。さすれば其許のお身にも係はる事。

萬七　それになんだ、僅かな物を失なしたやうに、日延べ〳〵と小うるさい。

官藏　重ねて申すな、叶はぬぞ。

萬七　此やうな事はぶん流して、一つお上がりなされませ。

官藏　然らば其方に遣はす。

萬七　有り難う存じまする。

ト流行り唄になる。皆々酒盛りになり、この唄をかりて向うより新兵衛、絹やつし、一本差しにて出て來り

新兵　あの萬七は、今日屋敷衆の振舞ひゆゑ、この武藏屋へ來てゐるとの事。どうぞ逢つてこの間の品を、請け戻したいものだが、何は兎もあれ武藏屋へ行つて

ト門口へ來て、内へ入らうとして、庄兵衛がゐるゆゑ、門口の外に窺ひゐる。

庄兵　只今これなる官藏樣へ、お頼み申せどお取上げはござりませぬ。この上は竹川樣へ一つのお願ひ何卒賓詮議の日延べを

竹川　成る程、たつての願ひとあれば、日延べ申しつけても遣はさうが、して、それには何ぞ手がゝりが

庄兵　サ、その手がゝりと申しては

官藏　あるまい〳〵。その色紙は、悴新兵衛が盗み出し、それを賣つて藝者狂ひとの事。